

Japanese Association of Qualitative Psychology

# 日本質的心理学会 第16回大会

大会テーマ

むすぶ

2019年

9月21日(土)~22日(日)

明治学院大学 白金キャンパス

(東京都港区白金台1-2-37)





日本質的心理学会第16回大会  
プログラム抄録集

明治学院大学



## 開催のご挨拶

このたびの大会テーマは「むすぶ」としました。

学会とは、人と人とをむすぶためにある場所だと思います。

これから研究にとりくむ高いところごしをもった若手の研究者と著名なベテラン研究者を、あたらしい研究テーマやその進め方のヒントをさがしている研究者とその人にとって貴重な研究のアイデアを、われわれ日本の研究者と海外で活躍する研究者を、あるいは質的研究と量的研究にたずさわる研究者をむすぶ役割さえ学会は果たすかもしれません。

本学白金キャンパスは、都内の主要駅からアクセスしやすい恵まれた立地にはありますが、残念なことに大学近辺には京都の哲学の道のような散策するのに向いた小径も、情緒豊かでおもむきのある商店街もありません。その代わり、大石内蔵助率いる赤穂浪士が葬られていることで有名な泉岳寺や、2020年の東京オリンピックにあわせて暫定的開業をめざしている高輪ゲートウェイ駅が徒歩圏（いずれも本学よりおよそ1kmの距離）にあります。ご関心のある方はこの機会に足を伸ばしてみてください。

ヘボン式ローマ字を考案した宣教師のジェームス・C・ヘボンにより開設されたヘボン塾を起源とし、2013年には創設150周年を迎えた明治学院には、いくつかの歴史的建造物が点在しています。正門より向かって左手に見える礼拝堂（チャペル）は、日本に数多くの歴史的建造物を残したW. M. ヴォーリズにより設計され1916（大正5）年に竣工し、本学のキリスト教主義教育のシンボルとして保存修理が重ねられて当時の姿を残しています。礼拝堂内に設置されたパイプオルガンは17～18世紀の音色の再現をめざして失われていた工法で作成された貴重なものです。また向かって右手に見えるネオゴチック様式の赤煉瓦と木造の連繋構造が特徴的な建物は「記念館」と呼ばれ、1890（明治23）年に竣工されました（プログラム抄録集の表紙中央下部の建物です）。建設当時に本学学生だった島崎藤村による小説「桜の実の熟する時」には当時の記念館の様子が描写されています。これまでに記念館と礼拝堂はいずれも「東京都港区有形文化財」および「東京都港区景観上重要な歴史的建造物等」の指定を受けています。

学会当日も礼拝堂の前で足をとめればパイプオルガンの音色が聞こえるかもしれません。

このたびの大会が参加者の皆さまにとってよい「むすび」の場となることをこころから願っております。

日本質的心理学会第16回大会準備・実行委員長

野村信威

# 目次

1. 大会参加者へのご案内 .....	1
2. 大会企画概要 .....	3
3. 会場へのアクセス .....	5
4. 会場案内 .....	6
5. 大会スケジュール .....	8
6. 大会プログラム・抄録	
(1) 大会企画招待講演 .....	10
(2) ワークショップ.....	16
(3) 大会企画シンポジウム・委員会企画シンポジウム.....	18
(4) 会員企画シンポジウム.....	26
(5) ポスター発表 .....	65

# 1. 大会参加者へのご案内

## 1) 大会概要

大会テーマ：「むすぶ」

第16回大会HP：<http://www.shitsushin16.jp/index.html>

日本質的心理学会HP：<http://www.jaqp.jp>

第16回大会メールアドレス：[jaqp2019@gmail.com](mailto:jaqp2019@gmail.com)

会期：2019年9月21日（土） - 22日（日）

場所：明治学院大学白金キャンパス

## 2) 大会参加について

受付場所および時間：2号館1階エントランス（9月21日、22日ともに9：00開始）

### ① 大会参加事前申し込みの方

入金済みの方には事前に大会抄録、参加証と領収書が発送されています。受付でネームホルダーを受け取り、各会場へお越してください。未入金の方は、当日受付にてお支払いください。

### ② 大会当日参加申し込みの方

当日参加の方は受付でご記名後参加費をお支払ください。参加費、懇親会費は下記の通りです。

大会参加費（当日） 一般会員・非会員 6000円 学生会員 4000円

懇親会費（当日） 一般会員・非会員 5000円 学生会員 4000円

\*学生会員の方は学生証をご提示ください。聴講生、研究生は学生に含まれます。

\*大会初日の開始時刻前後は受付の混雑が予想されます。時間にはゆとりをもってお越しください。ようお願い申し上げます。

\*大会期間中のお知らせや変更は、受付の掲示スペースにてお知らせいたします。

\*期間中には日本質的心理学会デスクが設置されます。入会等の各種問い合わせはこちらにお願いします。

## 3) クローク

大会期間中、本館2階（地上階）1251教室にクロークを設け、皆さまのお荷物をお預かりいたします。利用時間は9/21（土）9:00-18:00および、9/22（日）9:00-16:00です。ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。なお貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理していただきますようお願いいたします。

## 4) 学内無線LANの使用について

本学では学術無線LANローミング基盤サービスである「**eduroam**」を導入しています。ご自身が所属する学術機関でアカウントを作成されている方は、本学キャンパス内の公共スペースで学内無線LANを無料でご使用いただくことが可能です（詳しくは以下のサイトをご確認ください。

<https://www.eduroam.jp>）。

なお、大会事務局では無線LANの接続方法についてのお問い合わせにはお答え出来ませんのでご了承ください。

#### 5) 懇親会

大会1日目(9/21)18時より、白金キャンパス本館10階大会議室にて懇親会を開催します。今大会の招待講演者や学会理事の先生方をはじめとする多くの研究者と交流することが出来る貴重な機会となります。本学会会員、学生会員ばかりでなく非会員の方の参加も可能です。当日申込みも可能ですので奮ってご参加ください。

#### 6) 昼食

大会1日目(9/21)にはパレットゾーン白金1階の食堂が営業しています。営業時間は11:30-13:30の予定です。大会2日目(9/21)は学内の食堂の営業はございませんが、総会に予約参加されている方にはお弁当をご用意しています。大会期間中はパレットゾーン前にフードトラックを手配しています。またキャンパス近辺には複数のコンビニエンスストアもございます。

#### 7) 休憩・喫煙に関するご注意

パレットゾーン白金1階の食堂および2階のさんサン広場の一部(ポスター発表および書籍販売スペースをのぞく)は、休憩スペースとしてもご利用可能です。なおゴミにつきましてはなるべくお持ち帰り頂きますようお願いいたします。また、喫煙場所は本館北ウィング外部1階にのみあります。喫煙場所以外での喫煙は禁止されていますのでご協力のほどよろしくお願いいたします。

#### 8) 会員控室(打ち合わせ室)

シンポジウムの打ち合わせには、本館2階(地上階)1252教室をご利用下さい。

#### 9) 書籍の展示・販売

大会期間中には書籍販売とソフトウェアの展示をパレットゾーン白金2階のさんサン広場で行いますのでお立ち寄りください。

## 2. 大会企画概要

第16回大会では下記の招待講演とワークショップ、シンポジウム、ポスター発表、大会プレ企画を開催いたします。

### 【招待講演】

9月21日（土）13：30～15：30 2号館 2301教室

「REMAINING ELEGANT：Fifteen years of qualitative psychology in Japan（エレガントなままで：日本における質的心理学の15年間）」

ヤーン・ヴァルシナー教授（オールボー大学教授／”Culture & Psychology”誌創刊者）

9月22日（日）10：00～12：00 2号館 2301教室

「The Value of Combining Qualitative and Quantitative Research：A Mixed Methods Perspective（質的研究と量的研究をむすぶ意義：混合研究法の観点から）」

ジョン・W・クレスウェル教授（ミシガン大学教授／国際混合研究法学会創設者）

ヴァルシナー教授は複線径路等至性モデリング（TEM）の共同開発者の一人でもあり、これまで日本の質的研究の発展に尽力されてきました。一方クレスウェル教授は、国際混合研究法学会（MMIRA）の創設メンバーのひとりであり、質的研究や混合研究法に関する多くの優れた著作を執筆しています。本大会は世界的に著名な二人の質的研究者の講演を聴くことが出来る貴重な機会です。

### 【ワークショップ】

大会1日目の10時より「ビジュアル・ナラティヴの理論と方法（講師：やまだようこ）」「PAC分析の理論と実践 -技法の有効性を引き出すためのポイント-（講師：内藤哲雄）」の2件のワークショップを企画しました。いずれも参加費は無料です。

### 【シンポジウム】

本大会では、大会企画シンポジウム1件、委員会企画シンポジウム3件、そして会員企画シンポジウム19件を開催いたします。それぞれのシンポジウムの開催日時および会場につきましては大会プログラムをご参照ください。

シンポジウム会場には、マイク、プロジェクター、PC接続用ケーブルをご用意しています（接続ケーブルの仕様はD-Sub15ピンです。Mac用アダプターのご用意は出来ませんのでご注意ください）。ノートパソコンを使用される場合は発表者ご自身でご用意ください。会場の機器の使用方法は各会場の大会スタッフまでお尋ね下さい。

### 【ポスター発表】

ポスターはパレットゾーン白金2階のさんサン広場において、大会1日目（9/21）の9：30より掲示可能です。発表者は、各自の演題番号を確認して所定のパネルにポスターを貼り付けて下さい。在席責任時間は12:00から13:30です。この時間帯にはご自身のポスター前で待機して質疑応答を行って下さい（スタッフが発表者の在席を確認します）。ポスターは15：30 までに取り外して下さい。片付けられなかったポスターは大会事務局で回収し処分いたします。

所定スペース内でポスターが貼れる範囲は、縦180cm×横90cmです。ポスターの貼付には大会事務局で準備した画鋏をご使用ください。演題番号は事務局で事前に貼付してあります。

<優秀ポスター賞>

本大会のポスター発表のなかから2件を優秀ポスター賞として選出します。大会1日目（9/21）18時から行われる懇親会で表彰式を行います。

【大会プレ企画】

本大会では、以下の大会プレ企画を開催します。

[タイトル] ケアの意味を見つめる事例研究

[企画] 日本質的心理学会研究交流委員会

[概要] 対人援助である看護の実践知を他者が学びその後の実践を改善・変革することのできるような形式知に変換する事例研究方法の開発にとりくんでいる。この事例研究では、実践の本質やコツを短い言葉にまとめ、そのもとで詳細な実践者の一人称的記述を配置する。本セミナーでは、このような事例研究の学問的要件についてのこれまでの考察を紹介した上で、模擬事例を使って分析の第一歩を実体験して頂く。

[日時] 2019年9月20日（金）（第16回大会前日） 14:00～18:00

[場所] 明治学院大学白金キャンパス 本館 1353教室

[講師] 山本則子 教授（東京大学大学院 健康科学・看護学専攻）

[参加費] 日本質的心理学会会員は1,000円、非会員は5,000円

[申し込み時の記載内容] (1)氏名と所属（無所属でも可）、(2)連絡先、(3)研究主題と研究領域、  
(4)応募理由（400字以内）、(5)会員/非会員の別

[申込期間] 2019年7月20日～（定員に達し次第終了）

[定員] 20名

[申込・問い合わせ] <https://forms.gle/N143TcsBwCUgmVVe8>

### 3. 会場へのアクセス



明治学院大学白金キャンパス 東京都港区白金台1-2-37

### 各駅からのアクセス

**品川駅から** [JR山手線・京浜東北線・東海道線・横須賀線・東海道新幹線/京浜急行線]  
高輪口より都営バス「目黒駅前」行きに乗り、「明治学院前」下車(乗車約6分) ※徒歩約17分

**目黒駅から** [JR山手線/東急目黒線/東京メトロ南北線/都営地下鉄三田線]  
東口より都営バス「大井競馬場前」行きに乗り、「明治学院前」下車(乗車約6分) ※徒歩約20分

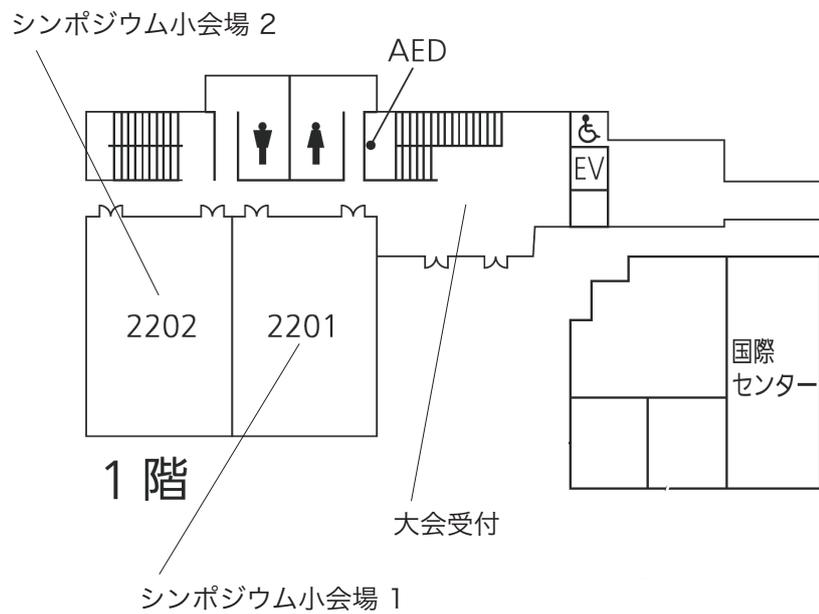
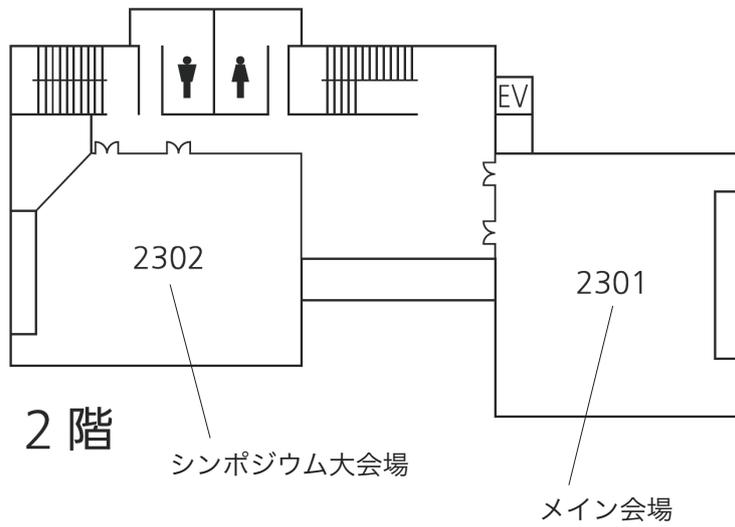
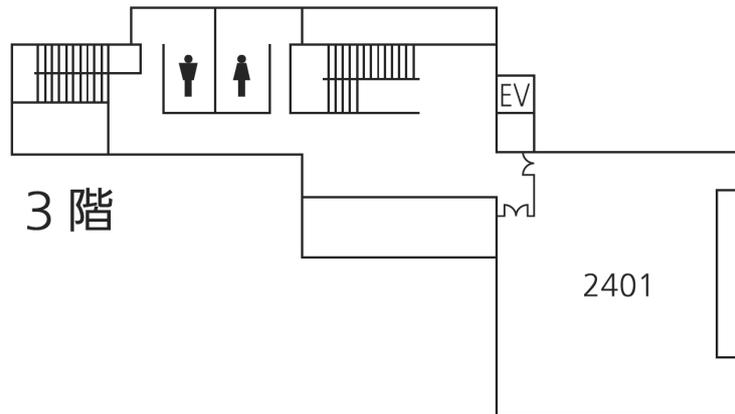
**白金台駅から** [東京メトロ南北線/都営地下鉄三田線]  
2番出口(白金高輪側 / エレベーター有)より徒歩約7分

**白金高輪駅から** [東京メトロ南北線 / 都営地下鉄三田線]  
1番出口(目黒側 / エレベーター有)より徒歩約7分

**高輪台駅から** [都営地下鉄浅草線]  
A2番出口より徒歩約7分



2号館館内図





# 質的心理学会第16回大会タイムテーブル

## 9月22日(日)

受付 (2号館入口)	メイン会場 (2301教室)	シンポジウム大会場 (2302教室)	シンポジウム小会場1 (2201教室)	シンポジウム小会場2 (2202教室)	シンポジウム小会場3 (1253教室)	シンポジウム小会場4 (1254教室)	ポスター会場 (インナー広場さんサン) (本館10階大会議室)	懇親会場 (本館10階大会議室)
9:00 受付開始								
9:30	(10:00-12:00)							
10:00	招待講演 The Value of Combining Qualitative and Quantitative Research: A Mixed Methods Perspective John W. Creswell		委員会企画シンポジウム 「病いの語り」再考 質的心理学フォーラム編集委員会	委員会企画シンポジウム 質的研究で挑戦する： 学会賞受賞論文を聴く 研究交流委員会	会員企画シンポジウム13 テクノロジー、自然、行政の 交歓が創る未来社会 企画者：香川秀太	会員企画シンポジウム14 TEA研究の発展可能性 について考える 企画者：上川多恵子		
10:30								
11:00								
11:30								
12:00								
12:30		総会 (12:15-13:15)						
13:00								
13:30	委員会企画シンポジウム 質的研究法の拡張 機械、AI、インターネット 『質的心理学研究』編集委員会	会員企画シンポジウム15 現代の病い経験を捉える新しい 概念生成に関する現象学的研究 企画者：坂井志織 (13:30-15:30)	会員企画シンポジウム16 インタビュアーにおける 相互作用 企画者：土元哲平	会員企画シンポジウム17 いまこそ、カイ・T・エリック ソン『Everything in Its Path』を読み直す 企画者：宮前良平	会員企画シンポジウム18 実践共同体におけるアイデ ンティティ概念の再考 企画者：横山草介	会員企画シンポジウム19 『看護社会学』 のもくろみ 企画者：樫田美雄		
14:00								
14:30								
15:00								
15:30								
16:00								
16:30	受付終了							
17:00								

書籍販売開始

書籍販売終了

## 6. 大会プログラム・抄録

大会企画招待講演 9月21日（土）13:30-15:30 2号館 2301教室

### REMAINING ELEGANT : Fifteen years of qualitative psychology in Japan

エレガントなままで：日本における質的心理学の15年間

Jaan Valsiner

Aalborg University, Denmark

司会・通訳：サトウタツヤ

(立命館大学総合心理学部)



#### 略歴

1997-2013 Professor, Department of Psychology, Clark University, Worcester, Ma.

2013-2018 Niels Bohr Professor of Cultural Psychology, Aalborg University, Denmark

2018- Professor of Psychology, Aalborg University, Denmark

**Jaan Valsiner** is a cultural psychologist with a consistently developmental axiomatic base that is brought to analyses of any psychological or social phenomena. He is the founding editor (1995) of the Sage journal, *Culture & Psychology*. From 2013 to 2018 he was the **Niels Bohr Professor of Cultural Psychology** at Aalborg University, Denmark where he continues his research on cultural psychology, in combination with collaboration with University of Luxembourg and Sigmund Freud Privatuniversität Wien in Austria and in Berlin. He has published and edited more than 40 books, the most pertinent of which are *The guided mind* (Cambridge, Ma.: Harvard University Press, 1998), *Culture in minds and societies* (New Delhi: Sage, 2007), *Invitation to Cultural Psychology* (London: Sage, 2014) and *Ornamented Lives* (Charlotte, NC: Information Age Publishers, 2018). He has been awarded the *Alexander von Humboldt Prize* of 1995 in Germany, and the *Hans-Kilian-Preis* of 2017, for his interdisciplinary work on human development. Previously while working in the United States he was a recipient of a *Senior Fulbright Lecturing Award* in Brazil 1995-1997. He has been a visiting professor in Brazil, Japan, Australia, Estonia, Germany, Italy, Luxembourg, United Kingdom, and the Netherlands. Since 2017 he is a *Foreign Member of the Estonian Academy of Sciences*.

E-mail: jvalsiner@gmail.com

## 講演者紹介

ヤーン・ヴァルシナー教授は発達の公理を基盤にした文化心理学者で、その立場からあらゆる心理的、社会的現象を検討している。

1995年に”Culture & Psychology”誌（Sage社）を創刊して主幹編集者であり続ける。2013年から2018年までデンマークのオールボー大学のNiels Bohr記念文化心理学講座教授。”The guided mind” “Culture in minds and societies” “Invitation to Cultural Psychology”など40冊以上の著作がある。これまでの人間発達領域における学際的な研究が評価され、1995年にドイツでAlexander von Humboldt Prizeを、2017年にはHans-Kilian-Preisを受賞した。1995-1997年にはブラジルでSenior Fulbright Lecturing Awardを受賞した。ブラジル、日本、オーストラリア、エストニア、ドイツ、イタリア、ルクセンブルグ、英国、オランダで客員教授を務める。2017年よりエストニア科学学会（the Estonian Academy of Sciences）における外国人メンバー。

2004年に初来日以来、様々な心理学者たちと親交を結ぶ。複線径路等至性モデリング（TEM）の共同開発者の一人。2003、2018、2019年度・立命館大学客員教授。

## Publications

Valsiner, J. (1998) *The guided mind*. Cambridge, Ma.: Harvard University Press.

Valsiner, J. (2007) *Culture in minds and societies: Foundations of Cultural Psychology*. New Delhi: SAGE Publications.

Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology*. London: SAGE Publications.

Sato, T., Mori, N, and Valsiner, J. (Eds.) (2016) *Making of the future: The Trajectory Equifinality Approach in Cultural Psychology*. Charlotte, NC: Information Age Publishers.

Valsiner, J. (2017). *From methodology to methods in human psychology*. New York: Springer.

Valsiner, J. (2018) *Ornamented Lives*. Charlotte, NC: Information Age Publishers.

## 主な著作（翻訳書）

ヤーン・ヴァルシナー（著）サトウタツヤ（監訳）（2013）新しい文化心理学の構築：〈心と社会〉の中の文化 新曜社

## REMAINING ELEGANT : Fifteen years of qualitative psychology in Japan

Jaan Valsiner  
Aalborg University, Denmark

Psychology as science is, and has been—with the exception of most of the 20th century—qualitative in its nature. Most—if not all- psychological phenomena are in principle not quantifiable—that nature of the phenomena renders the practices of quantification non-scientific. The emergence of the qualitative direction in psychology in Japan in 2005 is an indicator of the appreciation of the nature of the complex psychological forms and their dynamics. The TEA (Trajectory Equifinality Approach) developed by Tatsuya Sato has been an elegant proliferation of new research methodology together with societally sensitive contribution of psychology to human general well-being. For further development of this elegant perspective I will outline a possibility of field-theoretical extensions of the TEA.

### エレガントなままで：日本における質的心理学の15年間

ヤーン・ヴァルシナー  
オールボー大学, デンマーク

科学としての心理学は、20世紀を例外とすれば、その性質は質的なものであった。全てではないにしても、殆どの心理学的現象はその原理からして量化可能なものではない。心理学的現象のこうした性質は、量化という実践を非科学的なものにしてきた。（日本質的心理学会の設立という）2004年の日本の心理学界に起きた質的な方向への舵取りは、複雑な心理（学）的な諸形式やその力動性の性質を理解していることの指標そのものである。TEA（複線径路等至性アプローチ）は、人間の一般的なウェル・ビーイングに対する社会に敏感な心理学的貢献と共にある、新しい研究アプローチの優雅な豊穡化なのである。この優雅なパースペクティブがさらに発展するために、私はTEAの現場－理論的拡張の可能性についてその概要を描いてみたい。

## The Value of Combining Qualitative and Quantitative Research : A Mixed Methods Perspective

質的研究と量的研究をむすぶ意義：混合研究法の観点から

John W. Creswell, Ph.D.  
University of Michigan, USA

司会：いとう たけひこ  
(和光大学現代人間学部)

コラボレーター・通訳：廣瀬 真理子  
(関西学院大学大学院文学研究科)

### 略歴

PhD 1974 University of Iowa  
College leadership and Sociology  
MA 1972 University of Iowa  
Student Affairs and Counseling  
BA 1967 Muskingum College  
History and Political Science



Professor of family medicine and co-director of the Michigan Mixed Methods Program at the University of Michigan. He has authored numerous articles and 28 books on mixed methods research, qualitative research, and research design. While at the University of Nebraska-Lincoln, he held the Clifton Endowed Professor Chair, served as Director of the Mixed Methods Research Office, founded SAGE's *Journal of Mixed Methods Research*, and was an adjunct professor of family medicine at the University of Michigan and a consultant to the Veterans Administration health services research center in Ann Arbor, Michigan. He was a Senior Fulbright Scholar to South Africa in 2008 and to Thailand in 2012. In 2011, he co-led a National Institute of Health working group on the "best practices of mixed methods research in the health sciences," served as a visiting professor at Harvard's School of Public Health, and received an honorary doctorate from the University of Pretoria, South Africa. In 2014, he was the founding President of the Mixed Methods International Research Association. In 2015, he joined the staff of Family Medicine at the University of Michigan to Co-Direct the Michigan Mixed Methods Program. In 2017, he co-authored the American Psychological Association "standards" on qualitative and mixed methods research. In 2018 his book on "Qualitative Inquiry and Research Design" won the Textbook and Academic Author's 2018 McGuffey Longevity Award.

## 講演者紹介

ミシガン大学教授（家庭医療部門）ならびにMMRプログラムの共同ディレクター。混合研究法、質的方法論、一般的な研究デザインに関する多くの論文、28冊の著書を執筆している。ネブラスカ-リンカーン大学においてはClifton Endowed Professor Chair, Director of the Mixed Methods Research Officeを務めた。混合研究法の学術雑誌 (SAGE) Journal of Mixed Methods Researchの創刊において、共同編集長として携わった。また、ミシガン大学家庭医療学科のadjunct教授、ミシガン州アナーバーにある退役軍人管理局医療サービス研究分野におけるコンサルタントとしても広く貢献した。シニアフルブライトスカラーとして2008年には南アフリカ、2012年にはタイに赴いた。2011年にはアメリカ国立衛生研究所（NIH）の混合研究法ガイドライン作成のための全国分科会の共同リーダーを務めている。また、2013年にはハーバード大学公衆衛生学部の客員教授を務め、2014年には南アフリカプレトリア大学の名誉博士号を授与されている。2015年に世界混合研究法学会（MMIRA）の初代議長を務めた。2017年のAPA論文作成マニュアルにおいて、質的研究・MMRの執筆基準に関する共同著者となっている。彼の「Qualitative Inquiry and Research Design: Choosing Among Five Approaches」は、全米学術教科書・学術者協会から卓越した学術教科書の1冊として2018年度のMcGuffey Longevity Awardを受賞している。

## Publications <https://www.johnwreswell.com/books>

J W. Creswell & J D. Creswell (2018) Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches Fifth Edition SAGE

J W. Creswell & Vicki L. Plano Clark (2018) Designing and Conducting Mixed Methods Research 3rd Edition SAGE

J W. Creswell (2015) A Concise Introduction to Mixed Methods Research SAGE

J W. Creswell (2016) 30 Essential Skills for the Qualitative Researcher SAGE

J W. Creswell (2019) Educational Research: Planning, Conducting, and Evaluating Quantitative and Qualitative Research 6<sup>th</sup> edition Merrill Education

## 主な著作（翻訳書）

John W. Creswell（著）操華子・森岡崇（訳）(2007) 研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法 日本看護出版協会

J. W. クレスウェル & V. L. プラノクラーク（著）大谷順子（訳）(2010) 人間科学のための混合研究法: 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン 北大路書房

ジョンW. クレスウェル（著）抱井尚子（訳）(2017) 早わかり混合研究法 ナカニシヤ出版

## The Value of Combining Qualitative and Quantitative Research : A Mixed Methods Perspective

John W. Creswell, Ph.D.

Mixed Methods Program, University of Michigan, USA

A common misconception about mixed methods research is that this methodology assigns a subordinate role to qualitative research and a primary role to quantitative research. This is not my position: I believe in the equality and legitimacy of both quantitative and qualitative research. This equality is shown in mixed methods designs that favor qualitative research; in studies that encourage rigorous qualitative inquiry; in the use of specific qualitative designs such as ethnographies, case studies, and grounded theory; and in recent mixed methods books and articles that highlight the importance of a qualitative-dominant mixed methods project. As an individual trained in both quantitative and qualitative research, I believe in a “balanced” approach to mixed methods that highlights the importance of both forms of inquiry.

### 質的研究と量的研究をむすぶ意義：混合研究法の観点から

ジョン・W・クレスウェル

ミックスメソッドプログラム ミシガン大学

混合研究法についてのよくある誤解の1つに、この方法論は二次的な役割を質的研究に、主要な役割を量的研究に割り当てるというものがある。これは私の見解ではない。私は質的研究、量的研究のいずれの平等性、正当性も信じている。この平等性は、質的研究を支持する混合研究法デザインにおいて、厳密な質的研究を奨励する研究において、エスノグラフィーやケーススタディ、グラウンデッドセオリーといった特定の質的研究デザインの使用において、そして質的研究優位の混合研究プロジェクトの重要性を強調する近年の混合研究の本や論文において示されている。量的・質的研究法のどちらの訓練も受けた個人として、私は混合研究法がどちらの研究の様式の重要性も強調する“バランスのとれた”アプローチであると確信している。

## ビジュアル・ナラティブの理論と方法

講師：やまだようこ（立命館大学OIC総合研究機構）

ビジュアル・ナラティブとは、視覚イメージによる「ものがたり (narrative)」をさす。ものがたりとは、経験を組織化するしかたであり、経験を意味づける行為である。

人は狭義の言語だけで語るのではなく、ビジュアルによっても語る。ビジュアルは、もの語りを生成する相互行為 (interaction) の媒体として、あるいはビジュアル自体がナラティブの一種として扱われる。

ビジュアル・ナラティブは、狭義の言語とは異なる特徴をもつ、優れた語り様式である。また、通常の対面的な対話「二項関係」とは異なる、並ぶ関係「三項関係」による対話の場をつくりだす。

今までも臨床実践などで、視覚的イメージは重視されてきた。なぜ、ビジュアル・ナラティブという新しい用語が必要なのだろうか。ビジュアル・ナラティブは、旧くて新しい概念である。21世紀以降のナラティブ・ターンをふまえているかどうか新旧の境界である。なぜなら、ビジュアル・ナラティブは、「主観」と「客観」に二元分割されてきた従来の心理学とは異なり、人間観が根本的に変革されたナラティブ・アプローチの一環だからである。

また、今までも心理学では視覚イメージを多用してきた。しかし、ビジュアル・ナラティブは、かつてのように研究素材つまりビジュアル・データとしたり、論述の証拠資料として写真やグラフを使ったりする方法とは根本的に異なる。

ビジュアル・ナラティブは、それ自体がビジュアル特有の「テキスト」であり、独特の「経験の組織化のしかた」「語り方」「コミュニケーション方法」をもつので、その特徴を生かすべきであろう。

ビジュアル・ナラティブは、言語によって構成される時間構造や概念枠組を超え、イメージを飛躍させ、感性や感情の交流を容易にする。また、文化・社会的文脈や多様性を重視した、異文化コミュニケーションに威力を発揮する。対面的な二項関係から、並ぶ関係の三項関係へと人間関係を変え、新しい対話的支援や教育方法を生み出すと考えられる。

本ワークショップでは、簡単なビジュアル・ナラティブのワークを実践し、その体験を通して、「ビジュアル・ナラティブの理論と方法」について考える。

ビジュアルでないと語れないことは何か、ビジュアルとことばで語ることの相違は何か、ビジュアルは教育や支援やケアなどにどのように役立つかを、参加者と共に考えてみたい。

(ワークショップには、人数制限を設けませんので、どなたでも参加可能です。参加者は、A4白紙3枚と描画・筆記用具を御持参ください。)

## PAC分析の理論と実践 - 技法の有効性を引き出すためのポイント -

企画・司会：いとう たけひこ（和光大学現代人間学部）

講師：内藤 哲雄（明治学院大学国際平和研究所）

開発の動機は、実験社会心理学を主専攻とした後に、6年6ヵ月にわたって臨床心理学担当の専任の職に就き、再び元来の専門である社会心理学の講座を担当するようになった経緯による。PAC分析のPACは、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略称であり、“パック”と発音される。当該テーマに関する自由連想（アクセス）、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスターのイメージや解釈の報告、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。当該テーマに関する検査項目を対象者自身が連想し、ただ一人の対象者が暗黙のうちにもつ潜在構造を、その人の回答した類似度距離行列を用いてクラスターを算出する。ついで、被検者に寄り添いながら、被検者のクラスターや項目のイメージ報告を検査者が間主観的に了解していくところに特異性がある。繰り返しデータがなく、平均値も分散もないのに、記述統計学を援用して、当該個人独自の態度やイメージの構造を分析する。典型者、少数の該当者、個々人の個人分析に適している。

PAC分析では、独自の体験を含めて当該現象に関連すると本人が感じるすべての変数にアクセスすることから、主体的、独自の、創造的、歴史的、社会的、超越者的な、当該個人特有の全体構造の分析となる。Allportが指摘しているように、個人のパーソナリティには、全ての人のもつ「共通特性」と個人独自の「個人特性」の二種の特性が存在する。パーソナリティ検査には行動予測力がないといわれる。これは、個人特性を無視して、共通するパーソナリティ変数（だけ）では個人の行動予測力が高くないことを示すものである。態度についても同様のことがいえる。個人分析の結果は、Lewinの場理論、Jungのコンプレックス構造、Berneの交流分析(TA)での脚本分析、Gendlinのフォーカシング、認知行動療法など、個に関する多様な実践、研究に利活用できる。被検者が長期記憶や暗黙裡の潜在構造にアクセスしやすくなるような、検査者の読み上げや応答のスピードや間の取り方をし、同行しながら探索を繰り返し要請する技術が、通常ではアクセス困難な内界深くの潜在構造を引き出す。事例を操作的、客観的に分析でき、当該テーマについてアクセスされた被検者の内界を、検査者が同行しながら了解していく過程は、第三者が了解していく過程ともなりえる。コンサルテーションのツールとして有効で、学位論文の主査や副査が事例を理解していく手段ともなる。ただし、「操作的・実験的・（記述）統計学的手法と、間主観的・カウンセリング的・事例記述的手法の両方が包含されており、両技法を習熟しているものは少ない。ワークショップでは、他の理論や技法との違い、潜在的イメージの持つ意味、研究テーマの発見法、被検者の内界探索の方法、価値創造的な解釈の仕方を実習形式も含めて実践的に学ぶ場としたい。

## 質的心理学の境界, そして越境

— 『質的心理学辞典』を質的研究の学びにどう生かしていくか —

企画：『質的心理学辞典』編集委員会 / 大会準備・実行委員会

司会：能智正博（東京大学大学院教育学研究科）

話題提供：鈴木聡志（東京農業大学教職学術情報課程）

香川秀太（青山学院大学社会情報学部）

指定討論：西村ユミ（首都大学東京大学院人間環境科学研究科）

樫田美雄（神戸市看護大学看護学部）

### 企画趣旨

本学会は、これまでも折に触れて質的研究に関連する書籍の編集・出版を行ってきた。2004年の『ワードマップ 質的心理学』, 2008年の『質的心理学講座』（全3巻）, 2013年の『質的心理学ハンドブック』などがそれにあたる。その延長線上に、本学会設立15周年の記念の意味も込めて2018年に上梓されたのが、『質的心理学辞典』である。同書は、質的研究の理論と方法、関連する人物名、および研究テーマに関わるキーワードを1098項目選び、それぞれを簡潔に解説した小項目辞典である。7名の編者委員のもと、本学会の会員を中心に252名の執筆者が選ばれ、400ページ以上になるボリュームで出版された。

学会の企画に基づくこうした辞典の編集・出版は、ある意味で現時点の質的心理学の境界を画定するという機能をもつ。どの用語を選ぶか・どれを外すかの判断は、実際には一筋縄ではいかず、結果的にその選択は質的心理学を構成する概念の範囲を示すことになるからである。しかし、そんなに簡単に境界を決められないのも質的心理学の特徴であろう。実際、本辞典には、心理学の領域に収まらない項目も多数含まれている。こうした見出し語の選択と定義は、質的研究の到達点を確定しようとする試みであると同時に、自由でおおらかな発展を妨げる危険性もそこに生じるという両義性をもつかもしれない。

本シンポジウムでは、辞典という書物がもつこうした両義性を前提にしつつ、『質的心理学辞典』で何が達成され何が課題として残ったのかを検討する。その上で、質的心理学の研究者として、あるいはそれを学ぶ学生として、この辞典をどのように使っていけばよいかを考える足掛かりを提供したい。まずは編集委員会委員から、編集委員会サイドから見た質的心理学の広がり今回の辞典の役割等について話題提供する。その上で社会学、看護学といったいわゆる心理学以外の領域の研究者の視点から、今回の辞典の意義と可能性、および限界についても議論する。

話題提供「心理学と社会学の境界, 質的心理学とそれ以外の心理学の境界, 用語の歴史」（鈴木聡志）

『質的心理学辞典』編集委員7名は全員が心理学研究者であるが、項目選定にあたっては社会学、教育学、看護学など他の学問の用語と人名をあげた。編集会議での項目選定が質的心理学の境界を実質的に定めたと言える。項目の選定の基準が何だったかという、この学会の歴史や、会員が専攻する分野の偏り具合だったように思う。学会が企画したこの辞典が現時点での日本の質的心理学の境界を画定したかもしれないが、ミクロな視点からはその境界は暫定的で偶然の産物である。

マクロな視点で見るとどうか。まず心理学以外の学問として社会学を取り上げ、両者の境界を考えてみる。大澤真幸氏は「社会秩序はいかにして可能か？」が社会学の固有の主題であると言う。これに対して心理学が心理学である所以は、歴史的には実験を代表とする自然科学の方法で心や精神にアプローチすることにあつた。一方は主題が学問のアイデンティティで、もう一方は方法がそれである。社会学と心理学の境界が時にあいまいになるのはそのためだろう。次に質的心理学とそれ以外の心理学との境界はどこにあるのだろうか。本辞典によると、質的アプローチ（手法）をとるかどうかだ。したがってもし質的アプローチを重視するなら、質的心理学は心理学の境界を越えやすくなる。

このため質的心理学においては多種多様な学問分野が共存しやすい。これは研究者にとって発想を豊かにするので良いことであるが、他方で質的心理学内において用語や概念の乱立を招く。本辞典の編集過程では訳語の統一が困難なことがあつた。シンポジウムではconstructionismの訳語をめぐる議論を紹介し、用語の理解のためにはその歴史的背景を知ることが大切であることを述べたい。

#### 話題提供「孤独な自由、面倒な共同体、そして？：ポスト活動理論と交歓分析」（香川秀太）

これからの質的研究は、資本制システムの負を乗り越えた先の「未来の社会構造（世界システム）」を（芸術的に）創造していく時代に入っていくと考えている。あるいは、質的研究のみならず、学界全体として、その時代に突入しつつあるように感じる。

すなわち、「未来の社会構造」という〈共〉を結節点として、各々異なる歴史性を歩み、特異性を発達させてきた個々の学問領域、諸実践、人、モノ、生物が、それらの特異性を消失させることなく、交歓・結合していくようになると思われる（その傾向はすでに現れている）。

ここで問いが生まれる。

- ・未来の社会構造とは、いかなるものか？
- ・各々の特異性はいかに結合（交歓）することが可能か？

例えば、未来社会においては、直線で描かれてきた時間は多層的で螺旋的になり、権力関係や階層性はトップダウンでもボトムアップでもフラットでもなくなる。

この傾向は、研究業界よりもむしろ実践の場の方が顕著かもしれない。

こうした時代の中で、研究者は何をどう演じることができのだろうか。私は、その一つとして、現場の調査やデザインに身を置きつつ、未来の社会構造の芽を読み取り、拡張していくような研究（交歓分析）ではと考えている。

新しい社会は、互助はあれども贈与返礼関係に束縛する共同体、福祉国家下で保護はされるが規律に縛られる主体、新自由主義下での孤独な自由、これらが存在しながらもそれらを超えていく社会である。人類が地球に不要と言われないためにも、そのような世界システムの形成のために、質的研究のこれまでの諸成果を含め、あらゆるアクターが動員されていく必要があり、そのデザインがポスト質的研究の活動たりえると考える。

## 「病いの語り」再考

企画・司会：西倉 実季（和歌山大学教育学部）

近藤 恵（大阪医科大学中山国際医学医療交流センター）

篠木 絵理（東京医療保健大学千葉看護学部）

話題提供：鷹田 佳典（日本赤十字看護大学看護学部）

柊中 智恵子（熊本大学大学院生命科学研究部）

川端 康雄（大阪医科大学神経精神医学教室）

### 企画趣旨

このシンポジウムは、『質的心理学フォーラム』第11号の特集「『病いの語り』再考」をもとに、質的心理学領域における「病いの語り」に関する議論をより深めようとするものである。

特集でねらいとしたのは、これまでの「病いの語り」研究における以下3つの“前提”を問い直すことである。1つ目は、「患者＝物語の語り手／医師＝物語の聞き手」という前提である。病いの経験を「語る-聴く」という営みの相互性を考えた場合、この二分法は有効だろうか。2つ目は、「病いの語り」研究が対象にするのは慢性疾患であるという前提である。近代医学の発達が発達状態を生きるのを可能にしたように、医療技術のさらなる進展は慢性とは別様の病いの経験を生じさせつつあるのではないか。3つ目は、病いの語りの理想型は「探求の語り」であるという前提である。「探求の語り」は「回復の語り」が排除する多様な経験を包摂してきたが、この語りを取り立てて強調することに問題はないだろうか。

これらの問い直しを踏まえ、質的心理学における「病いの語り」研究は今どのように展開することができるか、いかなる課題に取り組む必要があるか、当日は話題提供者の議論から示唆をいただくとともに、フロアからもご参加いただける時間を持ちたい。

### 話題提供「なぜ医師の物語は重要であるのか」（鷹田佳典）

既存の研究において「病いの語り (illness narrative)」が論じられる際、その主たる関心は「患者の物語」に向けられてきたように思われる。これに対し、本報告で考えてみたいのは、「なぜ医師の物語は重要なのか」という問題である。これまで医師が語る物語（医師の物語）といえば、診断や治療に必要な情報から成る「医学の物語」や、疾患の根治を目指して奮闘する医師の「英雄的物語」が取り上げられることが多かった。しかし、報告者がこれまで20名を超える小児科医への聞き取り調査のなかで語られたのは、そうしたマスターナラティブには回収しきれない多様な物語であった。このような「医師の物語」を、普段われわれが耳にする機会ほとんどないし、十分な研究もなされてこなかったが、それらは医療の現場（あるいは社会全体）において、患者の物語ほどの重要性は持たないのだろうか。また、「病いの語り」研究においても取るに足らないテーマなのだろうか。「医師の物語」をめぐるこれらの問いに対し、本報告では、アーサー・クライマンとアーサー・フランクという二人の「アーサー」の議論を手がかりに、病いの経験を「語る-聴く」という実践において「医師の物語」が有する重要性について考えてみたい。

## 話題提供「遺伝性神経難病の発症前遺伝子診断を受けて生きる人の病いに向き合う語り」

(柘中智恵子)

遺伝に関連した医学研究や診療は急速に進歩発展し、遺伝学的検査によって診断が確定されるようになった。遺伝学的に診断がつくということは、患者の家族にも影響を及ぼすことを意味している。また、遺伝医療では保因者、at risk、遺伝子変異陽性未発症者といったような病気ではないが将来高い確率で病気になることがわかっている人、子どもに病気を受け継ぐ可能性がある人という立場の人々も医療の中でフォローアップされ、人々の健康観のパラダイムシフトが起こっている。このような遺伝性疾患患者の家族はあくまでも患者の介護者としての位置づけであったが、患者と同じ疾患の遺伝子変異陽性かつ未発症者という立場は、現代医療の中で今後どのように位置づけられていくべきか、一事例の語りに焦点をあて再分析を試みた。再分析の結果より、患者である親との暮らしを端緒とする遺伝性疾患と向き合いながら生きる経験はどのようなものであるか、病いの可能性を想定した人生は心理社会的発達や心理状態にどのような影響を与えているか、患者ではない未発症者である人は現代医療の中で今後どのように位置づけられていくべきかを論じ、遺伝性神経難病の発症前遺伝子診断を受けて生きる人の「病いに向き合う語り」を提示したい。

## 話題提供「『ポジティブな病いの語り』が与える生きづらさ」(川端康雄)

私たち人間は社会的な生き物なので、孤立して生活することはとても難しい。他者の存在や人々とのコミュニケーションによって、癒しや勇気がもらえたり、人のことばに傷つき、後悔したりすることもあり、コミュニケーションは両面の機能を有している。自らの病いの体験をポジティブに語ることは、とても力強く、心地よく響くので、当事者やその家族のみならず、病いを持たない人々にも大きな影響力を持ち、社会においては偏重される傾向にある。実際、そのような語りは病いの語りの効用として注目されることも多い。また、現代社会ではそのような語りはSNSによってシェアされ、拡散することがあり、多様な語りを目にする機会は増えている。しかし、その一方で、ポジティブな病いの語りは、同じように病いとともに生きる当事者やその関係者に生きづらさを与えてしまうことがあるという副作用的な側面にも注目する必要があると思われる。

今回のシンポジウムでは精神科に勤務する臨床家の実務的な視点で、語り研究に新たな問題提起を行いたいと考えている。また、ポジティブな病いの語りが強調されることが多い現代社会において、語りがモノローグ化させられやすい人たちについても言及し、語りが内包する問題についても考える機会としたい。

## 質的研究で挑戦する：学会賞受賞論文を聴く

企 画：日本質的心理学会研究交流委員会

司 会：荒川 歩（武蔵野美術大学造形構想学部）

話題提供：菊地直樹（金沢大学人間社会研究域）

山田哲子（立教大学現代心理学部）

神崎真実（立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構）

指定討論：伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

### 企画趣旨

本学会では、2014年以来、質的心理学研究掲載論文の中から優秀な論文を選び、学会賞を授与している。しかし、紙面で読むだけでは、研究の魅力が伝わりきれない気がするときもある。そこで、本企画では、学会賞受賞論文を受賞した3論文について受賞者に発表してもらい、それをもとに、フロアと議論をすることで、質的研究でどのような挑戦が可能なのか、その可能性を感じ取りたい。

### 話題提供「『方法としてのレジデント型研究』を語る」（菊地直樹）

本話題提供では、2016年度に優秀コミュニティ研究論文賞を受賞した「方法としてのレジデント型研究」（第14号(2015), 75-88）とその研究・執筆の背景を紹介する。この研究は、筆者自身のフィールド経験を自己分析することを通して、「何のための研究か？」というフィールドで出会う人びとからの「問い」に対する方法論を検討したものである。この研究で取り上げたレジデント型研究とは、地域社会に定住する科学者・研究者であると同時に、地域社会の主体の一員でもあるという立場から、地域の実情に合った問題解決型の研究を推進する研究のあり方である。それは研究者と地域住民の一員といった複数の立場の往復作業を通じて、地域のリソースとなりうる知識の生産と社会実践を再帰的に試みる方法である。レジデント型研究の方法としての可能性を検討するため、兵庫県豊岡市周辺において進展している絶滅危惧種コウノトリの野生復帰プロジェクトに参加してきた筆者自身の研究を事例として自己分析し、フィールドの人びとの問いに答える中で形成してきた協働する再帰的な研究方法を検討した。その結果、レジデント型研究の方法論的な特徴として第1に研究成果が社会のなかで評価をうけること、第2に研究者と地域住民といった複数の立場を往復すること、第3に再帰的な当事者性を有すること、第4に循環的な方法を有すること、第5に共感的な理解を試みること、第6に漸近線的接近という6つを導き出した。この論文は筆者自身の自己分析であったが、発表後、他の研究者の活動も事例として分析し、訪問型研究者とレジデント型研究者の相違点、レジデント型研究者の活動プロセスなどについて研究を進め、その一部は論文や著書として発表している。当日は、幾つかの事例について報告し、レジデント型研究の方法論としての可能性と課題について報告する。

### 話題提供「『知的障がいのある子どもを緊急に親元から離すプロセスとは—在宅ケアを望んでいた親の施設利用に焦点を当てて』を語る」（山田哲子）

本話題提供では、2016年度に優秀着眼論文賞を受賞した「知的障がいのある子どもを緊急に親元から離すプロセスとは—在宅ケアを望んでいた親の施設利用に焦点を当てて」(第14号(2015), 128-145)とその研究・執筆の背景を紹介する。この研究では、我が国の知的障がい者家族が抱える“親亡き後の不安”に焦点を当てている。著者は、幼少期や学童期の知的障がいのある本人やその家族に対する支援に比べ、青年期以降の支援が充足していない我が国の現状を問題視していた。特に、1960年代に多発した知的障がい者家族の無理心中事件から示された「親による障がいのある子どものケアの時間的・精神的限界」に対して、当事者の声を活かしたボトムアップの支援が必要なのではないかと着目していた。そして、子どもが成人してからもケアを担っている高齢の親は、自身と子どもの将来についてどのような思いを抱いているのか(山田, 2010)や、世界的に推進されている知的障がい者の地域移行(注:大型の入所施設から小規模のグループホームで生活すること)を行った家族はどのようなプロセスを経たのか(山田, 2012)など、インタビュー研究を行っていった。このような研究を続けている中で、我が国の多くの知的障がい者家族にふりかかる事態である、「成人した知的障がい者と高齢の親が共に暮らす中で、ある日突然親が倒れたり亡くなったりするなどの緊急事態が生じる」体験の理解が必要であると考えた。そして「本当は知的障がいのある子どもと一緒に暮らし続けたかったけれども、突然の親自身の体調不良によりそれが叶わなくなってしまった」という体験をした母親4名の語りを分析したのが本研究である。インフォーマントにとってつらい過去をテーマにしたインタビューであったが、緊急事態の最中の心理やそれを乗り越えていった様子、そしてつらい過去に対して段々と肯定的に意味付けが出来るようになっていくプロセスが語られた。著者の当初からの目的である「当事者の視点から求められている支援を構築すること」は、本論文の総合考察にて仮説的知見としてまとめられている。

### 話題提供「『通学型の通信制高校において教員は生徒指導をどのように成り立たせているのか—重要な場としての職員室に着目して』を語る」(神崎真実)

本話題提供では、2016年度に優秀フィールドワーク論文賞を受賞した「通学型の通信制高校において教員は生徒指導をどのように成り立たせているのか—重要な場としての職員室に着目して」(第14号(2015), 19-37)とその研究・執筆の背景を紹介する。この研究は、通学型の通信制高校A(A高校)において生徒指導がどのように成立しているかを検討したものである。約1年間の観察を行い、「生徒が職員室へ頻繁に訪問・滞在をしている現象」に注目した。職員室は、歴史的にみても現代においても、教員のための場(生徒が立ち入らない場)として認識されている。ところがA高校では、生徒たちが日常的に職員室に立ち寄っていた。生徒の中には、教員と雑談をしたり、宿題に取り組んだり、ぼーっと佇んだりするなどして、職員室に滞在する者さえもいた。つまりA高校では、職員室が生徒と教員の交流の場になっていたのである。そこで、職員室における教師と生徒の交流場面をKJ法に準じて整理したところ、本来ならば学級単位で行われている生徒指導が、A高校では職員室で包括的に実施されていることが分かった。次に、職員室という場で教員と生徒が交流するメリット・背景について検討した。A高校の生徒指導は、「通信制」であるという制度的な特色と、「通学型」であるという組織的特色が重なり合うことで起こる困難があり、その困難を減じるのに職員室が一役買っていた。また生徒全員が職員室を通るようにすることで、教員全体で生徒のニーズや状況を把握することができた。報告者は、観察当時から約8年が経過した現在も、本研究の結果に立ち返りながら不登校研究・居場所研究を行っている。観察時は、リサーチクエスションがうまく立てられずに眼前の出来事に埋もれていたが、その当時の記録は、今もなお様々な問いを生み出す土壌になっている。当日は、リサーチクエスションの変遷や論文化のプロセスと合わせて、本研究の結果について報告する。

## 質的研究法の拡張——機械, AI, インターネット

企画：『質的心理学研究』編集委員会

話題提供：Matthias Mehl (University of Arizona) ※通訳付

小嶋秀樹 (東北大学)

松本光太郎 (茨城大学)

指定討論：細馬宏通 (早稲田大学)

荒川 歩 (武蔵野美術大学)

司 会：山田幸恵 (東海大学)

『質的心理学研究 第21号』で組まれる特集「質的研究法の拡張——機械, AI, インターネット」(2020年10月末締切)のキックオフシンポジウムである。

質的研究は、狭義には質的データを扱う分野、言い換えると数量的な分析に則ることが難しいデータやテーマに関する学問領域であるが、広義には従来の研究法を批判的に検討する、また従来の研究法を拡張する研究法の学問領域であった。

「今日の子どもの親は、子どもたちの運動会や演劇や音楽会を、目や耳で直接楽しむのではなく、その場で8ミリビデオに記録することに専念し、後にテレビに写し出して楽しむのである。このようにテレビに写し出された疑似現実こそが私たちにとっての新しい『リアリティ』なのである」(麻生武, 1996, p.12)

麻生が記した「リアリティ」の移ろいは過去のことではない。8ミリビデオはスマートフォンに、テレビはYouTubeやSNSに置き換えられ、より生活の中に浸透することで、技術やリアリティの変化の影響はますます強くなっているとさえ言えるだろう。このような新しい技術や、そこから現われる新しいリアリティは、学術研究の研究法にも影響を与えるはずである。

自然場面での行為を観察した古典的研究として、バーカーとライトの著書“*One boy's day*” (Barker & Wright, 1951)が挙げられる。7歳の男の子レイモンドが朝起きて夜寝るまでに行った行為と彼を取り囲む物理的・社会的状況を8名の観察者が交替しながら自らの耳目を通して観察・記録を行っている。それから半世紀が過ぎた現在、自然場面における行為を観察する新たな方法が出現しつつある。それは機械やAI(ロボット)、そしてインターネットといったメディアを介した観察者の耳目を直接介さない研究方法である。

本シンポジウムでは、特集を企画する引き金となった観察者の耳目を直接介さない機械, AI, インターネットを使用した研究法を、Mehlさん, 小嶋さん, 松本の3名より紹介する。それらの研究法の拡張の可能性と課題について、指定討論の細馬さんと荒川, それからフロアの方々と検討したい。また、観察者の耳目を直接介さない研究法以外の機械, AI, インターネットを使用した質的研究法の拡張の可能性を検討することで、特集号に論文を投稿したくなることを強く期待している。

なお、本シンポジウムでは日本語を基本言語とする。話題提供のMehlさんは日本語が話せないため、話題提供は日本語と英語の資料を用意し、Mehlさんの話題提供と質疑応答においては英語⇄日本語の通訳者を介してやりとりする。英語の会話が苦手な方も積極的にやりとりしていただきたい。

### ■話題提供1 Matthias Mehl「スマートフォンを用いた自然場面の観察」

Mehlさんは、アメリカ・アリゾナ大学で「社会的相互作用の自然観察」研究室を主宰している。人間の社会的相互作用を研究するとき、自己報告（たとえば、質問紙を用いる）や行動観察が研究方法の基本になる。実験室において自己報告や行動観察はよく行われている一方で、上述のバーカーとライトの研究を含む人間が日常生活をしている自然場面での行動観察は数少ない。その理由として、研究協力者の生活文脈における発言や行為のすべてを細かく収集することが簡単ではないことが考えられる。そこでMehlさんは、研究協力者の腰にスマートフォンを付けてもらい、「EAR (Electronically Activated Recorder)」と名付けたアプリを使って、設定した時間ごとに音声を記録することで、自然場面での発言や行為を収集する方法を開発・実践している。この方法は観察者なしで自然場面での発言や行為の観察およびサンプリングすることを可能にしている。シンポジウムでは、EARの紹介、視覚記録と音声記録の違い、それから研究実践例として父親と幼児との相互作用について話題提供してもらう予定である。

### ■話題提供2 小嶋秀樹「ロボットを媒介した自閉症児による相互作用の観察」

小嶋さんは、ロボット開発と並行して、そのロボットを自閉症児の療育現場に持ち込み子どもたちとの相互作用を観察している。自閉症を抱えた子どもたちの多くが他人と目を合わせることが出来ない理由の一つとして、他者の身体（言語、顔、ジェスチャーなど）からの多くの情報を受け止めきれないことが先行研究において明らかにされている。そこで小嶋さんは、「キーポン (Keepon)」と名付けた黄色い雪だるまのようなシンプルな形をした限られた動きをする情報を極力省いたロボットを制作した。目にカメラ、鼻にマイクが埋め込まれていて、観察者はキーポンの動きを操作しながら、キーポンと関わる自閉症児を観察する。キーポンは自閉症を抱える子どもたちに人間との相互作用を行う練習の機会を提供している。それにくわえて、キーポンの身体を媒介して、キーポンと相互作用する子どもたちを間接的に観察することを実現している。シンポジウムでは、キーポンの紹介、キーポンを媒介とした観察例、それからキーポンの身体を借りた参与観察や観察者の一人称的記録に視聴者を「臨場」させることについて話題提供してもらう予定である。

### ■話題提供3 松本光太郎「インターネットを経由した家庭内での日常行為の観察」

松本は現在、「爪切り」を単位とする研究を進めている。爪を切られている乳幼児に注目した研究のアイデアは以前からあったものの、研究として実践するまでに長い時間を要した。その大きな理由は、爪切りは家庭内で営まれる行為で、行う時間は固定されていないため、毎回訪問して観察することは不可能であることがあった。つまり乳幼児の爪切りを観察する方法がなかったのである。この閉塞状況を打破したのは、「親に観察してもらっては!？」という共同研究者からのアドバイスだった。子どもが爪を切られているとき、行為の場に子どもの爪を切っている親が必ずいる。そして、研究の焦点は爪を切られている乳幼児であるので、親の自己報告ではなく、親による乳幼児の観察になる。観察は通常研究者が行うことが想定されるが、乳幼児の爪を切っている親に乳幼児が爪を切られている様子について観察することを委ねることにした。具体的な方法として、爪切りを含めた乳幼児の日常行為について質問を記したeメールを月に1回親に送り、親には1ヶ月の間に乳幼児が見せた日常行為を質問に答えるかたちで返信してもらう。それからSNSやストレージサービスを介して乳幼児の行為を記録した動画や写真を送ってもらっている。また定期的に家庭を訪問して、子どもの成長や親の経験を直接見たり話を聞くことで日常の爪切り行為を理解することを補っている。シンポジウムでは、爪切り研究で採った方法の概要と概念化、インターネットを利用した利点と難点について話題提供する予定である。

## 日本における多様な大学生のキャリア発達を捉えるために —大学ごとの文脈に着目して—

企画・司会・話題提供：番田清美（産業能率大学経営学部）  
話題提供：家島明彦（大阪大学キャリアセンター）  
本庄麻美子（和歌山大学経済学部）  
指定討論：サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

### 企画趣旨

大学全入時代における大学生の多様化が指摘されて久しい。また、文部科学省の各種補助金事業の結果、大学ごとに特徴的なキャリア教育・支援が展開されており、大学生のキャリア発達は近年ますます多様化してきているように思われる。そこで、本シンポジウムでは、設置形態（私立と国立）、設置地域（地方と首都圏）、入学時に求められる学力偏差値などが異なる3つの大学において大学生のキャリア発達プロセスを比較検討し、共通点と相違点を抽出することで、文脈を考慮した大学生のキャリア発達支援のあり方を議論してみたい。

具体的には、3名の話題提供者が勤務先大学（生）の特徴を報告した上で、各大学で実施している実践（キャリア教育・支援、進路相談、調査等）、及び、そこから得た気づきについて話題提供を行う。そこに指定討論を加えて、さらに話題提供者から他の話題提供者の発表を聞いての感想やコメントも加えて、フロアの参加者も巻き込んだ全体討論を行う。

### 話題提供「関東の私立中堅大学における大学生のキャリア発達プロセス」（番田清美）

大学全入時代を受け、大学教育や大学の特色もますます多様化している。国内全企業の0.3%がいわゆる大企業であり、競争性の高い難関大学出身者が採用される可能性が高い現状にある。一方、99.7%を占める中小企業においては、中堅大学の学生たちが労働力のボリュームゾーンになっていると考えられる。そこで、日本の一般企業における労働力の中核として、中堅大学の学生を調査対象とする。

2015年に関東の私立中堅大学に通う大学生475名にキャリア発達に関する質問紙調査を実施した。調査対象者の中から、質問紙分析結果に特徴のある学生を8名選出し、2016年と2017年の2回、半構造化面接によるインタビュー調査を行うと共に、2015年と同じ質問紙調査を実施し、3年間にわたる縦断的なキャリア発達調査を行った。

質問紙調査の結果、キャリア発達における仮説を生成し、仮説を支持するグループと、支持しないグループに分けた。それぞれのグループに所属する学生に対して、インタビュー調査から得たナラティブを質的分析の方法論であるTEM (Trajectory Equifinality Modeling) を用いて、両グループの発達プロセスの違いを比較分析した結果を発表する。

併せて、産業能率大学でのキャリア教育について紹介する。中堅大学の学生の、大学のキャリア教育及び個人の家庭環境や資質を絡めて、彼らのキャリア発達の可能性と課題について議論していきたい。

(科研技術研究費助成事業：2016～2019年度「大学生のキャリア発達プロセス可視化による自己形成の基礎研究と国際間比較」)

### 話題提供「研究型総合大学における大学生のキャリア発達支援の現状と課題」(家島明彦)

第一に、大阪大学における大学生のキャリア発達支援に関する取組について報告する。大阪大学は、11学部、16研究科、6附置研究所を擁する研究型総合大学であり、学生数は約23,000名(学部生約15,000名、大学院生約8,000名)にもなる。入試段階における学力偏差値は高いものの、逆に将来の職業と結びつけて大学を選んだわけではない学生が多いため、就職活動時に苦勞する学生も少なくない大学である。このような専門も多様で学生数も多い大阪大学における様々な取組(大学生のキャリア発達支援)について具体的に紹介する。

第二に、海外の研究型総合大学における大学生のキャリア発達支援の取組について報告し、日本の研究型総合大学との比較を行う。具体的には、英国(オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、エジンバラ大学、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)、カナダ(トロント大学、マギル大学、ブリティッシュコロンビア大学)、米国(カリフォルニア大学バークレー校、アーバイン校、ロサンゼルス校)への訪問調査やグローバル・キャリア・サービス・サミット(世界の大学のキャリアセンター長が集まる国際会議)への参加から得た情報を示し、日本の研究型総合大学との異同を整理する。

第三に、大阪大学の学生データを基に、研究型総合大学における大学生のキャリア発達プロセスについて概観を述べると同時にパターン化を試みる。具体的には、進路・就職相談データ(相談の時期や内容)や卒業時アンケート集計結果など全体像を示すデータや、発表者が担当するキャリア教育科目の授業内で実施したアンケート結果などのデータを分析した結果を報告する。

これらを通じて、研究型総合大学における大学生のキャリア発達の様相を描き出し、その支援の現状と課題について論じることを試みる。

### 話題提供「近畿地方国立大学におけるキャリア発達支援の現状と課題」(本庄麻美子)

4学部からなる地域に根ざした近畿地方国立大学の(特に文系学部の)事例に基づき、進路・就職相談データや卒業時の進路・就職活動アンケートのデータを踏まえて報告する。それに加え、2016～2018年、卒業生対象に実施した「大卒初期キャリアに関するアンケート調査」に基づき、初職にどのようなリアリティ・ショックを受けたのか、早期離職行動に繋がる要因は何か、という点も併せて報告する。

所属学部の大きな特徴として、学部キャリア教育とキャリア発達支援が連動している点あげられる。キャリア教育は2004年から学部専門科目として位置付けられており、現在も8単位が開講されている。2016年、3学科制から1学科6プログラム制に学部が改組され、学生は、将来の進路を意識したプログラム選択が必要となった。

学部キャリア支援室は、履修アドバイスやアカデミックライティング等のサポートをする学習支援オフィスが併設されている。そのため、学習支援とキャリア発達支援が連携できる体制にもなっている。専任教員1名と学部キャリア支援室(キャリアセンター分室)の非常勤キャリアカウンセラー2名でキャリア発達支援を担っている。1学年学部生約330名、大学院生約40名の学生を対象とし、年間2,000件以上のカウンセリングを行っている。特にOB・OG訪問を推奨しており、ロールモデルとなる職業人との接点を多く持てるよう、卒業生との連携にも力を入れている。そのためか、卒業生のキャリア発達支援のニーズも高く、社会人になってからも相談が多く寄せられる。

地方国立大学の1事例として話題提供を行い、キャリア発達支援の現状と課題について整理したい。

## 関係を紡ぐ言葉の力／言葉を紡ぐ関係の力

- 「言葉する人 (Languager) の視点から心理療法・教育・学習を横断的に捉えなおす-

企画・司会：青山征彦（成城大学社会イノベーション学部）

石田喜美（横浜国立大学教育学部）

話題提供：松嶋秀明（滋賀県立大学人間文化学部）

加藤浩平（東京学芸大学教育学部）

松井かおり（朝日大学保健医療学部）

指定討論：伊藤 崇（北海道大学大学院教育学研究院）

### 企画趣旨

本シンポジウムのねらいは、言語の使用者であると同時に言語の創造者でもある存在を意味する「言葉する人 (Languager)」(Holtzman, 2015) という概念を手がかりに、心理療法の文脈で行われてきた実践と、教育・学習および発達支援の文脈で行われてきた実践との接点を見出し、これらを統合的に議論していくための基盤を構築することである。質的心理学では、従来から、「治療者-患者」の二分法的な枠組みとは異なった心理療法の実践やそこで生じる現象について議論が行われてきた。近年では「オープンダイアログ」など、対話そのものによって治癒や癒しを生じさせるような活動も注目を集めている。また教育・学習の議論においても、「教師-生徒」モデルを問い直し、「みんなの発達」(ニューマン&ゴールドバーク, 2019) のための場を、その場にいる人々全員で創造するような実践が生まれつつある。これらの実践は、言葉の創造的な使用によって、実践の場に「専門家」モデルとは異なる、新たな関係を作り出そうとしている点で共通している。本シンポジウムでは、これらの実践を「言葉する人」という視点から捉え直すことで、言葉の創造的な使用の持つ治療的、教育的な可能性について議論する。(なお本シンポジウムは、日本認知科学会教育環境のデザイン分科会との共催で行われる。)

### 話題提供「ソーシャルセラピーとナラティブ実践」(松嶋秀明)

言葉をしゃべるようになることは、単にその言葉を理解するだけではなく、言葉をつくりだす人になることを意味する。本発表ではFred NewmanやLois Holzmanが展開してきたソーシャルセラピーが、どのような言語実践であるのかについて考える。それにあたってはMichael Whiteのナラティブセラピー、Harlene Andersonのコラボレティブアプローチ、Tom Andersenのリフレクティングプロセスなどの、いわゆる「ナラティブ実践」との異同について比較することとする。両者は言語と話者の位置づけについて同じような立場をとっている。例えば、ニューマン (2019) はこれまでのシステムの家族療法における言葉が「何かについて」のものであるのに対して、ソーシャルセラピーにおけるそれは、それそのものがセラピーであるという立場をとると指摘している。これはナラティブ実践論者がShotter (2011) の (“aboutness-thinking”に對置した) “withness-thinking”の重要性を述べることも符合している。一方で、ナラティブ実践とソーシャルセラピーとのあいだには、理論と実践との関係性、あるいはセラピーが対象とする単位 (集団—個人)、セラピーで重視される心理 (感情—思考) な

どにおいて違いがあると考えられる。このような両者を比較することで、ソーシャルセラピーのもつ独自性について考えることができるのではないだろうか。近年、我が国で注目される「オープンダイアログ」との比較（野村, 2018）も参照しつつ考える。

### 話題提供「余暇の場での自閉スペクトラム児者の会話支援：TRPGと趣味トークによる実践」（加藤浩平）

自閉スペクトラム症のある子どもや若者（ASD児者）は、ことばの意味理解や語彙力に遅れはなくても、会話（コミュニケーション）面での困難を抱え、その背景には、ことばの社会的使用の独特さ（いわゆる「語用論の障害」）があることが以前から指摘されている。ASD児者の会話の困難は、学校等での対人関係・集団活動にも影響し、中には学級などでの集団不適応や不登校などに至るケースも少なくない。ASD児者の会話支援については、ソーシャルスキルトレーニング（SST）等による会話指導が知られているが、それらの多くは集団適応を目的とした「人から与えられたことば」であり、ASD児者本人が自発的に生活で活用しようとする意欲にはつながりにくい。発表者はこれまで、思春期・青年期のASD児者を対象に、余暇活動を通じた会話支援に取り組んできた。特に彼らが自発的・主体的に仲間との会話・交流を楽しむことをコンセプトに、好きなアニメや漫画等について語り合う「趣味トーク」や、参加者同士が自作のキャラクターを介して会話しながら架空の物語を創造する「テーブルトーク・ロールプレイングゲーム（TRPG）」等を採用し、ASD児者が「自分のことば」で会話を楽しむことを主眼に置いた実践を進めている。本発表では、これまでの余暇活動支援の実践やそれらの研究成果を紹介しつつ、ASD児者が「自分らしく」表現すること、それらを他者と共有することの意義についても考えたい。

### 話題提供「多文化・多言語活動が創る私のことば、私たちのことば」（松井かおり）

本報告は、多文化・多言語の状況で実施されたワークショップ活動（以下WS）の事例をもとに、共通語をもたない参加者たちがどのように他者と折り合いをつけつつ繋がるのか、その経験や感情の共有過程で出現することばに焦点をあて議論する。観察の対象としたのは、大学生が海外にルーツをもつ子ども達や日本人の子ども達、地域の支援者らと共に参加したドラマWSおよび写真WSである。従来外国語（英語）教育は、目標言語の機能と使い方に注目をし、授業では効率的な学習をめざしてコミュニケーションの場を提供することにその役割を見出してきた（Byram 2008、細川 2015）。ここでは、学ぶべきことばもその意味もあらかじめ定められており、学習者はそれを受け取る存在でしかなかった。しかし多文化・多言語WSでは大学生が、話す内容や聞き手、場面に応じて日本語と外国語を切り替えたり、「方言」を「自分のことば」と表明したりするような主体的なことばの使用者としての態度や、グループの気分が盛り上がったときに使い廻される特定のフレーズの共有などプレイフル（playful）なことばの使用が観察された。小学校学習指導要領が「外国語活動」の目標として掲げる「言語や文化について体験的に理解を深め」ること、「積極的にコミュニケーションを図」ることが「言葉する人」の概念や「私のことば」「私たちのことば」の創造へ繋がっていくことを議論したい。

## 言説分析と社会的課題 —三人三様よみくらべ

企画・分析者1 川野健治 (立命館大学)

企画・分析者2 八ッ塚一郎 (熊本大学)

企画・分析者3 岡部大祐 (順天堂大学)

### 企画趣旨

本シンポジウムは、いわば「句会」をお手本に、3人の分析者が共通の材料について言説分析を披露し、その分析をお互いに、また参加者とともに味わうという企画である。指定討論は置かず、相互の意見交換と参加者の意見を交えて理解を深め、また分析手法の洗練を目指す。なお、分析材料については、当日までのお楽しみ、とさせていただくが、以下に示すように社会病理についてのテキストを選ぶことにした。

社会病理とは、犯罪、非行、いじめ、売春、自殺、貧困、差別、暴動、パニックなど、社会が良好に機能していない状態で、個人や集団の生活機能が障害されていることを指す。そうした病理の発生を抑止し、個人を守るための支援装置を社会は備えてきた。言語という資源はその根底にあるものであり、病理を物語的に説明し、その発生を抑止し、あるいは当事者を支援する「倫理」「価値観」「善意」「節度」「平等」「人権」などの社会的現実を構成してきた。たとえば社会における暴力について、私たちは「人権」「倫理」を拠り所として社会生活を構成することができる。

しかし、複雑化し多様化する現代社会において、言説的資源は社会病理の発生を抑止できず、あるいは病理の当事者に対する支援と保護の機能も果たせなくなりつつあるのではないか。たとえば、2007年に閣議決定された自殺総合対策大綱の基本理念によって、行政は自殺について、個人の自由意志の帰結ではなく社会で取り組むべき問題として、語るできるようになった。ところが、自死遺族らはこの基本概念に異議を唱えた。たとえば「自殺をする人はサインを発している」という項目は、「(気づくことができるのに) 気づけなかった」と自死遺族を責める表現だと抗議したのである。こうして、2012年の大綱の見直し作業で、基本概念の表現は修正された(川野, 2014)。

また、いじめという言葉が持つ文法的な特性のために、「いじめること」の実相が見失われていることも指摘されている(八ッ塚, 2015)。たとえば、出来事をいじめであると同定するとともに、言葉としての能動/受動という「対称性」が加害者と被害者に対応づけられる。報道されたいじめに対して、テレビのコメンテータが「いじめられたら、やりかえせばいい」「なぜ逃げようとしなかったのか」といった意見を述べる場合、その背景にあるのは、このような理解の枠組みである。

このように、自殺、いじめをとりあげて、社会病理と言説構造の問題として重ねてとらえ直してみると、本来社会に備わった言語的な「免疫機能」—社会を維持し少数者を支え、病理的事象を抑制するための社会心理学的・言説的機構—が、実情にそぐわなくなり、衰退していることが現代の社会病理の複雑化や深刻化を招いている点が見出されるのである。それどころか、旧来の構造を保持したまま、新たな価値観に侵食され、ネットをはじめとする新たな媒体により極大化して周流する言説群がいつそうの混迷を招いているのではないだろうか。

この現状に対して、一定の批判力・分析力が期待されるのが言説分析であろう。今回のシンポジウムでの3人の分析者の立ち位置を以下に示しておく。

分析者1の川野は、必要なテーマに応じて、言説分析を選択してきたのであり、特定のスタンスがあるわけではない。質的心理学会では、以下の二つを発表している。まず、日本の社会が自殺をどのように受け止めてきたのかについて、文化的産物としての「曽根崎心中」を題材として、その背景にある自殺の美化や残酷さの希薄化、あるいは宗教性のディスコースを分析した(川野,2017)。また、不幸にして発生した自殺事例についての第三者委員会の報告書を題材として、自殺の原因とされた高校における「部活動」の継続がテキストにおいて正当化される仕組みについて分析している(川野,2018)。特に後者については、基本的にはイアン・パーカーが提案したフーコー派ディスコース分析の枠組みを参照してはいるが、独自の工夫を組み入れた言説分析になっている。

分析者2の八ッ塚は、広義の社会構成主義を理論的な基盤としている。マクロな言説のなかで、新たな社会的事象がどのようにリアリティを獲得し、社会に影響を及ぼすのかという関心から、「いじめ」に関する新聞記事分析(八ッ塚,2014)に着手した。そのうえで、膨大な言説の流通にもかかわらず事態が改善しないことへの義憤と、研究者としての自省のもと、パーカー「ラディカル質的心理学」を参照し、アクションリサーチの精神に即したディスコース分析と実践を模索している。有識者や研究者のマクロな言説が、実際には「いじめ」を容認し、むしろ促進しているのではないかという逆説を、日本語文法のミクロな構造に遡って摘出すると同時に、現場の教師に発見と納得の感覚をもたらし、事態を記述し直すことのできる言説の創出を目指している。

分析者3の岡部は、社会言語的領域(例えばWortham & Reyes, 2015)や社会心理学領域(例えばEdwards & Potter, 1992; Korobov, 2010)の影響下でディスコース分析を行なってきた(岡部, 2013; 猿橋・岡部, 2017)。研究の関心としては、相互行為の過程で「病気」がどのように構成され、相互関係を形作っていくのか、どのようなものとして病気が了解(誤解)されていくのかといったテーマを扱ってきた。病気のような、経験していない者には不可知なものとして個人の内面の問題に囲い込まれることがしばしば観察される(「経験していない人にはわからないでしょ」といった語り方などを想起されたい)事象において、(特にPotterらの認識論的談話社会心理学 epistemic discursive psychologyに顕著に見られる)相互行為の過程にある意味で固執する上記のアプローチを戦略的に用いてきている。

## 医療的ケアを必要とする当事者との対話から 社会的支援について考える

企画・司会：鮫島輝美（京都光華女子大学健康科学部）

東村知子（京都教育大学教育学部）

話題提供：青野浩美（京都光華女子大学健康科学部）

高橋真依（京都光華女子大学健康科学部）

### 企画趣旨

本シンポジウムでは、これまであまり語られてこなかった/語ることのできなかつた当事者の視点、および当事者主権という理論的視座から支援について考える。ここでは〈支援〉を、「他人を支え助けること」といった行為のみを指し示すのではなく、「なんの因果か抜き差しならぬかかわり合いをもち、取り乱しつつ関わり続けること」（「支援」編集委員会編，2011，p.1），すなわち関係性や相互作用をも含んだものとして捉える。また、当事者とは「ニーズの帰属する主体（上野，2008，p17）」であり、当事者主権とは、「私が私の主権者である，私以外のだれも－国家も，家族も，専門家も－私がだれであるか，私のニーズが何であるかを代わって決めることを許さない，という立場の表明」（上野・中西，2003，P.4）である。

本シンポジウムの問題意識は，企画者である鮫島と東村が現在取り組んでいる「医療的ケア児の保育問題」に発端がある。「医療的ケア児」とは，医療技術の飛躍的進歩により，NICU（新生児集中治療室）などに長期入院後，引き続き在宅において喀痰吸引・経管栄養などの医療的生活援助が必要な子どもたちを指す。医療的ケア児は，病院から退院した後，地域に行き場がなく，在宅で（母）親がそのケアを休みなく引受けざるを得ない過酷な現状がある。鮫島と東村は，医療的ケア児は体制さえ整えば現実には保育が可能であるにもかかわらず，困難あるいは不可能であるということが過度に強調されていることを問題とし，医療的ケア児を支援する活動をより多くの保育現場に広げていくにはどうすればよいかを，実践面と社会的・制度的側面の両面から検討している。

登壇する当事者は，難病により気管切開をしながらも，語り，歌をも歌うことで，医療的ケアの支援活動の必要性を訴えている青野氏と，小児がんのサバイバーでありながらも，医療を必要としている他の子どもの支援活動を行なっている高橋氏である。

彼らは，なぜこれまで「語られてこなかった/語ることのできなかつた」当事者なのだろうか。上野（2008）は，要援護状態にある人びとがすべて「当事者」になるわけではなく，当人にニーズが感得されても，その人がニーズを表出する主体でなければ当事者ではない，という。つまり，ニーズの顕在化をともないながら，当事者は「なる」ものである。この意味で彼らは，「当事者になった」ものである。なぜなら，二人とも，「前例なき当事者」だからである。たとえば，気管切開をした場合，歌うことはおろか，「話ができない」というのが定説であるが，青野氏は，話をするだけでなく，声楽家として歌も歌う。また，高橋氏は，小児がんのサバイバーであり，実名で映画に出演したり，講演を行なったりしている。そもそも，小児がんのサバイバー自体が，医療の高度化の先に，小児がんの治療成績の向上の先に現れた新たな「前例なき当事者」といえるだろう。

そのため、彼らのように医療的ケアを受けながら日常生活を送る当事者の存在そのものが、新しいものであり、彼らの体験そのものがこれまで人類が体験したことのない「未知の体験」である。当事者が語ることの重要性は、近年「認知症当事者」の活動によって社会的に認識され始めているが、少数派であるために、彼らの体験が大きな声となりうるには、まだ時間がかかるだろう。

そこで、本シンポジウムでは、青野氏、高橋氏から、自らの「体験を語ることの意味」について発表いただく。その語りを踏まえて、医療者をはじめとした専門家による支援や社会的支援のあり方について、当事者の視点をふまえた対話を試みたい。さらに、医療的な生活支援が必要な医療的ケア児の社会問題についての研究に取り組んでいる鮫島（理論看護学）・東村（幼児教育臨床）と対話を行うことによって、当事者の視点から社会的支援を見つめ直し、今後の支援のあり方について議論していきたい。

### **話題提供「当事者である私が体験を語ることの意味」（青野浩美）**

医療的ケア当事者の声は、なかったことにされているのではないか。声なき声は聞いてもらえないのではないか。増えてきたとはいえ、少数派である医療的ケア児者の声は小さい。しかも、物理的にも音声が出にくいのである。そのような現状があるならば、物理的に音声が出る私が、声を上げるべきではないか。まずは、そのような者がいることを知ってほしい。それが、私が体験を語る意味なのである。

### **話題提供「小児がんサバイバーとして、病を抱えながら社会でみんなと共に生きていくということ」（高橋真依）**

中西正司・上野千鶴子（2003）. 当事者主権 岩波新書

上野千鶴子（2008）. 第1章当事者とは誰か ニーズ中心の福祉社会のために 上野千鶴子・中西正司編（2008）. ニーズ中心の福祉社会へー当事者主権の次世代福祉戦略 pp10-37 医学書院

本研究は、JSPS科研費JP18K02508の助成を受けたものです。

## 土地の力、ケアの力 -東北、沖縄、台湾、そして東南アジア-

企画・司会：伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

話題提供：河野暁子（立命館大学大学院人間科学研究科）

大城凌子（名桜大学人間健康学部）

村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

伊藤哲司（茨城大学人文社会科学部）

### 企画趣旨

本シンポジウムは、昨年度の大会でのシンポジウム「『土地の力』と災害復興」を継承するものである。前回は「災害復興」にとくに焦点をあてて「土地の力」に着目した議論を展開したが、今回は災害復興から少し枠組みを広げ、その土地に根ざして生きる人々にとってケアする力が何をもたらしているのかについても考えてみる。話題提供者の河野は、東北の気仙地域に住み着き活動しており、祭りや郷土芸能など地域で伝統的に培われてきた力について語る。大城は、沖縄の地に根をおろし、地域ケアに奔走している一人として、その経験をもとに話題提供する。村本は、「五味雑陳」という言葉がキーワードとなる台湾の歴史が育んできた力について論じる。そして伊藤は、タイやベトナムなどの東南アジアでの地域コミュニティのあり方に触れ、そのなかでのケアのあり方について見直しを図る。これらを踏まえ、「土地の力」「ケアの力」をどのようなものとして概念化するか、またそれらを損なうことのない臨床心理学的支援の可能性について、フロアーを交えて議論を深めたい。

### 話題提供「津波被災地の文化をよすがとした土地の力」（河野暁子）

大きな災害が起こるたびに、被災地で暮らす人々のメンタルヘルスが懸念される。発表者は、臨床心理士として海外の紛争地域で活動してきていたが、2011年の東日本大震災以降被災地に移り住み、被災したコミュニティ自らが困難を乗り越えようとしている様相を目の当たりにし、災害後に展開される、個人のメンタルヘルスに焦点を当てた西洋的な心理支援に疑問を持つようになった。もともと、東北沿岸被災地は地域共同体が存続しており、被災したコミュニティは自らの文化をよすがに復興へのプロセスを歩んでいる。たとえば、震災後まもなく祭礼や民俗芸能を再開した地域があり、その価値が目された（植田,2013; 橋本,2015）。発表者が居住する岩手県気仙地域には、集落ごとに継承されてきた鹿踊りや剣舞などの民俗芸能があり、4~5年に一度地区ごとに開催される五年祭等で披露されている。震災から数カ月後には、地域住民が主体的に民俗芸能を再開し、2016年頃からは、中止していた五年祭を復活させる動きが見られ、その動きは未来に向かって続いている。民俗芸能の練習や五年祭の準備の一つ一つは、震災前の日常を取り戻していく時間でもあり、それらを通じて、地域の人々はつながり、暮らしている土地への所属感や愛着が深まる。民俗芸能や五年祭という文化は、災害を繰り返し経験してきた岩手県の沿岸において、人々が困難を乗り越えるためのよすがとなっている。

### 話題提供「沖縄の文化に根ざしたコミュニティケア」（大城凌子）

あらゆる文化は何らかの民間的・包括的・自然発生的な非専門的保健医療システムを有する（Leininger,1995）。かつて、長寿の島と言われた沖縄は、長命を壽ぎ、生から死へ、そして死後の魂

も含めてケアする民間的ケアが、伝承されている。発表者は、生まれ育った地域をフィールドに、誰もが安心して老い、安心して死ぬことができるコミュニティケアのあり様を模索している。公民館を拠点に健康支援活動を続けて13年目、時の流れと、その場に集う人々との心地よいつながりに、「ケア」とは、「行為」ではなく「関係」である(野口,2002)と捉えている。このような場で共有される身体感覚や情緒的つながりの実感は、地域への愛着や連帯感を深め、ケアする力を生成していくと思われる。相互扶助の文化が、ケアリングの日常性を支えている事例は多い。

精神疾患を有する60代のA氏は、専門職の介入を拒み、倒壊寸前の家屋で独居生活を続けている。A氏が困った時に支援を求める相手は、離れた家族ではなく、隣に住む80代の女性であった。A氏の生い立ちをよく知る女性は「本人が望むなら・・・」とA氏を気遣い近隣の住民と一緒に見守りを続けている。一方で、沖縄の孤独死の実態(431人/3年;琉球新報)は看過できない現実がある。関係性の希薄化が指摘される中、改めて、沖縄の文化に根ざしたケアの力について、相互扶助とケアリング文化の創造に焦点をあてて考えたい。

### 話題提供「台湾の「五味雑陳」に見るケア」(村本邦子)

その土地の自然条件、文化、歴史、宗教、政治経済などの要件は、人々の生活様式や関係のあり方に大きな影響を及ぼす。台湾は、先住民、16世紀に始まるヨーロッパ諸国による植民地主義、17世紀の漢人の移民開拓、19世紀末からの日本統治、「白色テロ」と民主化運動と激動の時代を生き抜いてきた。そこから、台湾の人々は、多様性への寛容と助け合いの姿勢を形成してきたように思われる。その象徴が台湾の実に豊かな食文化であり、「五味雑陳」の言葉に表れている。「五味」は、甜(甘い)、酸(酸っぱい)、苦(苦い)、辣(辛い)、咸(しょっぱい)の五つの味覚を指し、「五味雑陳」は、それらを一度に食べた時の複雑な気持を意味する。

台湾を何度も訪れ、さまざまな場面でこれを体感してきたが、今回は、花蓮で子どもの貧困問題の支援をしているNPO「五味屋」の活動を紹介する。放課後から夜まで、子どもたちが共に生活する場となる家、その活動を支えるセカンドハンドショップや民宿など合わせて十軒の家屋があり、統治時代の日本家屋も含まれている。子どもたちが店で手伝うと、ポイントがもらえ、文具や本を買い、映画会などイベント参加費を支払うこともできる。家族によって十分なケアを受けられない子どもを地域で育てるこの取り組みは、台湾全土から応援されているようだった。「五味屋」という名前は子どもたちによってつけられたそうだ。人生の複雑な味わいを噛みしめながら成長する豊かさに学ぶべきものがある。

### 話題提供「東南アジアにおける地域コミュニティの「日常」とケア」(伊藤哲司)

2005年12月に発生したスマトラ沖大地震によってインド洋大津波が発生し、インド洋沿岸諸国で甚大な被害が出た。タイの代表的な観光地のひとつであるプーケット島の西海岸側にも津波が押し寄せ、乾期のハイシーズンだったことも重なり、日本人を含む外国人観光客を含む数千人が犠牲となった。その津波の調査団を茨城大学で組織し参加した(2006年3月)をきっかけに、その後何度もプーケットおよびその周辺地域を訪れたが、大災害の記憶を風化させず将来の教訓にといった日本ではしばしばある動きは、ほとんど見られなかった。死生観にもかかわる問題であろうが、地域コミュニティで生き残った人々の人間関係などの「日常」が保たれ、そのこと自体がケアとなっている様子がかがわれた。被災地ではユーモアのある語りが聞かれることもあり、むしろ「忘却」することがひとつの被災後の適応のかたちであると考えられた。

また、伊藤がメインの研究フィールドとしているベトナムでは、ベトナム戦争の北爆が激しかったころ(1970年前後)に、むしろ微笑みを絶やさずに暮らすハノイの人々の様子が報告されている(田,1968)。そこでは、定期便のようにやってくるアメリカの爆撃機をやり過ごし、地域コミュニティの「日常」を極力保とうとしたことが認められる。東南アジアに広く共通するとまで言えるかどうかはわからないものの、「トラウマ」といった用語で簡単には説明できない人々の逞しい姿がある。こうした事例をもとに、東南アジアの風土に根ざしたケアする力とは何なのかについて考えたい。

## 「家族」の捉え方と支援の類似性および相違性 - 専門分野それぞれの立場から -

- 企画 : 河原智江 (共立女子大学看護学部)  
西村ユミ (首都大学東京健康福祉学部)
- 司会 : 河原智江 (共立女子大学看護学部)
- 話題提供 : 横田益美 (駒沢女子大学看護学部)  
南山浩二 (成城大学社会イノベーション学部)
- 指定討論 : 西村ユミ (首都大学東京健康福祉学部)

### 企画趣旨

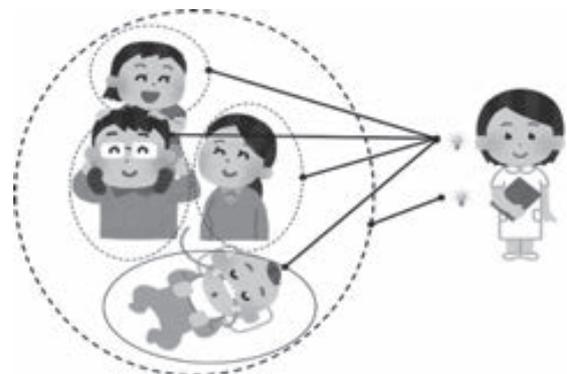
企画者らは、これまでの会員企画シンポジウムにおいて、対人サービス専門職が「当事者としての家族」の意向や受けとめにどこまで迫れるのかという問題意識のもと、対人サービス専門職が、「当事者としての家族」をどのように理解して支援するのかについて、いくつかのテーマにより議論を重ねてきた注)。

今回のシンポジウムでは、まず、対人サービス専門職に限らず、“家族”を関心の対象とする専門分野(学問領域)ごとに、①どのような視点により「家族」を捉えているのか、②その「家族の」捉え方によって、どのような支援(あるいは、かわり)をしているのかということについて、改めて考えてみる。次に、専門分野ごとに検討した①及び②から、それぞれの専門分野(学問領域)に特徴的なことを整理する。

そして、それらを踏まえ、「家族」との捉え方と支援の類似性と相違性を議論していきたい。

### 話題提供A 「家族看護学の立場から」(横田益美)

家族看護は、「家族が、その家族の発達段階に応じた発達課題を達成し、健康的なライフスタイルを獲得したり、家族が直面している健康問題に対して、家族という集団が主体的に対応し、問題解決し、対処し、適応していくように、家族が本来持っているセルフケア機能を高めること」(鈴木・渡辺, 1995)と定義されている。



この定義を見ると、家族を理解する上で、家族発達理論、家族システム理論、家族ストレス対処理論などが基盤となり、家族看護を展開するということがわかる。すなわち、家族看護では、家族を自ら対処していく存在と捉え、何らかの事情で対処力が発揮できなくなっている家族を支援の対象と考える。支援を展開する場は病院から地域まで多様であるが、看護師という立場上、対象との出会いには家族メンバーの健康問題があり、それを切り口として支援を展開していくことが求められる。

本シンポジウムでは、家族看護の視点での支援の実際について、在宅で療養している子どもに対する訪問看護における担当事例への取り組みを通して紹介したいと思う。特に、重度の障害を持ちながら生まれてきた子どもも含めた“家族メンバーひとりひとり”及び“家族全体”をどのように捉えて支援したのかということ『家族になる』というプロセスを中心に述べることにする。

### 話題提供B「精神障害と家族支援—家族社会学の立場から—」（南山浩二）

専門職がサービスを提供していくにあたって、その根拠として解決すべき「問題」が必要となる。医療・福祉などの専門職の支援の焦点は、まずは精神障害があり生活上の課題を抱えている人にあてられることになるが、さらにその「家族」をも対象とするのが「家族支援」である。このことは、精神障害がある人への支援との＜関連＞において、「家族」に対しても何らかの支援の必要性が認識されているからだともいえるだろう。では、どのような＜関連＞において「家族支援」が重要だとされているのだろうか。本シンポジウムでは、この問いを起点とし、家族社会学などの議論に依拠しつつ、「家族支援」の文脈において、どのように「家族」の構成・範囲、機能などが捉えられ、どのような「家族支援」が模索・展開されているのか、実際の実践例にもふれながら考えてみたい。

### 指定討論（西村ユミ）

話題提供A・Bから、以下の論点を整理し、フロア参加者との議論を展開していく予定である。

- ・双方の専門分野（学問領域）を比べたとき、類似するものはあるのか？あるのであれば、何が類似しているのか？
- ・双方の専門分野（学問領域）を比べたとき、相違するものは何なのか？
- ・話題提供A、あるいは、Bそれぞれの専門分野（学問領域）に応用可能なことはあるのか？

注) これまでの会員企画シンポジウムのテーマについて

第7回大会（2010）：対人サービス専門家による「大事なひとを喪くした家族」支援を再考する

第8回大会（2011）：Evidenceから“当事者としての家族”支援を考える

第9回大会（2012）：当事者が捉えるウェブログによる“つながり”から新しい支援の可能性を探る

第10回大会（2013）：グリーフケアについて考える

第12回大会（2015）：家族の語りを支援する

第13回大会（2016）：対人サービス専門職における「ジェネラリスト」と「スペシャリスト」を再考する

第14回大会（2017）：からだやことばで「表現されること」・「表現されないこと」とそれらの受けとめや解釈について考える～当事者と対人サービス専門職に焦点をあてて～

## 不寛容社会における教養を考える： 相互行為分析の実践から

企画・司会	阿部廣二（早稲田大学 人間科学学術院）
企画	高梨克也（京都大学大学院情報学研究科）
企画	細馬宏通（早稲田大学 文学学術院）
話題提供	細馬宏通（早稲田大学 文学学術院）
話題提供	高梨克也（京都大学大学院情報学研究科）
話題提供	阿部廣二（早稲田大学 人間科学学術院）

社会全体から余裕が失われ、不寛容になりつつある。SNS上での諍いからヘイト・スピーチに至るまで、少なくとも感覚レベルにおいては、我々はかつてより寛容さを失っているように思われる。こうした傾向に対し、我々はどのように抵抗を示すことができるのだろうか。本シンポジウムは、こうした抵抗のための一つの視座として、「教養」という視点を導入してみたい。ここでいう教養とは、対象が持つ「質」のその都度の性質に応じて、多角的な視点を柔軟に召喚する態度である。

教養は一方でアクチュアルなものでなければならないが、他方で流行を追うこととは対極的な不易なものである必要もある。その意味で、喩えるなら、われわれが教養に期待するのは漢方薬の効能のようなものであろう。つまり、これによって、自己中心的な常識的なものの見方を徐々に相対化し、異なる見方の可能性に気づきやすくする素地を作っていくという、いわば長期的な体質改善の効果である。こうしたある意味では即効性は高くない習慣を身につけるのには「べき」論は効果的ではない。従って、「実践した方が楽しい」という点が真剣に追求される必要がある。丸山真男は「民主主義は永久の革命である」と言ったが、もし本当に「永久」に続けなければならないのだとしたら、その実践が楽しいものであるということは剰余であるどころかむしろ不可欠であるだろう。

そこで本シンポジウムでは、教養的な観点から、多様な解釈を寛容に許容する様を実演的に示してみたい。具体的には、何気ない素材（相互行為場面や映像作品など）を取り上げ、そこに思いもよらない背景知識を明示的に導入することによって、従来とは違う気づきが生じてさまを、さらには、複数の異なる背景知識を導入することによって、どちらも一理あるが、互いにすぐには両立しにくい複数の解釈が生じてくるさまを示し、ジレンマ状況を顕在化させることを試みる。このような試みを通して、寛容であることに教養が有効であることを示しつつ、質的心理学の、あるいは文系一般の知が持つ可能性についてフロアとともに議論したい。

### 小説のこぼれを振り付ける：アニメーション『ゼロ弾きのゴーシュ』の「虎狩り」分析（細馬宏通）

教養とは、単に適切な知識を得るということではなく、得た知識を他者と共有する方法を持つということである。本発表ではこのことを、アニメーション監督、演出家であった高畑勲のアニメーション作品『ゼロ弾きのゴーシュ』を題材に、「印度の虎狩り」場面の分析を通じてこの問題を考える。

高畑勲は多くの作品の監督・演出に関わったが、自身はほとんど作画を行わなかった。では彼は自分の教養や知識、それらに基づく思考をどのようにアニメーターたちと共有したのか。原作では主人公ゴーシュが弾く音楽によって猫が苦しめられる様子が描写されている「印度の虎狩り」場面を、高畑は

一種のコレオグラフィとして解釈し直し、猫の苦しむ表情や動作に音楽的構造を持たせた。また自身の音楽に対する理解をアニメーターたちと共有するために、五線譜を使わない独自の時系列チャートを作成し、アニメーションの時間構造を図示した。その結果、猫の表情や動作、そして、ゴージュと猫の相互行為の音楽的構造が可視化された。高畑は、アニメーション制作という共同作業を通じて、小説や音楽にまたがる自分の広範な知識を可視化し、他の制作者たちと共有する方法を編み出し、その結果独自の音楽アニメーション表現を達成した。「印度の虎狩り」場面はその好例といえるだろう。

### 地方と相互行為（高梨克也）

本話題提供では、「宮本常一的態度」で相互行為（分析）を捉えなおすことにチャレンジしたい。宮本常一と聞くと、多くの人は『忘れられた日本人』に代表されるようなある種ノスタルジックなイメージを想起するかもしれない。しかし、これは宮本のもつ顔のうちの一面に過ぎない。宮本は終戦期の大阪府下の農政や高度経済成長期前後の離島や山村部の地域振興などに携わった実践家でもあり、その姿勢はまさに上記の意味での「アクチュアルかつ不易」のものであったといえる。宮本の書き残したものを読んで感じるのは、彼が日本全国を歩き回りながら得た見聞があれば、世の中の見方がどれほど柔軟かつ新鮮なものに変わりうるのか、という点であり、この点の驚きは容易に色褪せるような性質のものではない。

民俗学という学問分野に対する一般的なイメージからすると意外かもしれないが、宮本常一の若い頃からの愛読書はクロボトキンの『相互扶助論』であった。この「相互扶助」という考え方は晩年に至るまでの宮本の思考や行動に深く浸透している。しかし同時に、戦後から高度経済成長期に宮本が日本各地で見たのは、こうした旧来の相互扶助システムが時代と不整合をきたしていくさまであった。その一方で、例えば現代のソーシャルキャピタル論などは行き過ぎた個人主義化の傾向への警鐘として注目されるようになった面を持つ。では、われわれには今から何ができるのか。今回の話題提供では、野沢温泉村の道祖神祭りでのフィールド調査やNHK連続テレビ小説『あまちゃん』などの映像素材を用いて、微視的場面の分析から現代的コミュニティ論へと至る道筋を模索したい。

### 「視点」を捨てる時：設計図はいつ、どのように放棄されるのか（阿部廣二）

教養的な振る舞いとは、新たな視点を導入するのみならず、既存の視点を（一時的にでも）放棄することでもある。新たな視点の導入としての教養を否定する者は少ないにもかかわらず、教養がアクチュアルにならないのは、視点放棄への抵抗感が少なからずあるためであろう。新たな視点の導入は享楽を伴うが、視点の放棄は自己否定を含み、苦痛を伴うからである。しかし、教養を通じた寛容の実現を考えるならば、享楽の対極にある苦痛やその対処にも焦点を当てねばなるまい。報告者が（そして本シンポジウムの登壇者らが）これまで参与してきた野沢温泉道祖神祭りにおいても、祭具を作る設計図の情報を放棄し、現場の情報を参照することが優先されることがあった。しかしながら、彼らはこうした事態にも柔軟に対応していたように思われる。彼らは、いつ、どのように設計図情報を放棄するのであろうか。この分析を通して、現場におけるリアルな教養と寛容のダイナミズムについて考察したい。

## ビジュアル・ナラティヴの実践性と多様性

企画 : やまだようこ (立命館大学OIC総合研究機構)

司会 : 家島明彦 (大阪大学キャリアセンター)

話題提供 : 濱田裕子 (九州大学大学院医学研究院)

横山草介 (東京都市大学人間科学部)

後藤一樹 (千葉商科大学政策情報学部)

やまだようこ (立命館大学OIC総合研究機構)

指定討論 : 家島明彦 (大阪大学キャリアセンター)

### 企画趣旨

ビジュアル・ナラティヴは、視覚的イメージによる語りである。それは、単なる研究素材ではなく、それ自体が「テキスト」であり、独特の「経験の組織化のしかた」「語り方」「コミュニケーション方法」をもつ。

ビジュアル・ナラティヴでは、三項関係をつくることによって、二項関係の対話場面よりも、語りの共同生成が促されやすく、感情や感覚による生成的なナラティヴを生み出しやすくなり、生き生きした実践が可能になる。ナラティヴ(ものがたり)研究は、言語中心主義から「ビジュアル・ターン(視覚的転回)」によって根本的に変革されるであろう。

本シンポジウムでは、ビジュアルで考え、ビジュアルで語り、ビジュアルで伝える、ビジュアル・プラクティスとその研究の多様な実践例を具体的に紹介する。医療、ケア、教育、保育、社会調査、文学など、さまざまな領域における今後の可能性について議論する。それらの具体例をふまえながら、ビジュアル・ナラティヴの理論的・方法論的問題をより深く広い射程から考えてみたい。

### 話題提供「ビジュアル・ナラティヴのグリーフケアへの可能性」(濱田裕子)

子どもを亡くすことは親にとって耐え難く、「複雑な悲嘆」をもたらしやすい(Rando,1993)。発表者は、これまでグリーフとともにある家族にインタビューを行い、その研究過程のなかで、家族とともにグリーフサポートブックを作成した。特に子どもとの思い出の物を媒介に家族の物語を紡いだ一部は、改めて振り返ると、そのプロセス自体がビジュアル・ナラティヴであったと考える。そのことをきっかけに、現在、子どもを亡くした家族を対象に、子どもと家族の関係性(過去、現在、未来)のイメージを描画にしてもらい、それにまつわる物語を伺うというアクションリサーチにとりくんでいる。ある母親は、終了後「子どもとの未来など、正直考えたことがなかったので、そうか、考えても良いのかと、嬉しくなった」と語った。ビジュアル・ナラティヴは、インタビュアーが並ぶ関係でその物語を聴くことによって、親が潜在意識の中にある子どもとの関係性を見つめ、その関係性を紡いでいく一助となると考える。同時に、インタビュアーである私は、親の中にある視覚イメージをとおして、その関係性や物語を容易に共有することができ、共感的なコミュニケーションが生成されていくことを感じている。

### 話題提供「ビジュアル・ナラティヴによるフォークペダゴジーの解明」(横山草介)

心理学者Jerome Brunerはかつて人間が経験を表象する仕方には3つの種類があると主張した(Bruner, Olver & Greenfield, 1966; Bruner, 1996)。1つ目が「動作による表象(enactive representation)」、2つ目が「図像による表象(iconic representation)」、そして3つ目が「記号による表象(symbolic representation)」である。ナラティブターンを経た後、質的研究の探究は概して3つ目の「記号による表象(symbolic representation)」に重心を置いて展開してきた側面がある。だが、人間が経験を表象する仕方には「動作」や「図像」によるものもあるというBrunerの指摘を思い返すとき、我々は研究の対象を言語や記号の外側に拡張する必要に迫られることになる。実際、動作やイメージへのアプローチは質的研究の遂行において無視できないものになりつつある。本報告ではビジュアル・ナラティブという主題をBrunerの「図像による表象(iconic representation)」という概念によって捉え直す。その上で、幼児教育のフィールドにおける保育者の実践観の変容というテーマを一例にビジュアル・ナラティブの学術的、実践的な意義を考察する。本研究が目指すのはBrunerが「フォークペダゴジー(folk pedagogy)」(Bruner, 1996)と呼んだ教育をめぐる人々の素朴理論を、ビジュアル・ナラティブの手法を用いて明らかにしていくことにある。

### 話題提供「映像・感情・もの語り——質的社会調査におけるビジュアル・ナラティブ」(後藤一樹)

映像の特性は、人間の「表情」をとらえることによって活かされる。人間の表情とは、複雑な、ことばにしにくい「感情」の表現媒体である。ビジュアル・イメージを用いたコミュニケーションにおいては、人間の表情が重要な質的データであり、解釈すべき情報なのである。

ところで、人間の感情は、他者の「モノローグ(独り言)」では動かない。人間の感情を動かすのは、人と人との「ダイアログ(対話)」である。

映像作品のなかでは、登場人物Aの発話に登場人物Bが応答する対話を基本としながら、表情や身振りも含めた登場人物たちの「相互行為」が、彼・彼女らの感情を動かし、表情を変化させている。

では、実際に、どのような相互行為としての対話が登場人物たちの感情を変化させ、そのプロセスはいかにして表情に表れるのか。四国遍路をフィールドに、質的社会調査の一環として私が制作した映像作品を事例に分析する。

また、「クロス・ナラティブズ」(後藤)の観点から、登場人物A、登場人物B、撮影者Cという「三者関係」の変容によって生成するビジュアル・ナラティブにも着目したい。

### 話題提供「ビジュアル・ナラティブとしての俳句」(やまだようこ)

ビジュアルからことばを生み出す通常の方法とは逆に、ことばからビジュアルな映像をイメージさせる俳句も、ビジュアル・ナラティブの一種として考えると、興味深い視野が広がる。俳句には次のような10の特徴があると考えられる。

「見える化、外在化」

①写生。観察。観察した風景の一部を写生的に切り取り、ことばで映像にする。私的情緒の詠嘆を重んじる短歌とは異なる。②季語。短かいことばで風景の見える化を可能にする。季語には文化の伝統と知恵が蓄積され、ことばの背後にある文化的文脈を共同化できる。

「語りの共同生成」

③定型。5、7、5のリズム。創作が容易で共同化しやすい。④韻律。音の配置、響きやリズムによる共感的伝達。⑤座の芸。句会という場でイメージを共有し共同生成される。⑥説明しない。鑑賞者の想像力や解釈にゆだねる。⑦作者と鑑賞者の交代。

「イメージの新しいむすび」

⑧取り合せ。二物衝撃。コラージュ。無関係のものや思いがけない組み合わせで異質のイメージをむすび、新しい語りを生み出す。⑨変換。ものの見方の変換。視点の転換。遠近法。倒置法。⑩言語ゲーム。変化プロセス。推敲や句会による生成的变化を楽しむ。

## ELANを用いた質的分析：映像・音声分析のさらなる可能性

企画・司会：細馬宏通（早稲田大学文学学術院）

話題提供：菊地浩平（筑波技術大学）

城綾実（奈良先端科学技術大学院大学）

質的研究において、相互行為の時間構造を緻密に記述していくことは、重要な方法である。時間構造を記述することで、参加者の行為のもつ重層的な含意を、行為の構造じたいをベースにして明らかにすることができるからである。

マックス・プランク言語心理学研究所で開発され、無料公開されているELANは、映像、音声、時系列データに注釈（アノテーション）をつけるためのツールであり、こうした行為の時間構造記述にうってつけのソフトウェアである。ELANは開発後十数年を経て、いまや言語学にとどまらず、会話分析、動作分析、応用行動分析など、映像・音声を用いたさまざまな時間構造分析において基本的なツールになりつつある。また、分析対象も、もともと音声会話データにとどまらず、日常会話やフィールドワークによる相互行為データ、ワークプレイス記録、あるいは映画作品・アニメーションなどのフィクション、さらには演劇やダンスなどのドキュメンテーションなど、多岐にわたってきている。

このシンポジウムでは、ELANによりどのような質的研究が可能なのか、ELANで得られる時間構造分析からどのようにコレクションを作っていけばよいか、そこからデータの重層性をどのようにくみ取っていけばよいかについて、三つの異なる研究対象について紹介する。話題提供の後、全員で、データの性質によって分析に生じる固有の問題を比較しながら討議することで、相互行為の時間構造に着目した質的分析の今後の展開を考えていく。

### ELANを用いたジェスチャーの同期の質的分析（城 綾実）

会話中、人は誰かと同時に同じようなジェスチャーをすることがある。これは、知らない間に誰かと同じ姿勢をとるような無意識的な同調や産出者たちが決まった合図をきっかけに事前に打ち合わせした表現を産出しているものとは異なる。本発表で取り扱うジェスチャーの同期は、(1)発話の連鎖や活動の完了位置、(2)進行中の活動が滞ったりトラブルが生じたりした後の位置、(3)有標な理解の主張が行われた後の位置において、これまでの会話内容、発話を構成する文法や統語的構造、音調的特徴、ジェスチャーの階層的構造、表現対象が有する構造的特徴などのさまざまな資源の収斂によって予測可能になる組み立て方で、動きを調整しながら達成される相互行為の産物である（城 2018）。

では、ジェスチャーの同期がどのようにして達成されているのか。発表者はこれまで、会話参加者の発話、両手の動きや形、視線を中心として、ときには頭部の動き、姿勢の変化なども対象としてELANで注釈を付与し分析の手がかりとしてきた。本発表では、簡単に注釈付与の方針やポイントを解説し、ELANが動画や音声に紐づいた形で注釈を付与できることが、分析の深化や効果的なプレゼンテーションに貢献している様子を紹介する。

## 手話会話の多次的記述に基づくコレクション作成と質的分析への展開 (菊地浩平)

本発表ではELANによる手話会話のコーディングを通じたコレクション作成の手続きについて紹介し、このコレクションの検討から具体的な分析の観点が導き出されていくプロセスについて述べる。コミュニケーションの最中、人の身体は実に様々なことをしている。相手に視線を向け、発話を産出し、文字通り耳を傾け、話を聞きながら大きくうなずいたり首を振ったり、身振りを交えたり、場合によっては歩きながらこれらのことを行っていることすらある。こういった身体の動きを含めたコミュニケーションのあり方は、動画撮影手段の普及によって記録・保存することが容易に行えるようになった。一方で、こういったコミュニケーションにおける人の身体は、そのタイプやそれぞれが持つ情報量の多さ故に分析にはかなりの困難が伴う。例えば「この発言を産出している途中のこのタイミングで視線が相手からホワイトボードに向け変えられ、それに少し遅れて指さしによる指示が行われている」といった多次的な、しかしひとまとまりの単位として組織されているような振る舞いを、二次元の紙面上に記述していくためには様々な工夫が必要となるし、それらが実際の動画データのどこでどのように生起しているのかを記録するには、さらに別の工夫が必要となる。ELANではこういった記述にあたっての課題を「層」と「注釈」という2つの概念を駆使することによって解決することができ、高い一覧性のもとで多次的に表現することができる。この表現と、内蔵されている高度な検索機能とを組み合わせることにより、類似の現象を蓄積すること、すなわちコレクション(事例集)の作成も可能である。本発表ではこういった研究ツールとしてのELANの特徴を踏まえながら、手話という研究対象が持つ様々なモダリティをどのように「層」と「注釈」という概念に落とし込み、実際の分析に役立てていくのかについて紹介したい。

## アニメーション版『アルプスの少女のハイジ』の「チーズ」場面を用いた重層的ショット分析 (細馬宏通)

一つのショットに含まれる要素は、ショット内のできごと、複数のショットの連鎖によって構成されるシーンのできごと、さらにそのシーンによって組織化される物語によって重層的に読み解かれる。この重層性を活かし、輻輳する解釈を構成していくにはどうすればよいか。この発表では、高畑勲演出作品である「アルプスの少女ハイジ」第二話のチーズをあぶる場面を素材に、ELANを用いた重層的な分析を行う。

「とろーりチーズ」としてファンの間では有名なこの場面は、いくつか興味深い問題を含んでいる。一つは、カートゥーンの伝統である「穴あき」チーズとして描かれている点である。穴あきはエメンタールと呼ばれる種類の特徴だが、このチーズは物語上ヤギの乳からできるエメンタールとは別のチーズであり、いわばフィクションでしかありえない外見をもっている。このチーズの穴が、ショット上どのような効果をもたらしているかをショット内分析によって明らかにする。次にシーンに着目したショット間分析によって、チーズとハイジの関係を記述する。さらに、物語分析によって、このショットがチーズの不在を感じさせる「サスペンス」の後に現れることを指摘し、物語上のハイライトになっていることを指摘する。

## 看護の文化における質的研究の可能性を探る —研究者を悩ませている看護独自の文化とは何か—

企画・話題提供：伊東美智子（立命館大学大学院人間科学研究科・神戸常盤大学）

司会：小澤伊久美（国際基督教大学）

話題提供：田中千尋（立命館大学大学院人間科学研究科）

中本明世（甲南女子大学）

横山直子（姫路獨協大学）

指定討論：浅井亜紀子（桜美林大学）

### 企画趣旨

本企画では、「看護の文化」を鍵として、看護に潜む幾つかの課題を検討し、質的研究の可能性を探りたい。話題提供者は看護基礎教育に携わる看護教員かつ質的研究者である。心理学者Brunerは、文化を「われわれの日常生活における『普通』『規範』『標準』」であり、「変化しないものでは決してない」とし、文化の発展可能性を述べている。仮に看護に独自の文化があるとして、それが見えないう壁となって看護の研究、臨床及び教育の可能性を阻害しているように思える。その一方で発展性を秘めているとも考えられる。本企画でも文化をいわゆる伝統や普遍に限定せず、さまざまな看護の現場から立ち上がる声の中に探っていきたい。

進行の前半は「看護独自の文化はどのように捉えられるかを考える」、後半は「看護において質的研究を行う際どのような弊害や可能性があるか」をテーマとする。話題提供者より各々の研究成果等を踏まえ問題意識を発表した後、異文化コミュニケーション・文化心理学をご専門とされる浅井亜紀子先生を迎え、フロアーの皆様と共に意見交換を行いたい。

### 話題提供1：伊東

昨今、社会人経験後に転職して看護師を目指す人々が増えている。しかし、高校卒業後にそのまま養成所に入学してきた学生と比べると、彼ら/彼女らは看護学校在学中、並びに就業後に様々な問題を抱えているとの指摘がある。そこで演者は、社会人看護学生および社会人看護師の看護を学修する過程における研究に取り組み、インタビューを実施した。その結果、看護を一から学び仕事に就こうとする中で、これまでの社会人経験と協力者の間で葛藤を抱えることが分かってきた。特に前職が介護職やケアワーカーであると、看護学校入学直後や病院への入職直後に、教員や先輩看護師から、「介護士してるから、『出来る』と思わんとって」「介護と看護の視点は違うから一緒にしないで」と、釘を刺されていた。一方で、妊娠、出産、子育て経験や年長であるという点に対しては、経験を活かしたり役割を果たすことを期待されたりする。これらは、看護職である我々の中の社会人に対する何らかの固定観念によって起こっているのではないだろうか。それは、看護の独自文化として捉えられるものであるのかについて、意見交換をしたい。

### 話題提供2：田中

看護職員の「質」「量」の確保は、看護基礎教育における大きな課題として再び注目を集めている。だからこそ、看護基礎教育を担う看護教員の質的・量的充実が従来にも増して問われている。演者

(2016、2017) は看護教育実践経験10年以上の看護教員を対象に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach) を分析方法に用い、力量形成過程の構造を明らかにした。その結果、看護教員は生涯発達し続ける存在として、ライフイベントも含めた経験の中で自分のキャリアを描き続け、力量形成していた。一方、人間が時間と共にある視点、時間を捨象せず人生の理解を可能にする視点は置き去りとなった。また、看護教育制度の歴史的変遷や特徴から、わが国において「看護教員」とは誰のことをさすのか等の意見を得た。これまでの研究は、特定の教育機関や職位といった部分的、断片的な側面に焦点を当てたものが多くみられる。しかし、教師の資質、力量やアイデンティティ、教育観などは教育現場だけでなく、生活を通して「人生」というスパンで形成される (Goodson 1992, 藤井・山田訳2001) ことから、一人の看護教員の人生や経験にも着目することが求められているのではないだろうか。そこで時間を捨象して外在的に扱うことをせず、個人に経験された時間の流れを重視する文化心理学のアプローチである、TEA (Trajectory Equifinality Approach; 複線径路等至性アプローチ) を緒に、質的研究がもたらす発展的可能性を模索したい。

### 話題提供3：中本

演者は、看護師のメンタルヘルスに対する支援体制構築に向け、メンタルヘルス不調による休職離職を経験した看護師のプロセスについて研究をおこなった。今回、その中で見えてきた“看護独自の文化”と、そこから捉えられた価値変容について看護師のキャリア発達の観点から発表する。対象者は、看護職から離れ「心身にかかっていた仕事ストレスの荷を下ろす」までは『看護を担う専門職者としての信念』がキャリア発達への促進要因となっていた一方で、その信念があるがゆえに、置かれた状況にうまく対応できず阻害要因としても働いていた。その後の、看護職から離れ心身にかかっていた仕事ストレスの荷を下ろしたあとのプロセスでは、『看護を担う専門職者としての信念』がキャリア発達の促進要因としてのみ働いていた。また、価値においては「自分の特性を受け入れる」、「仕事に対する心の持ちようの変化」、「自分のありようの変革」といった変容がみられた。これらから、メンタルヘルス不調による休職離職に至る過程では、「看護師である自分はこうであらねばならぬ」という“看護を担うべきものとしての専門職者観念”という文化的要素によって自己との乖離が起き、休職離職に至っているのではないかと推察する。この専門職者観念は看護独自の文化であり、看護師のキャリア発達の促進要因とも阻害要因ともなりうるのではないだろうか。演者が捉えた専門職者観念が、看護師のキャリア発達にどのように影響するのかについて議論したい。

また、演者は研究対象者のリクルートに苦労した経験があり、メンタルヘルス不調を語らせない・語らない文化ゆえの質的研究の困難さと、今後の展望についても議論を深めたい。

### 話題提供4：横山

筆者は『脳卒中患者の心理過程とその看護支援』を中心に質的研究を行っている。これらの研究結果や先行研究からは、脳卒中患者にかかわる病棟看護師は、危機理論や障害受容論のステージに患者を当てはめ画一的に患者を見る傾向にあることや、患者のマイナス面を見出しがちであることがわかっている。脳卒中患者のレジリエンスに関する研究 (2018, 分析中) では、患者に対するポジティブな働きかけや要因として、リハビリテーションスタッフや家族は挙がるが、そこに看護師の姿はなく、レジリエンスを高める存在とはいいがたいようである。これらより演者は、看護師が臨床で行っている看護援助はリスク管理が中心となり、患者の「強み」「可能性」に焦点が当てられていないのではないかと。また、患者個々を大切にするといつつ、理論の『あてはめ』によって画一的な看護となっていないか。リスクが前面に押し出される問題解決思考が患者の全体像に薄膜をかけ、患者を置き去りにしていないかと、考えている。近年、臨床看護を取り巻く環境は複雑であり、患者は支援が不十分なまま、看護師は患者への看護に深みを持たせられぬまま退院に至る状況は続くであろう。看護の歴史や発展から臨床における文化的側面を踏まえ、今一度、臨床看護の在り方を問い直したい。

## 夢の現象学 -学際的アプローチ-

企画・司会・話題提供： 渡辺恒夫（東邦大学名誉教授）  
話題提供： 岡田 斉（文教大学人間科学部）#  
武内 大（立正大学文学部）#  
小野純一（自治医科大学医学部）#  
指定討論： 麻生 武（奈良女子大学特任教授）

### 企画趣旨

広義には夢の現象学とは「夢の世界とはどんなところか」に対する学際的探求を意味する。本シンポジウムは、哲学・心理学・精神医学からの参加を見た科研基盤研究（C）一般（17K02180）「夢の現象学」（代表：武内大）での中間成果に基づき、指定討論者として子どもの夢についての質的研究で実績を上げている麻生を招聘し、夢の現象学を質的心理学として展開する可能性を模索する。まず渡辺が、狭義の夢の現象学の紹介を兼ねてフッサール志向性論に基いた漱石『夢十夜』の現象学的分析の試みを提示する。次いで、夢見のメカニズムよりも夢の現象を重視する神経認知理論の立場から夢想起を対象に調査研究を行ってきた岡田が、その成果の一端を紹介する。武内は、現象学的哲学を背景としつつ試みてきた体外離脱・明晰夢に関するインタビュー調査と、そこで得られた知見にもとづき、初期近代ヨーロッパの妖精信仰の解明を試みる。イスラム哲学専攻の小野は、イスラム神秘主義文献中で重視される夢体験記述と現代の夢研究との接点を探る。最後に麻生が、自らの夢研究を踏まえてこれらの発表を論評する。

### 話題提供「漱石『夢十夜』の現象学的分析」（渡辺恒夫）

『夢十夜』の分析を例に、フッサール流の現象学的解明の方法を具体的に示す。この作品に出現する色彩の種類や視覚聴覚触覚など感覚の種類の出現頻度を統計的に解析すると普通の夢と大差ないことから（松本、1996）、実際の夢が元になっていると仮定して分析を進める。現象学的分析段階進行表を用い、第1段で夢テキストを意味的に分割する。第2段で分割された各夢テキストから主要な志向性の種類を抽出する。第3段で夢テキストを想像的変更の技法によって現実により得る「現実テキスト」に変容し、そこでの志向性を抽出する。第4段で夢テキストと現実テキストの志向性の相違を考察し「夢世界の原理」から見て妥当性があるかを判定する。夢世界の原理とは、現実世界では空想も想起も予期も、現実・現在ではないという二重性の意識を伴っているが、夢世界では意識が一重化して現実化・現在化してしまうことを言う。第三夜「不気味なわが子を負ぶった夢」を例にとる。「百年前……のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したという」自覚にもかかわらず夢は進行するが、夢世界ならばこの自覚（＝想起）と同時に百年前の殺人現場へと夢の場面が飛ぶはずである（＝想起の現在化）。そうならないのは夢の構造そのものに創作的に手を加えた嫌疑が出てくる（詳細は、渡辺、2016参照）。

- ・松本惇治(1996)「漱石の『夢十夜』は創作か」『夏目漱石『夢十夜』作品論集成』（坂本育雄編、大空社）所収。
- ・渡辺恒夫（2016）『夢の現象学・入門』（講談社選書メチエ）。

## 話題提供「現象を数量化することは面白い。夢に関する調査研究を27年間続けて。」（岡田斉）

夢に関する心理学的研究には、夢の内容に意味を見出そうとする精神分析の流れと、REM睡眠に着目し夢を発生させる脳内メカニズムの解明を目指す脳科学の流れがあることが知られている。しかし、近年そのどちらにも属さない認知心理学的な観点から夢にアプローチする研究が現れてきた。この立場に立つ研究者は夢の意味や発生メカニズムではなく、夢という意識体験を伴う現象を睡眠実験室や調査により収集し、それらと関わる認知的要因を実証的に探る。これらの研究の結果、平均的な夢の内容は精神分析や脳科学的な研究が示すような内容とは異なり、覚醒時の認知機能が反映された日常生活の繰り返しが大半を占めることが明らかされてきた。私たちは1992年ごろから夢の感覚的側面とイメージ能力の関係に着目した調査研究を始めて27年間継続することとなったが、これは認知心理学的夢研究に位置づくものと考えられる。今回はこのような研究の例として私たちの研究成果のうち4つ、1 夢想起頻度とイメージの能力の関連、2 夢見で体験する感覚モダリティについての調査、3 夢の中で体験する色彩感覚の体験頻度の生涯発達、4 聴覚障がい者と健聴者が夢で体験する感覚と感情の比較、を紹介する。これらの研究はいずれも数量的研究であるが、数量化の目的は仮説の検証ではなく現象を記述するため手段と考えて用いている。現象記述のために「質的」に「数量」を用いる研究方法があるということも含めて話題提供としたい。

## 話題提供「妖精王国の謎 明晰夢の現象学的分析」（武内大）

本発表では、初期近代のヨーロッパの妖精信仰を題材に、明晰夢の現象学的分析を行う。16世紀頃のシチリアで、夜になると妖精と共に空を飛び、妖精王国で催される宴会に参加し、妖精から病気の治療法を教わるという驚くべき体験について語る者たちが現れた。同様の体験談は、同時期のスコットランドにも見られる。前者は「外から来た女性(Donas de fuera)」、後者は「祝福された者(Seely Wight)」と呼ばれる妖精カルトを形成した。当時の異端審問官の目には、彼らの語っている妖精は悪魔、宴会はサバトとして映り、それに参加する彼ら自身は、魔女として断罪されてしまう。もちろん、このような体験は、現代の我々の感覚からすれば、到底ありえない話である。しかし単なる空想が語られているわけではない。それはある種の幻視体験というべきものである。幻視体験には、「覚醒状態において産出される心像」(覚醒幻視)、「半覚醒状態において産出される心像」(入・出眠時心像)、「睡眠状態において産出される心像」の三つがある。ここで問題となるのは三番目の幻視、つまり夢である。歴史学者のE.ビーヴァーやJ.グッドエアは、認知心理学の観点も導入しつつ、このような夢としての幻視体験を体外離脱体験、明晰夢体験として解釈している。本発表では、体外離脱・明晰夢体験者のインタビューを通じて、体外離脱体験、明晰夢世界の現象学的本質分析を行い、さらにそこで得られた知見を元に、妖精体験の意味を辿り直してみることにした。

## 話題提供「イブン＝アラビ－的夢＝ヴィジョン体験の基底構造」（小野純一）

イベリア半島に生まれシリアに没したアラブ人思想家イブン＝アラビ－（1165-1240）は夢解釈学を文明の始原と中核にもつイスラム世界でも夢＝ヴィジョン体験の豊富さで際立つ。彼は数多くの幻視を書き残しているが、とりわけ二つの主著で名高い。『マッカ啓示』では1202年のマッカにおける幻視を発端として30年間にわたって観想体験を大判2500頁（現代版約15000頁）に綴り、『叡智の台座』では1229年12月17-26日に夢に見たヴィジョンを記録した。彼は前者を自著とするが、後者は自作ではなく預言者ムハンマドの言葉とする。例えば、ヒジュラ暦同年2月20日（西暦では翌1230年）の夢を前者（II:449）に含めており、後者が当事者にとって独立したものと意識されることがわかる。そこでまず後者を独立した一連の夢＝ヴィジョンとなす基底構造を検討する。具体的操作としてヴィジョン全体を大きな構造単位に区分し、覚醒時に不可能なものに想像的変更を加え、志向性に起きる変容を比較する。それによって提示される基底構造は、知覚の主体と客体との入れ替わり（すなわち感覚の遍在化）の場として他者との交流を俯瞰する自我が与えられる体験構造である。俯瞰的自我は入れ子構造を場とし、当の俯瞰的自我は俯瞰されない。この仕組みを体験当事者はある種の超越性として確信していることが当人の記述から了解できる。この確信の条件が教義ではなく、俯瞰をすり抜ける他者性であることを本発表はさし当りの結論とする。

## 社会と心理をむすぶ質的研究

企画・司会：朴 希沙（立命館大学人間科学研究科）  
話題提供：西井 開（立命館大学人間科学研究科）  
朴 希沙（立命館大学人間科学研究科）  
指定討論：丸一俊介  
（サポートグループ ”それが一人のためだとしても”）  
齋藤清二（立命館大学総合心理学部）

### 企画趣旨

本シンポジウムの目的は、一般に対立的なものとして捉えられる心理と社会をむすぶものとしての質的研究の可能性を議論することである。具体的には、話題提供にて個別の体験から出発し最終的にそれを社会構造とむすびつけた2つの研究を取り上げる。1つ目は、モテないことに悩む周辺化された男性たちのグループでの語りを分析し、男性の体験世界に関してジェンダーの視点を踏まえて考察した研究であり、2つ目は、在日コリアンの悩みの特性及び日本人と在日コリアンの対話における可能性を追求した研究である。

指定討論においては、この2つの質的研究が生成される過程で、研究者と研究協力者、そして研究指導者が何を体験していったのかを描き出す。まず研究協力者の研究協力の体験を踏まえながら、研究が持つ社会的意義や研究協力者との研究の進め方について議論する。さらに、話題提供者たちを指導した教員がその研究過程に伴走した経験をもとに、質的研究が持つ研究者及び臨床家としての成長を促す可能性について言及する。

### 話題提供「「非モテ」に悩む男性の体験世界の探求—男性の語り合いグループの実践から」（西井開）

本話題提供では、研究者自らが実践グループを立ち上げ、そこでの語りを分析するというユニークな研究の内容を紹介する。また研究の過程でグループの参加者とどのような関係性を築き上げてきたかについても考察する。

話題提供者は、「非モテ」という言葉を媒介に一部の男性たちがインターネット上で男性性を達成できない苦悩を発信する現象に着目し、「非モテ」をテーマに当事者研究を行う男性の語り合いグループ「ぼくらの非モテ研究会」（以下、「非モテ研」）を立ち上げた。2019年3月末現在で22回実施し、実参加者数は36名、延べ参加者数は144名である。

グループの語りから、参加者である「非モテ」男性は、背が低い、運動ができない、仕事ができない、友だちがいない、恋人がいないなどを理由に、周囲からいじめやパワハラなどの被害経験を有していること、また他者のまなざしを内面化し「自分は一人前の人間ではないのではないか」という自己不全感を増し、集団からの疎外感を抱いていることが分かった。さらに、集団に帰属するために男らしい男性像を目指すこと、また女性と交際することで不遇な状況を挽回できるのではないかと考えて相手に過度に執着しストーカー行為を行うことも明らかになった。以上の結論より、「生きづらさ」を抱

えていると同時に男性規範を維持し、時に加害に至る男性の営みを多面的に描き出すことが可能となった。

### 話題提供「「してもの会」におけるRespectful Racial Dialogueの実践—在日コリアンと日本人の「分断から動き出す交流」」（朴希沙）

本話題提供の目的は、2つある。1つ目は、「研究と社会」「心理と社会」「自分と社会」の関係について、論文執筆中に話題提供者が模索した過程を紹介することである。2つ目は、それらの模索を経て執筆した研究論文の内容について紹介し議論することである。

話題提供者はこれまで、自身が立ち上げた在日コリアンの悩みにアプローチするグループを研究対象としてきた。そして①在日コリアンの悩みの特性とその改善過程、②日本人参加者が在日コリアンをサポートする活動の中で変化する過程を考察した。①に関しては、在日コリアンの悩みの特徴としてA.（被差別体験を始めとした）社会的側面である「大きな物語」と、B.Aとは関係がないように見える個人的側面（個人的意志や人間関係）である「小さな物語」とが乖離して存在していることを明らかにした。そしてAB両者が段階的・螺旋的に統合されることにより、社会的側面だけに回収できない欲望や意志を持った自らの存在と、その自らを日本社会で生きる在日コリアンとして改ためて俯瞰する新たな視点が生まれる過程を描き出した。また②に関しては、日本人が在日コリアンという具体的な「他者」に出会いその問いかけに応えることにより変化していく過程を考察した。そして、①及び②が可能になる場の条件としてRespectful Racial Dialogueという対話実践を提唱した。

## テクノロジー、自然、行政の交歓が創る未来社会 —ポスト社会構成主義の実験—

企画・司会・話題提供・指定討論：香川秀太（青山学院大学社会情報学部）

話題提供・指定討論：日比野愛子（弘前大学人文社会科学部）

小笠原祐司（NPO法人bond place）

### 企画趣旨

生産・消費活動の拡大とともに過度に作り変えられ、人間自らの手により住みづらい環境と化していく自然。そもそも肥大化する産業資本主義を問い直し、コンヴィヴィアルな関係を構築する場として生まれたにもかかわらず、特定の情報産業が巨額の資金を得る場として機能するようになったインターネット。セルフ・マネジメント（企業化された）個々人が自由な自己決定と自己責任化を進めれば進めるほど、国家行政による統治（全体化）が進行するというダブルバインドを抱え、結果、格差や孤立化が進行する新自由主義的統治。

このように、現代社会は、グローバルかつローカルな危機的状況を生成し、その結果、近い将来、食料や資源がこれまで通り安定的に得られるか否かさえ、予測不可能な時代に突入している。その一方で、自由で創造的なコミュニティの形成、自然と共生するライフスタイルやテクノロジーとの融合、新しい医療や福祉の形の模索など、様々な萌芽的な活動が同時多発的に誕生している。つまり、偏在する危機は、その一方で、新しい社会構造の萌芽を誕生させている。

本シンポジウムは、それまでの社会の主流のように、自然を搾取の対象とし、テクノロジーを利益獲得の手段とし、一方で、草の根の活動家が行政を官僚主義と権力の象徴として対峙するような社会から、むしろ、自然、テクノロジー、行政、そして、その他の人・モノ・生物（の特異性）と交歓する未来社会の在り方について、各発表者が調査ないし活動に取り組む事例をふまえて検討を行う。つまり、事例から未来社会の萌芽をつかみ取り、拡張していく創造的交歓を試みる。このように、ポスト社会構成主義は、ローカル-グローバルの分離を超えて、具体的活動と未来の社会構造のハイブリッドを芸術的に創造する活動である。そこにあるのは常に実験であり、「成功」や「失敗」という概念はない。

### 話題提供「人工物からみる集団の変容」（日比野愛子）

近年の情報テクノロジーや生命操作技術の進展は、人工物の存在感をいやがおうにも高めている。これまでの多くの集団研究は、人間から成る集合体にフォーカスしてきたといえよう。しかしながら、人工物は集団の物的環境として埋め込まれており、集団の活動や変容に密接に関わる。さらに近年の技術論では、人工物の集まりそれ自体が、生物組織体のように自律的な動きをなすと理解する枠組みも登場している。以上を踏まえ、本話題提供では人工物を主役としたうえで、現代における集団の変容を考えてみたい。以下の2つの集合体について事例報告を予定している。第一は、地方工場の生産現場、第二は、人工細胞を設計する科学実験室である。前者の工場の現場では機械化、自動化が絶え間なく進んでいる。ただし、付加価値付与が鍵となる現代の生産現場においては、人工物（具体的には製品製

造のための機械)の機能ではなく、人工物の物理的な身体に新たな意味が付与されているエピソードが見出された。他方、後者の実験室現場においては、異なるレベル・形態の人工物(具体的には人工細胞)が統合される際、実験室同士の垂直的な統合関係が必ずしも必要ではないことが示唆された。それぞれの事例は、新しい人工物の登場が、それまでの集団組織の境界そのものを変容させる可能性を示している。

文献：日比野愛子(採録決定・印刷中)工場生産の現場にみる身体-機械の関係性、国立民族学博物館研究報告

### 話題提供「多様なステークホルダーとの関係構築に向けて」(小笠原祐司)

NPO法人bond placeでは、人と人との繋がり合う場作りをミッションとし、対話の場作りやワークショップを通しての問題発見、解決に取り組んでいる。主な事業としては、子どもの貧困対策や居場所づくり、女性起業支援などの活動を地域に根ざした形で行なっている。

近年、様々な問題や社会システムが複雑に入り組んでおり、一つの専門機関だけで解決できない状態が起きている。そこで、私たちは一つ一つの事業を多様なステークホルダーを交えながら進めており、起きている問題に対して、互いの強みを最大限に発揮できるように協働をしながらアプローチをしている。

特に、地域での活動において、行政との関係性の重要性を感じているが、よく起こる可能性がある課題として、立場の違いから、関係者の中で価値観、信念、利害が相反したり、経験や知識の差に開きがあったりする際に生じることもある。

今回、行政だけでなく他のステークホルダーとも一緒になって事業を行っていった際に、お互いが感じている想いの共有や、共有ビジョンの創造など、共に地域の問題解決に向けて、私たちがどのように互いに対話をしながら進めていったのかの実践事例を共有していく。

### 話題提供「人と自然、民と行政との近未来的な交歓のかたち」(香川秀太)

自然と共生し自給自足を営むパーマカルチャー、専門職の概念を変えるコミュニティナース、共同で出資し職を自ら生み出す労働者協同組合、コミュニティビルダーとして動く無所属議員、自然環境の中で共同養育を営む自主保育。これらの事例をもとに、自然や行政との近未来的な実践形態を読み取る。その際に、フーコーの企業家論(新自由主義下で拡大する、自己を投資の対象とする経済的主体)、ネグリ&ハートのマルチチュード論(<共>と特異性が螺旋的に発達する自律分散的なネットワーク)、そして、柄谷行人のアソシエーション論(失われた互酬制の高次元の回復)等を理論的な足掛かりとして、現在出現しつつある未来社会の可能性を読み取っていく作業を行ってみたい。未来社会の鍵になるのは、従来、個体主義の乗り越えとして論じられてきた他者論(自己-他者のインタラクション論)ではなく、「活動=生命」を軸とした創造的交歓(香川、2019)であると考えている。つまり、脱他者論が必要になる。

文献：香川秀太(2019)「未来の社会構造」とアソシエーション、マルチチュード、活動理論、実験心理学研究、58巻2号p.171-187

付記)本セッションは、基盤研究C(代表香川秀太、研究課題18K03013)の助成による。

## TEA研究の発展可能性について考える ～理論と実践研究の事例から～

企画・司会・話題提供：上川多恵子（立命館大学大学院人間科学研究科）

司会・話題提供：宮下太陽（立命館大学大学院人間科学研究科・株式会社日本総合研究所）

話題提供：卒田卓也（立命館大学大学院人間科学研究科・近畿大学心理臨床教育相談センター）

土元哲平（立命館大学大学院文学研究科）

指定討論：豊田 香（拓殖大学）

### 企画主旨（上川多恵子）

複線径路・等至性アプローチ（TEA：Trajectory Equifinality Approach）は、2004年にTEM（Trajectory Equifinality Modeling）が生まれて以降、研究実践に基づいた理論的精密化を重ね、成長を遂げてきた（安田・サトウ,2017）。TEAは「時間を捨象せずに人生径路の理解を可能にしようとする文化心理学に基づいたアプローチ」であり、「諸概念を通じて、実存する人のライフ（生命・生活・人生）や場の有り様を丁寧に捉えることができる（安田・滑田・福田・サトウ,2015b）」という特長を持っている。本シンポジウムでは、このような特長を持つTEAが、どのような目的を持った研究に用いられてきたのかを概観し、TEA研究に対する理論的な理解をもう一步深めるとともに、今後の発展可能性について各登壇者より話題提供を行う。

### 1. TEA理論のこれまでとこれから（宮下太陽）

TEAとは何であって、何でないのか。TEAを用いて研究を行うということは、どのような学問的営みと位置づけられるか。これまでのTEA論文のレビューを踏まえた上で、他の方法論との差異について再考することで、理論的な理解を深めたい。

また、現在TEAを構成する理論枠組みである、HSI、TEM、TLMGの発展の過程を振り返り、今後の発展可能性について展望する。特に、分岐が発生する分岐点におけるユーリア・エンゲストロームの「拡張的学習」との関係性、またTEAの理論的位置づけとして、哲学の世界で新たな潮流として注目を集めているマルクス・ガブリエルの「新しい実在論;意味の場の存在論」との関係性について考察したい。

### 2. 不登校に対する親の変容プロセス（卒田卓也）

文部科学省の発表によると、平成29年度では小中学生の144,031人（小学生35,032人:0.54%、中学生108,999人:3.25%）が不登校であると報告されており、5年連続で増加している。カウンセリングの現場では、親だけが来談されるケースが多く、反対に子どもだけが自主的に来談するケースは非常に少ない。このことから親面接が重要な支援の場になっており、親に対する有効な支援やアプローチする姿勢を考えることは意義深いといえる。本研究では、子の不登校を経験した親の語りから、どういった社会的圧力を受け、不登校に対して親の意識がどう変容していったのかについて考察したい。

### 3. 通訳として日本本社に派遣された中国人女性の敬語使用に対する価値変容（上川多恵子）

本発表は、日本社会との関わりの中で敬語使用に対する意識が変容した中国人女性1名を対象にTEAを用いて研究を行ったものである。本研究の協力者は中国国内の大学を卒業後、日系企業に就職し、通訳として日本本社に派遣された経験を持つ。そして、さまざまな経験を通じ、今では敬語で話す方が日本人と話しやすいと感じている一人である。では、協力者はどのように日本社会との関わりを解釈し、敬語使用に対する価値を変容させていったのだろうか。本発表では、敬語使用に対する意味の内化と外化に注目し、TEMでの分析にTLMGを加えて「敬語使用に対する価値変容」を考察する。

### 4. Auto-TEMにおける「モデリング」の意義（土元哲平）

本発表では、自己の経験をTEMで描く際の「モデリング」の意義について考えたい。発表者は、自身が「教師になる」というキャリア決定をどのように進めてきたのか、その決定に至るまでに、他者からいかなる支援を受けてきたかについて、オートエスノグラフィー(自文化の記述的探求)による研究を実施してきた。その一環として、TEMを用いて自文化の経験を分析してきた(Auto-TEM)。本発表では、Auto-TEMにおける「モデリング」のプロセスに焦点をあて、その中で得られた自己理解のあり様や、自己の経験を語り直すことの意義について考察する。さらに、それをもとに、他者の文化を描くTEMと自己の文化を描くAuto-TEMの異同はどのように見られるのか、話題提供を行う。

#### 主な参考文献

エンゲストローム, Y. (2018). 拡張的学習の挑戦と可能性——いまだにここにはないものを学ぶ(山住勝広, 監訳). 新曜社.

ガブリエル, M.(2018). なぜ世界は存在しないのか (清水一浩, 訳). 講談社.

木戸彩恵・サトウタツヤ(編著). (2019). 文化心理学——理論・各論・方法論. ちとせプレス.

サトウタツヤ(2017). 複線径路等至性アプローチ. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子(さと子)・村里忠之(編著).(2017). 「主観性を科学化する」質的研究法入門——TAEを中心に (pp.82-93). 金子書房.

Tangene, C. (2017). The “Silence” of the Ocean: Affective Self-Dialogue on a Sailing Night-Shift. In O. V. Lehmann and J. Valsiner (Eds.) Deep Experiencing. Cham, Switzerland: Springer, 39–50.

ヴァルシナー, J. (2013). 新しい文化心理学の構築——〈心と社会〉の中の文化 (サトウタツヤ, 監訳). 新曜社. (Valsiner, J. (2007). Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology. Sage.)

安田裕子・サトウタツヤ(編著) (2012). TEMでわかる人生の径路——質的研究の新展開. 誠信書房.

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編著)(2015a). ワードマップTEA理論編——複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ. 新曜社.

安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編著)(2015b). ワードマップTEA実践編——複線径路等至性アプローチを活用する. 新曜社.

安田裕子・サトウタツヤ(編著)(2017). TEMでひろがる社会実装——ライフの充実を支援する. 誠信書房.

# 現代の病い経験を捉える新しい概念生成に関する 現象学的研究

## —多様なデータからの議論を通して—

企画・司会：坂井志織（首都大学東京）

話題提供者：杉林稔（愛仁会高槻病院）

細野知子（日本赤十字看護大学）

榊原哲也（東京大学）

指定討論者：やまだようこ（立命館大学OIC総合研究機構）

### 企画趣旨

医療技術の革新的進歩は、致命的疾患の減少に貢献した。他方で、多くの疾患を慢性化させ、「治療」とは異なる病いと共生を生んだ。治療や生活を大きく変化させる新薬等の開発も続いており、正負両側面において先の見通しが立ちづらいのが現代の病い経験である。多様化・複雑化した経験は、既存の「治る／治らない」「病気／健康」という二元論の視点では捉えきれなくなっている。本企画では、現代の病いを生きる当事者の経験に接近し、生き方そのものから経験を捉える新たな概念の生成を目指した取り組みの一部を報告する。まず、①現代の病いを生きる病者へのインタビューの中から、関節リウマチを患う方の経験を、家族や仕事との関連も含めて杉林（医学）が報告する。次いで、②地域住民と共に病いについて語る「生き生きカフェ」を通して書き留められたフレーズの分析を細野（看護学）が提示する。最後に、①②からどのように概念を生成するか、また本研究で目指す概念の位置づけについて榊原（哲学）が報告する。指定討論者のやまだ氏（心理学）からのコメントを入りに、全体で議論していきたい。本研究はトヨタ財団研究助成プログラムの一部である。

### 話題提供1 関節リウマチを抱える看護師の体験と実践：杉林 稔

私たちの研究プロジェクトでは慢性の病いを抱える人々に個別インタビューを行い、現象学的分析を加えている。本シンポジウムではその中から1名、関節リウマチ発症後認定看護師の資格を取り、子育てもしている事例Yさんについての分析を報告する。

「私にとっては病気がプラスになってるこのほうが大きいのかな」というYさんの語り全体から見えてきたことは、Yさんの体験世界において、プロセス（変形プロセス、遺伝プロセス等）・サークル（痛みサークル、靴下サークル、順番サークル、医療者仲間サークル、しゃあないサークル等）・サイクル（資格取得サイクル、やさしさ獲得サイクル等）という3種の構造・運動体が作動しているということであった。Yさんにとって「関節の変形」は「だんだんだんだん」進む機械的な「プロセス」であり、一連の変化は一定の方向に向かうように続き、後戻りしない。その先に「仕事ができなくなってしまう」ことが待ち構えているゆえに、Yさんはそれを恐れる。

しかしYさんは患者さんや子供たちと「痛み」を介して相互につながりあう円環の中を生きている。この円環をさしあたり、「痛みサークル」と呼ぶことにする。「サークル」には、同好の人が集まる趣味の会合、というライトな響きがあり、そこでは人と人が上下関係なく輪になるようにゆるく楽しくつながっている。Yさんが痛みを押してでも患者のストレッチャーを押したり、子供たちが一緒になってYさんに靴下を履かせるのも、サークル活動の一環であった。

さらに、病いを得ることでYさんは大きく「変化」した。それは機械的に進行する「プロセス」ではない。Yさんはすでに認定看護師という資格を持っているにもかかわらず、新たな資格を取ろうと計画している。また「昔はちょっと怖い」人だったYさんが「人に優しくなれた」。病いという出来事から

派生してYさんの体験や実践の渦中で水車や風車のように連鎖的・連動的に回転している運動体が見える。それを「サイクル」と呼んでみる。本シンポジウムでは、Yさんの語りと分析を詳細に提示することで、「慢性の病い」を生きる人々が切り拓いている領域の記述を試み、議論の礎としたい。

## 話題提供2 カフェで病い経験を語る営みとその作品の現象学的考察より：細野知子

本プロジェクトでは、地域住民と病いの経験を語り合う「生き生きカフェ」の運営もしている。カフェは、会場近隣の地域に配布したチラシにより関心をもった人たちが参加する。参加者達はゲストスピーカーによる病い経験の語りを聞いてから、グループでフリートークを行う。その際、病い経験を短いフレーズにまとめてもらうように依頼し、参加者は輪になって語り合っそこで言葉を書き留める。それらのフレーズは将来的に日めくりカレンダーにすることを伝えており、カフェ終了後には、「知らない人に会えて楽しかった」等の感想が寄せられている。

これらのフレーズを分析するにあたり、その背景を確認しておこう。自分や家族が病いにかかっている参加者が多く、「しがらみがないから話せると思った」等の動機で参加する場合もある。運営者はファシリテーターとしてトークに参加し、多くの参加者が初対面の状況で、自らの経験を端的に理解できるフレーズを、他者の語りに触れながら捻りだしている。フレーズの分析では、現象学的な観点からそれらに含まれる要素と要素間のつながりを見だし構造化した。

例えば、否定的な病いの存在を肯定的な意味に変換した「病気でも元気で働ける！」というフレーズの構造である。このタイプには「狭心症でも心は広い」のようにユーモアが表現されたものもあり、否定的な病いを別の次元のことがらに置換して肯定的な意味に逆転させることに笑いが生じていた。

「ユーモアで救われる」というフレーズが示す通り、従来の病い観とのコントラストから生じる笑いは参加者間で病いの意味を分かち合う方法となっており、救いとなっていた。また、「しゃべって気が晴れる」「ストレスも測りたい、他の人の伝わるように」のように、病いに伴う不快に動機づけられ他者との共有を志向していた。片や、「自分でがんばる」のように病む主体である他の誰でもない自己が際立ち、自らに向けて病いへの取り組みを言明してもいた。本稿を介した議論を通じ、自らの病い経験を語り合う営みのもとで生まれた作品の分析を提示し、特に、他者と分かち合う病い経験の構造を描出したい。

## 話題提供3 概念を生成するという事、その方向性——現象学の立場から：榊原哲也

概念生成については、認知科学や言語学の分野ですでにさまざまな議論がなされている。しかし、概念を生成するという事は、もとを辿れば、経験ないし経験された事象にある特定の、しかも他者と共有可能な表現を与えるということである。そこで本提題では、現象学という哲学をベースにして、そもそも事象を表現し記述するとはどういうことか、そしてその記述表現が他者とも共有可能になるとはどういうことかという点にまで遡って、考察してみたい。

現象学の知見によれば、経験される事象を表現し記述するという営みは、そこにある事象に言葉を与える、たんに名指すといった単純なことからではない。言葉には既存の意味の秩序があり、事象がその秩序にぴったり当てはまるとは限らない。むしろ表現はいつも事象に対して不足しているか、過剰であるかのどちらかだと言ったほうが良い。だから、言い表そうとする事象が、新たな事象であればなおのこと、事象とその表現とはつねに不足と過剰のはざまを揺れ動き、新たな表現運動を呼び起こす。何らかの言語表現によって、初めて事象が形を成すということもまま起こる。自分の経験であつても、他者にそれを語ろうとするなかで、あるいは他者たちとの対話の中で、初めてその経験が新たな意味を帯びて、間主観的に共有されつつ立ち現れるということも起こるのだ。

私たちの研究プロジェクトは、現代の（慢性化した）病いを生きる当事者の経験（という事象）を、できる限りその内側から、しかし他者とも共有可能な仕方表現し記述して、それらをもとに新たな概念を生成することを目指している。現象学的研究であるから、人がそのつど生き抜いている「状況」「時間」「空間」「身体」といった現象学的視点が、私たちの研究に一定の方向性を与えるが、既存の現象学が知らなかった「現代の新たな病い経験」という事象そのものの方から、それらを捉える新たな概念が生成されることを私たちは期待している。また、そうした概念生成の営みそのものの現象学的解明も私たちの課題である。

## インタビューにおける相互作用

### - その分析の難しさ -

企画：土元哲平・神崎真実・市川章子

司会・話題提供：土元哲平（立命館大学文学研究科）

司会・話題提供：神崎真実（立命館グローバル・イノベーション研究機構）

話題提供：市川章子（一橋大学言語社会研究科）

話題提供：小澤伊久美（国際基督教大学教養学部）

話題提供：鈴木美枝子（いわき短期大学幼児教育科）

指定討論：尾見康博（山梨大学教育人間科学部）

#### 企画趣旨 (土元哲平)

調査インタビューとは、インタビュアーとインタビュイーの間の相互行為（インター・アクション）のなかで知識が作られる営みであり、まなざし／見解の間で生じるもの（インター・ビュー）である（Kvale,2016/2007）。ナラティブ研究法においては「積極的に相互影響過程を生み出して、その相互作用によってはじめて見えてくる真実に着目する」（やまだ，2007，p.66）ことが重要とされるが、相互影響過程を生み出すための代表的手法としてインタビューは広く用いられている。しかし、トランスクリプトを読み込み、分析、論文化する段階で、これらの側面を捨象せざるを得なくなった研究もあるのではないだろうか。本企画では、インタビューを用いて研究を試みた研究者(初学者も含む)が、聴き手の思いや感情、語り手の気づきの体験、語り手との関係性、インタビュー技法の影響について話題提供を行う。そして、指定討論者がこれらの観点について議論を深める。最後に、インタビュー研究の中で捨象されてきたものを、いかに拾い上げていけるかについて、フロアを交えて議論したい。

#### 話題提供1 調査者を組み込んだ語りの解釈：「関係性」の記述へ向けて（神崎真実）

報告者は、不登校経験者等を受け入れる高校で参与観察とインタビューを行ってきた。参与観察やインタビューにおいて、調査者のフィールドへの関与は不可避である。したがって、語られたことの理解・解釈に際しては、調査者側の自己開示や関わりのあることを含めていくことが重要であろう。しかし、調査者のフィールドとの関わりは、それ自体が極めて曖昧で多層的であるため、調査者を含めた語りの理解・解釈は容易ではない。本報告では、公刊済の論文のエピソードを取り上げ、調査者の関わりを含めた再解釈をおこない、調査者とフィールドの関係性記述へ向けた課題について整理したい。

#### 話題提供2 日本語指導が必要な児童への教育経験を有する日本人教師の気づきと調査者への問いかけ：複線径路等至性アプローチ(TEA)のトランス・ビュー (Trans-view) が生み出す捨象 (市川章子)

報告者は、NPO法人や公立校および地域日本語教室などで日本語指導が必要な児童生徒や親たちに対する支援や教育・相談に携わってきた1人である。日本語指導が必要な児童への教育経験を有する日本人教師へのインタビューの過程では、「語り手と聴き手の視点の融合」を目指す。語り手と聴き手が納

得したTEM図は「トランス・ビュー」を表すとされているが、「トランス・ビュー」を通過することで手放す課題があり、それはどんな意味を持つのかについて会場の皆さんと考えてみたい。

### 話題提供3 オートエスノグラフィーとしてのインタビューという場の特殊性（土元哲平）

発表者は、大学生が転機を乗り越えるための支援方法に関する示唆を得るために、オートエスノグラフィーを用いた研究を行っている。オートエスノグラフィーとは、簡潔に言えば自文化についての記述的探求である。本発表では、発表者のキャリア支援に携わった大学教師であるA先生に対するインタビュー・データを手掛かりとして、生活・実践文脈を共にする他者へインタビューを実施することにはどのような利点や欠点があるか考察する。また、その特徴を生かしてどのような知を生成できるのかについて、提案したい。

### 話題提供4 PAC分析のインタビュー技法が調査対象者の思考に与える影響（小澤伊久美）

発表者は、複数の研究でPAC分析（個人別態度構造分析）を用いている。PAC分析のインタビューは、連想語の関係を描画したデンドログラムを介在させる、インタビュアー自らは殆ど語らない、という技法的特徴がある。その技法が調査対象者の内省のありように影響を与えることは指摘されているが、実施者がPAC分析開発者の指定通りの技法を用いてインタビューをしているかを含め、インタビュアーの語りの在り方を含めて分析されることはない。本発表では、発表者自身がPAC分析を受けた際の発話データに基づき、インタビュー技法が調査対象者の思考に与える影響を考える。

### 話題提供5 初めてのインタビュー：インタビュアーとしての葛藤（鈴木美枝子）

発表者は、特別支援学校の教師として、自閉症スペクトラム障害のある子どもの指導についての研究を行ってきた。自閉症スペクトラム障害のある子どもの指導をするにあたり、彼らとの関係をどのようにつくってきたか、また、どのような点が指導するのに難しかったか等について、ベテラン教師と、経験3年未満の教師に初めてインタビューの手法を用いて、研究を行った。前者のときには、自分自身の経験と重ね合わせ、相手の語りに同調してしまうことが多く、後者は、相手の語りに対して、指導したい気持ちが芽生え、自分自身の中で葛藤した。本発表では、インタビュアーが、語られた言葉を冷静に受け止め、より深い対象理解をうるには何が必要であるか皆さまと考えてみたい。

### 指定討論 尾見康博

5名の発表は、いずれも教育者に対するインタビューを振り返るという点が共通している。それぞれが、どのような点で質的心理学に新しい視点からの議論を可能にするのか。さらに、本報告の限界や今後の期待について提示する。参加者の皆さんとこのテーマについて考えたい。

### 引用文献

- クヴァール, S. (2016). 質的研究のための「インタ・ビュー」(能智正博・徳田治子, 訳). 新曜社. (Kvale, S. (2007). Doing interviews. CA: Sage.)
- やまだようこ.(2007). ナラティブ研究. やまだようこ(編). 質的心理学の方法——語りをきく. 新曜社.

## いまこそ、カイ・T・エリクソン 『Everything in Its Path』を読み直す - 集合的トラウマのエスノグラフィ -

企画・司会・話題提供：宮前良平（大阪大学大学院人間科学研究科）

話題提供：大門大朗（京都大学防災研究所）

高原耕平（人と防災未来センター）

指定討論：宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科）

高森順子（愛知淑徳大学コミュニティコラボレーションセンター）

### 企画趣旨

本企画は、シカゴ学派の代表的な社会学者でもあるKai T. Eriksonが1976年に発表した『Everything in Its Path』を、災害が頻発する現代において改めて精読することにより、本書を新たな文脈においてよみがえらせることを目的とする。

本書は、1972年、米国ウエストヴァージニア州バッファロー・クリークで発生したダム決壊事故後の被災者の心的復興を描いたエスノグラフィである。本書を読み直す意義は以下の二点にあるとわたしたちは考える。第一に、当ダム決壊事故は、被害の様相が津波災害と酷似しており、その後の被災者の心的変遷をたどった本書は、現在の東北の復興を語る上で重要文献であることは疑いえない。例えば、カイエリクソンが提示した「集合的トラウマ」という概念は、東日本大災害後の地域復興を考えるうえでいまだに有用である。それにもかかわらず、本書の豊かな内容に比して、現代の日本において本書はほとんど読まれておらず、「集合的トラウマ」とは何かを正確に理解している人も少ない。第二に、東日本大震災以降、非当事者としての研究者が被災地で当事者である被災者とどのように関わり、どのように言語していくかということが鋭く問われてきている。このような問いに対して、本書は、災害研究におけるエスノグラフィの重要性という観点から、多くの示唆を与えてくれる。

そこで、本企画では、災害研究者である3名がそれぞれの立場から話題提供を行い、それに対して、指定討論者としてトラウマ研究の第一人者である宮地尚子先生と災害伝承研究の第一人者である高森順子先生を招き、会場を含めて議論することで、本書を災害が多発する現代によみがえらせていく。

### 話題提供「アメリカ災害学における本書の位置づけ」（大門大朗）

アメリカにおける『Everything in its Path』の受容と、災害研究での位置づけについて焦点をあて発表を行う。著者のエリクソンは、マーシャル諸島での水爆実験やスリーマイル島原発事故、エクソン・ヴァルディーズ号原油流出事故など人的災害の研究を行ってきたわけであるが、その一つの転換点となったのが本書である。本書の執筆時期である1970年代においては、災害研究の中心は主に災害対応期の心理的ケア、マネジメント・組織論に関するものが中心であり、数年以上に渡る復興研究は非常に稀であった。その後、90年代からの災害常習地に置かれた人々の社会・文化的に弱い立場にあるという脆弱性（ヴァルネラビリティ）の議論や、2000年代の災害からの立ち直りの速さやしなやかさを

念頭においたレジリエンスの議論を経て、災害研究が射程とする時間的・空間的規模は大きく広がることになる。特に、ハリケーン・カトリーナの発生から10年以上がたち、ニューオリンズの災害復興研究はむしろ盛んになっており、こうした背景の中で、『Everything in its Path』は、常に参照される重要な古典としての役割を得つつある。その意味でも、本書は、災害により奪われる長期的かつ、集合的・集団的な側面を照射した意味でアメリカにおいても大きな意味をもちつつけている。

#### 話題提供「集合的トラウマとは何か」（高原耕平）

(1) Everything in Its Pathにおける「集合的トラウマ」の概念を紹介し、(2) R. J. LiftonのDeath in life (1968)がこの概念に与えた影響を検討する。

集合的トラウマCollective TraumaはEiiP第3部で詳論される。著者K. エリクソンによれば、バッファロー・クリーク洪水災害の被災者の語りには「個別的トラウマIndividual Trauma」と「集合的トラウマCollective Trauma」という、接続しているものの分離しうる二種の心的外傷を見いだせる。前者は被災体験そのものの衝撃によるトラウマであり、バッファロー・クリーク洪水災害では突然の濁流による恐怖記憶の固着や、近親者の喪失体験などを言う。「自然災害のトラウマ」と一般的に言われるとき想定されるものであると言える。これに対して、集合的トラウマは、日常生活を支えていた濃密な地域コミュニティを失う根こぎ体験である。バッファロー・クリークの住民は、災害の前まで、「隣人neighbor」と呼ばれる独特の濃密な人間関係を保っていた。住民は日常生活において物質的・精神的に互いに深く依存しあっていたが、こうしたコミュニティが洪水により文字通り押し流され、失われたしまった。通常ならば回復の素地として働くべきコミュニティ自体が奪われる体験が集合的トラウマである。

著者K. エリクソンはバッファロー・クリークの被災者の語りを分析するにあたり、広島の被爆者心理を調査したR. J. Liftonからさまざまな影響を受けていたと考えられる。本発表後半では両研究の関係を検討する。

#### 話題提供「東日本大震災以後の災害研究において研究者が被災地に入る意義」（宮前良平）

現代の災害研究において、非当事者である研究者が被災地に入り研究を行う意義について考察し発表する。東日本大震災以降の災害研究の大きなトレンドの一つに、当事者と非当事者の協働がある。それはもちろん、(研究者としてではなく) ボランティアとして地域貢献を行うという方向もあるが、本発表では、研究者だからできることを自覚し、当事者との協働の可能性を探していくという方向について考えてみたい。例えば、文化人類学の中には、災害フィールドワーク論(木村ら編, 2014)という本がまとめられているし、本学会においても「共同当事者」(e.g., 永田, 2018)という概念が提出されている。

本書『Everything in Its Path』の第1章は、著者のエリクソンがはじめて被災地であるバッファロー・クリークを訪れたときの様子が生々しく描写されている。そこでは、人びとのどこか胡乱な様子や、かすかに感じ取られるくらいの深い諦めのようなものが描かれる。このエスノグラフィは、エリクソンが部外者=非当事者であったからこそ気づけた部分であると同時に、当事者性のかげらが彼の中にあっただからこそ気づけた部分でもある。本書のエスノグラフィは、当事者性と非当事者性の揺れの中で描かれている。

このような災害後のポジショナリティについての議論において、トラウマの環状島モデル(宮地, 2018)を参考にしながら、当事者の中にある非当事者性・非当事者の中にある当事者性を研究者はいかに理解し、いかに現場での協働につなげていけるか考えていきたい。

## 実践共同体におけるアイデンティティ概念の再考

企画・司会：横山草介（東京都市大学人間科学部）

話題提供：最上雄太（青山学院大学大学院社会情報学研究科）

眞崎光司（青山学院大学大学院社会情報学研究科）

松熊 亮（首都大学東京大学院人文科学研究科）

### 企画趣旨

人が特定の実践共同体との関係において「何ものかになる」、あるいは「なにものかである」、そしてときに「なにものでもなくなる」という事態は一体いかなることなのであろうか。この問題は通例、自己の側からの見えと、他者の側からの見えとの重なりに焦点を当てる「アイデンティティ」という概念によって検討が為されてきた。とくに、実践共同体という概念と合わせてアイデンティティの問題が議論される場合には、人の学習という営みを実践共同体への参加と、参加に伴う参加者の全人格的な変容として捉え直す「正統的周辺参加論」が有効な視座として採用されてきた。一方で、人々の多様な参加の軌道のなかには、正統的周辺参加論のフレームによっては十分に掬い取ることのできない複雑なアイデンティティのあり様というものも見えてくる。本企画では、1) 企業組織におけるリーダー、2) 大学における自主的ゼミナールの参加者、3) 伝統工芸品の職人とといった人々に焦点を当て、実践共同体における人々の多様なアイデンティティのあり様を浮き彫りにしてみたい。

### 話題提供1 「リーダーのアイデンティティをいかに捉えるか」（最上 雄太）

ある特定の人が集団のなかで「リーダーになる」ということはどういうことであろうか。「リーダー」とは、単に組織図上の形式的な役割ではなく、集団を動かす中核的な機能を担う特定の人物を指す。ここで言う「リーダーになる」ことをLave & Wenger (1991) の正統的周辺参加論 (LPP) の概念を用いて説明するならば、実践共同体のなかで「リーダー」のアイデンティティを獲得する参加の過程となる。しかし、「リーダーになる」という現場で生じる現象を丁寧に捉え直してみれば、リーダーとして正統に業務を行う成員性という側面だけでなく、フォロアーと個別の関係性を構築して信頼を獲得するという側面を捉える必要性が考えられる。

本発表で議論したいのは、どうすれば「リーダーになる」過程を緻密に捉えることができるかということである。そこで今回は、議論に有効と思われる具体的な組織の事例を報告する。この事例の興味深い点は、リーダーとなる人物（上野氏）が少人数の意思決定チームをつくり、そこで赤裸々に個人の体験としての持論を語りあう個別の関係性をつくったことである。なぜ、このような個別の関係性を構築して信頼を獲得することが「リーダーになる」ために重要であったと言えるのであろうか。

当日の発表では、事例をもとに上野氏が「リーダーになる」過程をLPPの成員性概念でどこまで描くことができるか、また、どのような視座で補強できる可能性があるのかを考えていきたい。

## 話題提供2 「場の雰囲気が生み出すアイデンティティ」 (眞崎 光司)

参加者同士が実践の意味や目的を共有しづらい実践において、参加のアイデンティティはどのように形成されるのだろうか。Wenger (1998) によれば、実践共同体への参加のアイデンティティは、実践に共有されている人工物の意味を理解し、実践に特有の他者との関係性を構築する過程から形成される。しかし人間の営む社会的実践の中には、参加者同士で実践の意味や目的を共有しづらいにも関わらず、集合的なアイデンティティが生まれる実践が存在する。

本発表はこの問題を、30年以上の間、大学生によって自主的に運営されてきた古典文学の輪読ゼミナールの事例を通して考えたい。このゼミのメンバーであること、他の参加者たちから厳しい批判を受ける可能性のあるゼミの場で古典作品に関する自身の解釈を発表し続けることである。しかし参加者の参加動機として共通して語られたのは古典文学を読むことの価値や意味ではなく、ゼミの場の緊張感のある雰囲気への感覚的な憧れや自身の成長の予感であった。この緊張感は、ゼミの議論を進行する際の儀礼的手続きや、発表用レジュメの形式、OBOGに接するときのマナーなど、実践を継続するための有形無形の規範に新参加者が意味もわからず身体的に没入していくことによって成立していた。以上のことから本発表では、意味や目的を言語化せずに身体的に実践に没入することがどのような参加のアイデンティティを形成するのか、について議論したい。

## 話題提供3 「“職人であること”の確認は主体に何をもたらしているのか？」 (松熊 亮)

Lave & Wenger (1991) 以降、アイデンティティは、個人の閉じられた感覚や認識の問題ではなく、主体と実践や共同体との間に浮かび上がる関係論的な現象として再定義された。この視点をてがかりとした議論では、実践における位置づけの変化や複数実践との関係を強調して、主体の多様な変化に接近しようとする試みが特に盛んである。ここには、極端に言えば“私たちは社会関係の広がりや変化のなかで、かけがえのない「私」になる”という個人への接近法が読み取れるといえる。しかし現実には、かかわりを広げるよりも、特定の実践に強くこだわって生きる人々も少なからずいる。つまり、現実の生活体としての個人の生き方や発達の理解には、人が様々な関係や役割を経験する側面だけでなく、関係や活動とのつながりや関与のしかたを「深める」側面にも接近する必要があるだろう。

そこで本発表では、長い間ものづくりを突き詰めて生きてきた、伝統工芸の職人の様子からこの問題を考えてみたい。例えば、すでに仕事を引退したある竹細工の元従事者の制作物、人間関係の語りには、「職人だった自分」を確認していると解釈できる様子があった。発表当日は、なぜものづくりをする自分にこだわるのかという、アイデンティティ現象の機能性について考察を試みる。事例検討を通じて、社会的諸関係との間で浮かび上がるアイデンティティという視点を引き継ぐことと、生活体としての個人の生き方や発達の問題により接近することとを、私たちはどうつなげていけるかを議論したい。

## 『看護社会学』のもくろみ

- 研究的であることが、どうじに、実践的でもあるような質的研究をどのように創造していくか -

司会・話題提供：榎田美雄（神戸市看護大学）

話題提供：松浦智恵美（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

飯田奈美子（日本学術振興会特別研究員/立教大学）

### 企画趣旨

現代日本社会において、看護と社会学の関係は、不透明であると言わざるを得ない。看護学が総合人間学を志向するとき、社会学は包含されるだろう。一方、社会学が、文学部哲学科的な教養的なものから、真に現代社会に適応した実践科学になろうとするなら、看護社会学はその主要部分となるはずだ。つまりは、主導権争いと先取権争いで、潜在的競合関係にあるといえる。けれども、我々は、そのような争いのフィールドから距離をとって、夢あるものとして『看護社会学』を構想したい（この気持ちに本当であることを証拠だてるために、一般社団法人『看護社会学会』をすでに発足させてもいる）。活動の最初の数年間の目標は、「看護社会学にどんな新しい研究が可能か」を明らかにすることとなる。21世紀になって「医療者・療養者」間にもはや大きな権力差を想定できなくなったのなら、治療的価値を包含するものとして、QOLや尊厳を当たり前と考え得る時代になったのなら、そこを研究することこそは実践を変えることだ。

### 話題提供1：「ニーズ問題再考 -専門知識の権力性批判のその先へ-」 榎田美雄（神戸市看護大学）

看護社会学は以下の性能を持つ学問として構想されている。第一にそれは、「専門職教育の社会学」の1つとして、各専門職の実践に寄り添う形で新しく構想され直した社会学である。社会学は諸社会科学（例：政治学、法学、経済学、経営学、心理学・・・）のなかで唯一、固有の研究対象を持たない。それゆえぎゃくに、特定の専門職が、諸社会科学を活用しようとしたときに、その結節点になる性能を持っている。第二にそれは、「社会学教育の社会学」の1つとして、あらかじめ職能的な公認の問題意識が与えられてしまっていて、そこから思考を離脱させることが困難な専門職（志向）者に対して、どのようにして、自己変革の契機を与えるかという現代社会的問題を考える社会学である。第三にそれは、「知識と概念使用の社会学」の1つとして、看護という専門職を成り立たせている意味のネットワークの現状を明らかにし、未来における変革を展望する社会学である。今回の発表では、そのような「看護社会学」の実践モデルとして、「専門職が認定するニーズと、生活の中で必要と考えられるものとの間のズレ問題」を扱う。ポイントの第一は、「必要」を語る権利は、「ニーズ」を語る権利とは配分先が異なるということである。ポイントの第二は、だからといって、療養者本人のみが「必要」を語る権利を持っている、と考える必要もない、ということである。この後者の事実を認知症者や障害者の「必要」を論じるなかで、明らかにしていきたい。そして、このことが明らかにするのは、家族

同様に、「必要」にもコミットできる存在としての「看護師」ということであり、すなわち、療養生活支援の中で文化創造に参加できる存在としての「看護師」ということなのである。

### 話題提供2：「実践に役立つ質的研究報告 -病院勤務の通訳者の可視化されていない業務「connecting」についての考察から-」 飯田奈美子（日本学術振興会特別研究員/立教大学）

病院勤務の通訳者は通訳業務以外に多くの役割を担っており、その中に「コネクティング(connecting)」がある。「コネクティング」は、発表者が病院勤務の通訳者の働きを参与観察することにより名づけたものであり、今まで可視化されていなかった行為である。これは、通訳者が患者等から話をきき、医療従事者等に問題解決をしてもらうようにつなげる行為であるが、ただ担当者に引き渡すのではなく、患者等の話の内容から問題点を焦点化し、解決できる部署（担当者）を選択し、患者等にそこで解決可能性があることを伝え、そこの相談を了解させ、その部署（担当者）との話を通訳するものである。この行為は、外国人等の問題を早期に発見解決できるだけでなくという消極的な有用性だけでなく、外国人等の不安を軽減し、落ち着いた状態で医療者との医療面談ができることにより、通訳がスムーズにいくというより積極的な有用性が明らかになった。この研究により、通訳者自身が認識していなかった行為を名付けることで、意識して行うことができ、病院の流れの中でどのような役割を担うことができるかを認識する助けになることができる。このような社会的な研究的態度は、対人援助の実践に有効となるものであり、その点で、看護に関する社会的な研究に今後必要となるものを示唆することができると思う。

### 話題提供3：「認知症患者支援の生活社会学 -一般社団法人 日本看護社会学会での研究イメージの例示-」 松浦智恵美（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

「当法人は、看護に関係する事象を、社会学の視点を生かして理論的・歴史的・経験的に明らかにすること、医療・保健、福祉、教育、行政等の関係者が当該研究成果を研究・研修・組織運営に活用することを支援すること、そして、これらの諸活動を通して、看護社会学という学問領域を確立し、発展・普及させることを目的とする。」 (<https://www.kangosyakaigakkai.com/>)

上述のような目的をたてて、本年春に一般社団法人としての看護社会学会を設立し、活動を活性化させつつある。しかし、この新しい学会は、いったいどのような研究/学問をしようとしているのだろうか。具体例を挙げる必要があるだろう。

本報告では、在宅療養をしている認知症患者とその家族に関しての生活社会学的研究を呈示することで、日本看護社会学会での研究のイメージの例示をしていきたい。認知症患者の家族が在宅生活支援をしている場合、療養者の症状が重くなると、認知機能の低下と日常生活動作能力の低下などによって、一般的には、しだいしだいに、介護負担感は増すとされている。

けれども、今回のインタビューでは、思いがけない現象に我々はであった。療養者の症状が重くなっていくのに、家族の負担感は増していない、というのである。療養者家族は、介護の負担感について、「だんだん慣れてきて、状況を受け入れられてきて精神的なしんどさがなくなってきた」と話すのである。

本研究は、主介護者である一人の家族へのインタビューをもとに、労力的には家族への負担が増大している中であっても、当該家族介護者の精神的負担感は減少している、という事態を支える療養者と療養者家族の状況理解のありようを解明する。この解明は、医療者が医療的合理性からのみ患者と患者家族の状況を判断してしまう、そういう「専門職的狭量さ」から看護師が離脱する契機となるであろう。生活者の理解と推論についての、看護社会学の探究の実例として、本報告を堪能して頂ければ、幸いである。

# ポスター発表

No	筆頭発表者氏名	所属	発表題目
1	平野 真理	東京家政大学人文学部	文章完成法に投影されるレジリエンスの検討
2	小沢 一仁	東京工芸大学教職課程	概念検討のための現象学的方法論の試み—その2
3	隅本 雅友	立命館大学OIC総合研究機構	ものづくりと質的研究方法論の再考～「ものづくり」に質的研究はどう貢献できるか？
4	綾城 初穂	駒沢女子大学人間総合学群心理学類	社会構成主義に基づく保護者支援の実践事例の検討—外在化と多声性を用いた保護者と学校との連携—
5	廣瀬 太介	高崎市少年センター	ポジションニング理論による分岐点での選択の検討—「適応的」なカルト体験者のポジションニング—
6	中坪 史典	広島大学大学院教育学研究科	質的データ分析法としての「SCAT」と「うえの式質的分析法」の比較：幼稚園長のインタビュアーから
7	安田 裕子	立命館大学総合心理学部	TEAとDSTを用いた「キャリアワークシート」の教育実践—語りへの接近
8	菅井 育子	立命館大学OIC総合研究機構	自動車・顧客を対象とした、TEA（複線径路等至性アプローチ：Trajectory Equifinality Approach）
9	上島 洋佑	新潟大学教育・学生支援機構	大学事務組織を対象にしたTEA—ビジュアル・オーラルヒストリー・マニキュアルとしてのTEM図の可能性—
10	崎本 史生	神戸学院大学総合ハビリティテーション学研究所	高次脳機能障害を伴う脳卒中者の復職に至るプロセス—複線径路等至性アプローチを用いて—
11	神崎 真実	立命館グローバル・イノベーション研究機構	質的研究（TEM）の実習デザイン——5日間で伝わること・伝わらないこと
12	上原 智香子	明治大学大学院情報コミュニケーション研究科	鋭敏な感覚を持つ日常—「受ける」と「わかる」における環境との相互作用—
13	村本 邦子	立命館大学大学院人間科学研究科	災禍を生き延びる女性の力～津波被害から保育園経営を続けるBさんのライフストーリー—研究
14	河本 尋子	常葉大学大学院環境防災研究科	在宅被災者の生活復興過程に関する分析
15	河野 暁子	立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程	津波被災地の民間信仰に関する心理学的考察—岩手県気仙地域におけるエスノグラフィーから—
16	相良 咲子	福島県スクールカウンセラー	原発事故による母子避難経験者の一事例—TEM図を用いて避難経験とその後を振り返る(避難から帰還まで)—
17	松尾 純子	福島県緊急スクールカウンセラー	原発体験者は「語りえないもの」をどのように語るのか—インタビュアーにおける問いと応答に注目して
18	澤田 英三	安田女子大学心理学部	三重県志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式
19	持田 隆平	早稲田大学人間総合研究センター	共同で紡がれる故郷のあいまいな喪失
20	野原 萌	名桜大学環太平洋地域文化研究所	沖繩県米軍基地公害の健康被害の研究に對しての県内研究者の想い
21	宮前 良平	大阪大学大学院人間科学研究科	災害ボランティアにおける当事者性のジレンマ
22	楠本 和歌子	立命館大学大学院人間科学研究科	沖繩県離島における包括的心理支援モデル構築に向けた方法論の検討3
23	高梨 克也	京都大学大学院情報科学研究科	「慣れることを避ける」仕組み：コミュニティ生涯発達の見え方から見た野沢温泉村三夜講
24	妹尾 麻美	立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構	子育て中の妊娠女性における生活の困難
25	和田 美香	神奈川大学	家庭内のストレス体験を経て自己調整に至るまでの過程

No	筆頭発表者氏名	所属	発表題目
26	厚澤 祐太郎	上智大学大学院総合人間科学研究科	父親役割に関する質的探求—中高年男性と娘との関係を対象として—
27	沼田 あや子	白梅学園大学	親子のつながりについての再ストリー化するプロセス—迷いのなかで発達障害児を育てる母親との対話
28	河村 優衣	周南市教育委員会	幸せと不安な日々の中で深まる我が子への愛情—NICU（新生児集中治療室）看護師による母親の心に寄り添う支援に着目して—
29	滑田 明暢	静岡大学大学院教育センター	夫婦間における家事育児の依頼とその結果として起こる変化
30	山下 智也	北九州市立大学文学部	子どもの居場所を支える支援者の役割に関する一考察
31	奥井 菜穂子	大阪樟蔭女子大学児童教育学科	施設はいかにして「家庭的」になるのか—乳児院の職員へのインタビューより
32	高見 仁志	佛教大学教育学部	音楽科授業における教師の実践知—構造分析と研究の展望—
33	境 愛一郎	共立女子大学家政学部	参加・協働型園内研修への移行期における若手保育者の意識や葛藤
34	上山 瑠津子	福山市立大学	ルールのある遊びの指導計画段階における保育者の実践知
35	香曾我部 琢	宮城教育大学	保育者が自らの職務に満足するプロセス—TEAとSRAによる混合研究方法の提案—
36	青木 洋子	早稲田大学人間科学部	幼児期の食事におけるスプーンを持たない手の観察
37	仲本 美央	白梅学園大学子ども学部	乳児が育つ保育環境を保障する保育者の成長プロセスに関する研究(1)
38	西尾 千尋	早稲田大学人間総合研究センター	乳児の歩行開始と行為発達 周囲にある物のレイアウト変更に着目した事例検討
39	市川 恵	早稲田大学教育・総合科学学術院	乳幼児期の歌遊びにおけるナラティブの共創造
40	山崎 寛恵	お茶の水女子大学人間発達教育科学研究科	屋外移動時における乳幼児の触経験
41	西崎 実穂	首都大学東京システムデザイン学科	乳幼児の探索的移動による「家」環境の可視化
42	横溝 環	茨城大学人文社会科学部	ひとり親の子どもはどのようなように格差を感じているのか？：主観的格差に関する一考察
43	天野 美和子	東京大学Cedep	幼児期の子どもを対象とした哲学対話実践の考察
44	青山 慶	岩手大学教育学部	初期コミュニケーション発達と関係する複数の物のレイアウトの分析
45	吉次 豊見	大阪成蹊大学/京都大学大学院人間・環境学研究科	「小規模保育施設という場」における保育者の心の動き
46	林 幸子	色彩講師（フリー）	色彩表現ワークショップにおける「見る」ことと声に出すことの媒介機能—「「ともに」「さまざま」を声を出す」両面価値性(桑野,2008)の視点からの考察—
47	稲泉 博己	東京農業大学国際食料情報学部国際食農食農科学科	食農学習における植物メディアの位置づけ
48	三ツ木 真実	小樽商科大学言語センター	学習経験の語りに基づく学習動機変容プロセス可視化の試み
49	蒲生 諒太	立命館大学教育開発推進機構	探究学習プログラムにおける学習者の論証プロセスについての検討—学習成果の質的分析を通じて

No	筆頭発表者氏名	所属	発表題目
50	黒田 真由美	京都大学大学院	教師は授業の課題をどのように捉えるか
51	杉浦 彰子	茨城大学大学院人文社会科学部文化科学研究科文化科学専攻	ライフストーリーに意味付けられる生涯学習
52	金田 裕子	宮城教育大学教職大学院	協同的な学習における会話フロア間の関係の検討
53	竹田 琢	青山学院大学社会学部情報学研究所	学習体験の語りにおいて多重化する自己
54	小松 藍生	臨床心理士	不登校経験によって生じた心理過程 - 喪失体験に焦点化したインタビュー調査より -
55	八ッ塚 一郎	熊本大学教育学部	「いじめ報告書」の言説分析的読解：深層構造の把握と実践に向けた試み
56	山田 幸恵	株式会社国際電気通信基礎技術研究所ヒューマンインタラクション室, 東海大学文化社会学部心理学専攻	ロボットはじめの発生プロセスの検討 - 複線経路・等至モデル (TEM) を用いて -
57	中村 春華	奈良女子大学大学院人間文化研究科心身健康学専攻臨床心理学コース	女子大学生における特定のモノや植物に話しかける意味についての研究
58	藤井 真樹	名古屋学芸大学	大学生にとつての「一人でいること」の意味について
59	金 智慧	東京大学大学院教育学研究科	LGBT当事者学生が大学において抱えるニーズと困難 - 首都圏の大学に通う当事者学生の声から -
60	眞崎 光司	青山学院大学社会学部情報学研究所	大学生の正課外学習コミュニティにおける緊張感の形成過程 - 古典輪読実践のエスノグラフィ -
61	野々口 ちとせ	城西国際大学国際人文学部	比喩生成課題による複言語使用者の言語総体に対する当事者評価
62	麻理奈 アレクサ アンドラ 矢吹	お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻	クラシック・バレエ・ダンスが経験するストレスの特徴とストレスの生起に影響を及ぼす環境を明らかにする研究
63	矢吹 理恵	東京都市大学 メディア情報学部	在米国際結婚の日本人妻のライフストーリーに見られる「あいまいな喪失」 - 国際離婚の場合
64	蔦 妍	早稲田大学総合研究センター	日本語がでない外国人の日本における研究キャリアの構築プロセス - TEM (複線経路・等至性モデル) による分析 -
65	小澤 伊久美	国際基督教大学教養学部日本語教育課程	日本語学習者Xが日本に住み続けることを促進・抑制する記号 - Xの「深い経験づけ」としての留学経験の分析から -
66	佐野 香織	早稲田大学	街の人の「ことば」に対する意識 - 留学生の街の「ことば」を創る試みを通して
67	ウウン ダライ	茨城大学人文社会科学部研究科	中国人技能実習生の異文化への対処 - 生活構造の視点から見る心理的变化 -
68	杉江 聡子	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院	インバウンド対応を題材とした国際協同学習を通じた社会人基礎力の育成
69	石井 俊行	兵庫大学看護学部	高齢透析患者の便尺度開発に向けた基礎研究 (第1報)
70	杉田 理緒	お茶の水女子大学生活科学部	臨床心理士による小児がん患児の社会復帰を見据えた心理社会的支援
71	川元 美津子	安田女子大学看護学部看護学科	看護学生が用いる学習アプローチの探求
72	伊東 美智子	神戸常盤大学	社会人看護学生の臨地実習における学修過程の解明 - 複線経路等至性アプローチを試みて -

No	筆頭発表者氏名	所属	発表題目
73	村上 満子	沖縄県立看護大学	治療拒否のある人を一人の「人」として理解して向き合い続けること
74	今井 多樹子	安田女子大学看護学部看護学科	看護学生の学習意欲を阻害する教育者側の要因：臨地実習に焦点をあてて
75	駒崎 俊剛	東京医療保健大学医療保健学部	学生のグループワークにおける「話さない」参加のあり方
76	田村 美子	安田女子大学看護学部	重症心身障害児の母親が子どもの生きる道を支える語り－困難な時代を乗り越えてきた道のり－
77	古川 恵美	関西福祉大学看護学部	特別養子縁組家庭を対象としたペアレント・トレーニングと評価のためのインタビュー調査の経験
78	齋藤 貴子	日本赤十字秋田看護大学	「歩く」に「添う」看護実践がうまれる-現象学的看護研究による記述-
79	中本 明世	甲南女子大学看護リハビリテーション学部	メンタルヘルス不調による離職経験をもつ看護師の価値変容プロセス-分岐点における発生の三層モデルを用いた分析を試みて-
80	細野 知子	日本赤十字看護大学	看護学領域における「健康」「病い」に関する概念の検討－慢性の病い経験を捉える新しい概念生成に向けての予備研究
81	横山 直子	姫路獨協大学看護学部	成人慢性期看護学実習の体験プロセスの変遷と学び
82	高橋 あかね	淑徳大学大学院総合福祉研究科	「患者との別れ」からの心理的な経過に関する検討－若手看護師を対象として－
83	山本 敦	早稲田大学大学院人間科学研究科	身体的行為のガイドドとしての環境に接続された身振り－身体-環境関係の相互行為的利用
84	石毛 順子	国際教養大学	ピア・レスポンスにおける逸脱からの復帰に用いられる発話の分析
85	渡邊 照美	佛教大学教育学部	青年期・成人前期に家族を介護するということ－若年ケアラーの実態と語り－
86	古賀 佳樹	中京大学大学院 心理学研究科	ゲームへの依存とそこからの回復プロセスの検討－ライフラインを用いたインタビュー調査－
87			(発表取り消し)
88	福田 律子	名古屋大学教育発達科学研究科	産後うつ・ボンディング障害へのリスク要因に関する検討－妊娠前から周産期の母親の語りに着目して－
89	井上 孝代	明治学院大学	ビジュアル・ファシリテーションのカウンセリングへの導入と効果 (3) ～ライフストーリーにおける自己イメージの変化～
90	鈴木 孝	大阪大学大学院人間科学研究科	カウンセラーの自己開示をクライエントが期待する理由－フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査－
91	松島 岬紀	中京大学大学院心理学研究科	死別経験のある大学生における故人との関係性の変化－事例検討
92	新井 素子	東京大学大学院教育学研究科	自傷行為のエスカロレーションの過程－自己切創者の語りの質的分析－
93	河合 直樹	札幌学院大学人文学部人間科学科	障がい者支援施設における書道教室のアクションリサーチ：場に変化をもたらす「内部者-兼-外部者」の重要性
94	吉川 侑輝	慶應義塾大学大学院社会学研究科	音楽療法のエスノメソドロジーにむけて－質的研究の分析を中心に
95	北村 篤司	昭和音楽大学短期大学部	教育領域における当事者研究を応用した支援モデルの検討－発達障害概念を変革するためのアプローチの試案－

No	筆頭発表者氏名	所属	発表題目
96	三好 真人	比治山大学現代文化学部	セルフヘルプ・グループでの回復物語に使われた言葉の分析 ―機関誌の体験記分析を通じて―
97	沖潮 満里子	湘北短期大学	障害者のきょうだいが生きる二重のライフストーリーにおける「ドミナントストーリー」の検討
98	黒田 一寿	東京工業高等専門学校一般教育科	障害者の社会モデルを学ぶワークショップにおけるディスカッションが迎えるパターンの検討
99	川崎 隆	別府大学文学部人間関係学科	地域で暮らす精神障がい者のデイケア施設等から就労継続支援A型事業所へ移行する分岐点の検討
100	勝浦 真仁	桜花学園大学保育学部	自閉症のある幼児の感覚体験 ―「他」と「自」の世界から―
101	出口 奈緒子	筑波大学医学医療系	自閉スペクトラム症の特徴のある夫の妻が周囲の無理解に気付いてから周囲からの否定的まなざしを内在化する過程
102	勝見 吉彰	県立広島大学保健福祉学部	フィンセント・ファン・ゴッホは入院体験をどのようにとらえていたか? ―弟テオに宛てた書簡による検討―
103	松下 弓月	東京大学大学院教育学研究科	心理専門職の専門性はいかに定義されてきたか ―資格制度における専門性の文献的検討―
104	土元 哲平	立命館大学文学研究科	メタファーによる自己表現と職業的アイデンティティ発達 ―リハビリテーション系学生のワークから
105	村山 陽	東京都健康長寿医療センター研究所	単身中高年者における近隣との関わりにくさは：グループインタビュー調査による分析
106	堀切 大器	ダイヤル・サービス株式会社	SNS相談員（LINE相談員）における葛藤の変容プロセス
107	山崎 慎也	富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 コミュニケーション技術研究所	M-GTAを用いた法人営業職における顧客との信頼関係構築プロセスの分析
108	加藤 望	愛知みずほ短期大学	高学歴女性の仕事と育児や家事の鼎立を阻む社会的状況 ―うえの式質的分析法を用いて―
109	大山 星馬	青山学院大学社会学部情報学研究所	ブログがなぜ弁護士大量懲戒請求問題に繋がったのか
110	今井 朋実	日本社会事業大学大学院博士後期課程	若年性認知症者を支えるデイサービス・デイケアに必要なとされる援助の視点の変化の検証
111	坂倉 真衣	宮崎国際大学教育学部	博物館での「出会い（encountering）」は、日常生活の中でのどのように形を変えていくか（2）―来館者の博物館体験を理解する試み―
112	岸本 健太	関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科	「ありがとう―ありがとう連鎖」への志向 ―ラジオ番組の質問コーナーの分析から―

## No.1 文章完成法に投影されるレジリエンスの検討

平野真理（東京家政大学人文学部）・綾城初穂（駒沢女子大学人間総合学群）

個人のレジリエンスは尺度得点の高低で測定できるものとして単純に理解されることも多いが、実際には非常に多様なあり方をもつ。近年ではこの多様性を捉える手段として投影法を活用し、刺激画や写真等の反応からレジリエンスを理解する試みが進められている。本研究は、投影法の中でも文章完成法を取り上げ、そこにどういったレジリエンスがみられるかを検討することを目的とした。女子大学生 287 名を対象に「心の強さ…」という刺激文に続けて思い浮かぶことを自由に記述してもらった。分析の結果 13 のカテゴリーが見出され、レジリエンスの「定義」（一義的～多義的）、「位置づけ」（不可欠～付加価値）、「保有のあり方」（意図的～偶発的）のグラデーションとして整理された。ここから、文章完成法を通して本人の暗黙のレジリエンス観が読み取れることが示唆される。なお本調査にあたっては倫理的配慮に十分留意し、同意が得られたデータのみを対象とした。

## No.2 概念検討のための現象学的方法論の試み ―その2

小沢一仁（東京工芸大学教職課程）

質的方法も量的方法も、ともに概念を用いる。その概念検討の方法論として現象学を用いるという試みを提示する。竹田青嗣は「確信成立の条件を明らかにすること」が現象学的方法であると述べている。この竹田の現象学の捉え方を用いて、心理学の概念検討の方法論を提示する。前回の発表では方法論の提示を行ったが、今回はエリクソンのアイデンティティ概念にこの方法を適用することを試みる。このことによって、データを取る方法論の基盤となっている概念を検討する方法論に現象学を適用することができると考えられる。

## No.3 ものづくりと質的研究方法論の再考 ～「ものづくり」に質的研究はどう貢献できるか？

隅本雅友（立命館大学 OIC 総合研究機構）・菅井育子（立命館大学 OIC 総合研究機構）・神崎真実（立命館グローバル・イノベーション研究機構）・斎藤進也（立命館大学映像学部）・安田裕子（立命館大学総合心理学部）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

ものづくり産業は、単なる「モノ」の製造業でなく、サービスまで提供する産業ととらえている。この背景には、現在進展するデジタル革新において、顧客が求める価値が「モノの所有」から「機能の利用」や「価値の体験」へと移行してことがある。

ものづくりにおいて、顧客（人間）の経験価値やその意味を探求することは重要であり、本稿ではものづくりと質的研究方法論の再考を通じて、「ものづくり」に質的研究はどう貢献できるか？―ものづくり質的研究の構想と枠組みについて論考した。その際、人のこころを扱う人間科学の教育研究拠点として、産業界との連携を基礎としたものづくり質的研究の新学術研究領域の提唱に至る考え方を述べる。

No.4 社会構成主義に基づく保護者支援の実践事例の検討 ―外在化と多声性を用いた保護者と学校との連携―  
綾城初穂（駒沢女子大学人間総合学群心理学類）

近年、教育現場の心理職には、児童生徒への直接支援のみならず、保護者と学校が連携して児童生徒を支える体制づくりの支援も求められている。こうした保護者支援においては、因果的・本質主義的な視点だけでなく、関係者間の見方を尊重できる社会構成主義的な視点も有益であると考えられる。そこで本発表では、社会構成主義に立脚した保護者支援の実践事例を検討する。本実践では、「問題」を関係上の困難として記述するナラティブセラピーの外在化と、関係者の多様な声を反映させる多声性とを活用した。分析からは、こうした実践によってそれまで見えづらかった児童生徒の新たなストーリーに光が当たり、結果として、児童生徒への具体的な支援方法を導出することができたことがうかがえた。本発表では、この支援の意義と課題についても議論する。なお、発表にあたっては関係者（保護者・会議に参加した教職員）および当該学校の管理職より許可を得ている。

No.5 ポジショニング理論による分岐点での選択の検討 ―「適応的」なカルト体験者のポジショニング―  
廣瀬太介（高島市少年センター）

本研究では、ポジショニング理論(Harré & Langenhove, 1999)に基づき、「適応的」なカルト体験者が組織での経験と現実での経験とのあいだでどのように折り合いをつけて選択したかを検討する。複線径路・等至性モデリング(サトウ, 2009)では、分岐点における行為主体の選択に社会・文化的な力が影響を及ぼす有り様を可視化する。その際、社会・文化的な力を代表する個別具体的なモノを対話的自己(Hermans & kempen, 1993)の外部ポジションとして位置づけると、分岐点での自己性を内部ポジションとの関係によって描くことができる。ところで、ポジショニング理論には、ポジションをストーリーラインと発話行為との関係によって分析するポジショニング・トライアングルという枠組みがある。本研究では、外部ポジションとして抽出されたカテゴリーからストーリーラインを構成し、内部ポジションとして抽出されたカテゴリーからポジションを構成する。そして、相反する複数のストーリーラインとポジションが現れる分岐点についての発話行為から、体験者がどのように折り合いをつけて選択したかを検討する。

No.6 質的データ分析法としての「SCAT」と「うへの式質的分析法」の比較：幼稚園長のインタビューから  
中坪史典（広島大学大学院教育学研究科）・加藤望（愛知みずほ短期大学）・濱名潔（武庫愛の園幼稚園）・淀澤真帆（広島大学大学院）・田島美帆（広島大学大学院）

本研究の目的は、幼稚園長のインタビューデータについて、SCAT (Step for Coding and Theorization)（大谷 2011）とうへの式質的分析法（上野 2017）を用いて分析することで、それぞれの質的データ分析法の特徴を明らかにすることである。

No.7 TEA と DST を用いた「キャリアワークシート」の教育実践 一語りへの接近  
安田裕子（立命館大学総合心理学部）・番田清美（産業能率大学経営学部）

TEA (Trajectory Equifinality Approach : 複線径路等至性アプローチ) の理論を下敷きに DST (Dialogical Self Theory : 対話的自己理論) の理論を組み入れ開発された「キャリアワークシート」(番田, 2015) を用いた教育実践により、大学生のキャリア発達に関する実践的な調査を行った。関東にある一大学の大学生を対象に、キャリア発達・展望に関する3回にわたるワークショップを実施し、その効果測定のために行った質問紙調査対象者のうち6名を選定し各人から許可を得て、今に至るキャリアに関するインタビュー調査を実施した。こうした教育的な実践を仕掛けに収集したキャリア・ナラティヴは、来歴に関する経験(語られた内容)であるとともに、自らのキャリアについて語る行為が、青年期の大学生のキャリア発達に影響を及ぼすものであると推測された。本発表はインタビュー調査の部分を対象とし、得られたナラティヴ・データを TEM により可視化するとともに、本試みのキャリア教育への有用性を検討する。

No.8 自動車・顧客を対象とした、TEA (複線径路等至性アプローチ : Trajectory Equifinality Approach)

菅井育子 (立命館大学 OIC 総合研究機構)・隅本雅友 (立命館 OIC 総合研究機構)・神崎真実 (立命館グローバル・イノベーション研究機構)・斎藤進也 (立命館大学映像学部)・安田裕子 (立命館大学総合心理学部)・サトウタツヤ (立命館大学総合心理学部)

ものづくり産業は、単なる「モノ」の製造業でなく、サービスまで提供する産業ととらえている。この背景には、現在進展するデジタル革新において、顧客が求める価値が「モノの所有」から「機能の利用」や「価値の体験」へと移行してことがある。

ものづくりにおいて、顧客(人間)の経験価値やその意味を探求することは重要であり、本稿ではものづくりと質的研究方法論の再考を通じて、「ものづくり」に質的研究はどう貢献できるか?—ものづくり質的研究の構想と枠組みについて論考した。その際、人のこころを扱う人間科学の教育研究拠点として、産業界との連携を基礎としたものづくり質的研究の新学術研究領域の提唱に至る考え方を述べる。

No.9 大学事務組織を対象にした TEA —ビジュアル・オーラルヒストリー・マニュアルとしての TEM 図の可能性—

上島洋佑 (新潟大学教育・学生支援機構)

地方国立A大学では平成20年から、全国に向けた組織的な大学教職員を対象にした研修(スタッフ・ディベロップメント:以下「SD」)事業を生み出し、現在まで継続させている。本発表では、A大学のSD事業関係者4名にインタビューを行い、その結果をTEAにより分析することを通して、どのように組織として事業を継承してきたのかについて報告する。また本研究では、複数の人で構成される組織に着目し「組織TEA」を試みておりその結果についても報告する。さらに、研究対象者とのトランスビューにより作成したTEM図が、「文字の文化:リテラシー」としての組織の継承物である業務手順書(マニュアル)を補填する、「声の文化:オラリティ」として組織内の思いを後世に伝えるビジュアル・オーラルヒストリー・マニュアルとしての可能性についても報告する。

- No.10 高次脳機能障害を伴う脳卒中者の復職に至るプロセス –複線径路等至性アプローチを用いて–  
崎本史生（神戸学院大学総合リハビリテーション学研究所）・藤原瑞穂（神戸学院大学）

本報告の目的は高次脳機能障害を呈する脳卒中者（A氏）の復職前とその後のプロセスを明らかにすることである。A氏は脳卒中による左片麻痺を呈した40歳代男性。方法はリハビリテーション病院退院後1, 3, 6ヶ月目に計3回、A氏とその妻に半構造的インタビューを行い、複線径路等至性アプローチを用いて分析した。協力者には口頭にて説明し紙面にて同意を得た。分析の結果、A氏の退院直後は職場から事前の課題が「波」のように押し寄せ、先の見通しが立てられない不安が起き、妻もその「波」にのまれA氏との関わりに悩んだ。復職後のA氏は「頭が混乱」し、妻は仕事帰りの夫を「抜け殻みたい」と捉えた。徐々に「仕事の感覚を掴み」、「頭のなかで優先順位」を立てられるようになったころ、妻はA氏を以前の夫に「戻りつつある」存在と捉え直した。これらの復職に至るプロセスを高次脳機能障害の影響について考察を加え報告する。

- No.11 質的研究（TEM）の実習デザイン ——5日間で伝わること・伝わらないこと  
神崎真実（立命館グローバル・イノベーション研究機構）・菅井育子（立命館大学 OIC 総合研究機構）・隅本雅友（立命館大学 OIC 総合研究機構）・斎藤進也（立命館大学映像学部）・安田裕子（立命館大学総合心理学部）・サトウタツヤ（立命館大学総合心理学部）

昨今、ものづくりの現場では、質的研究が活用されている。人びとの人生や生活に寄り添ったものをつくるために、人生や生活の「質」に迫るための方法論が必要なのである。しかし、質的分析は、テキストと意味の間を行ったり来たりする循環的な作業であり、手間がかかる。そのため、ものづくりの現場で、実際に質的分析を行ったことのある経験者は多くない。そこで私たちは、受講生が質的研究との親和性を自己理解する場として「質的研究アナリスト育成プログラム」を開発してきた。本報告では、2017年度より実施してきた学部生向けの5日間の実習について、講習体制とカリキュラムの工夫と課題を整理し、限られた時間の中で伝えられることと伝えられないことの両面について考察する。

- No.12 鋭敏な感覚を持つ日常 –「受ける」と「わかる」における環境との相互作用–  
上原智香子（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科）

先に、敏感さのメタ認知には自己認識と齟齬があるが、高敏感者においては齟齬がないことを報告した。本研究では、高敏感者（定型発達）に視覚・触覚の敏感さを測定し、敏感さの自己評定と生理的測定値を照合した結果、高敏感者は敏感さに対するメタ認知ができていたことが再確認された。次いで、当事者インタビューを行い、高敏感者は日常生活において環境情報をどのように感じ/理解しているのかを確認した。一般人がほとんど感じない環境刺激を感じることは当事者にとってどのような意味を持つのか、当事者の視点に映る環境世界を語ってもらうことで、他者に理解されにくい鋭敏な環境感受性を自分自身に対してどのように意味づけしているのかを確認した。また、高敏感で何か困ることがあるか、感じることの利点は何かを尋ね、感覚過敏者との相違を確認した。本研究は、当事者視点にて高敏感な正常発達者の日常、高敏感な生きやすさを報告するものである。

No.13 災禍を生き延びる女性の力 ～津波被害から保育園経営を続けるBさんのライフストーリー研究  
村本邦子（立命館大学大学院人間科学研究科）

東日本大震災後、東北に十年通って被災と復興の証人（witness）になるというプロジェクトを継続している。災禍を逞しく生き延びる女性たちと出会うなかで、その力は災禍に際して突如として現れるのではなく、それまでの生き方の延長線上にあると感じている。今回は、沿岸部X市で自宅・職場ともに津波被害を受け、避難所に暮らしながら、預け先がなく困っている保護者たちの姿に、自分たちにできることをと、2011年4月1日、廃園となった保育園を新しい形で立ち上げ、さまざまな困難を乗り越えながら、保育を続け、現在にいたるBさんのライフストーリーを紹介する。外部支援者の姿に力をもらいながら、外部支援者に力を与えてもいるそのレジリエンスを、被災前の生き方とも照らし合わせながら災禍を生き延びる女性の力について考察したい。なお、倫理的配慮として、研究の概要、プライバシーの扱い、研究参加の自由、データ確認について文書で説明し、承諾を得た。

No.14 在宅被災者の生活復興過程に関する分析  
河本尋子（常葉大学大学院環境防災研究科）

本研究は、災害からの生活復興に向かう過程に着目し、在宅避難を経験した被災者を対象としたエスノグラフィ調査を通して、すまいの再建に到達する過程に影響するさまざまな外的・内的要素を明らかにすることを目的とした。分析手法として、複線径路等至性アプローチを採用し、設定した等至点に到るまでの径路と分岐点、社会的方向づけ、社会的助勢等の要素を抽出した。分析の結果、すまいの再建を目指す過程において、生活・状況の改善を図ろうと自ら行動をおこし続けながら、健康・家族人員等の変化や制度上の問題等により、被災地の中で置き去りにされた感覚をもつようになっていった在宅避難者の状況が明らかになった。なお、本研究における倫理的配慮として、研究目的・方法・期待される結果と研究協力の伴う利益・不利益等に関して、調査対象者への口頭及び文書による説明を事前に行い、これに対して同意が得られた方にご協力いただいた。

No.15 津波被災地の民間信仰に関する心理学的考察 ―岩手県気仙地域におけるエスノグラフィから―  
河野暁子（立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程）

報告者は東日本大震災以降、臨床心理士としての支援のため、岩手県気仙地域に移り住んだ。復興の過程において、被災地域の文化や慣習が持つ困難を乗り越える力に着目してきた。岩手県気仙地域には、オガミサマという「口寄せ」の慣習があり、東日本大震災においてもオガミサマは活用され、遺族は亡くなった方とのやりとりを試みる（奥野, 2017）。また、青森県にある恐山のイタコを訪ねる遺族もおり（原, 2014、大道, 2017）、民間信仰が震災遺族の支えとなっている。心理学では、災害で死別を経験した方に、グリーフケアという支援が展開されるが、そのような西洋から持ち込まれた支援法とは異なる人を癒す方法が、被災地域の慣習の中にある。本研究では、岩手県気仙地域のエスノグラフィから、津波被災地の民間信仰について心理学的考察を行ない、歴史的背景や文化を大切にしたい支援について検討したい。

- No.16 原発事故による母子避難経験者の一事例 —TEM 図を用いて避難経験とその後を振り返る(避難から帰還まで)—  
相良咲子 (福島県スクールカウンセラー)・渡邊宏周 (福島学院大学福祉学部)

東京電力福島第一原子力発電所の事故により多くの方が避難生活を経験している。先行研究から、母子避難の実態は多様でそれぞれ固有であるため、一人一人に寄り添う個別対応、悩みの「見える化」、感情面の分析の必要性が示唆されている。そこで、原発母子避難の個別の記録を心理社会的側面から記録・分析することは、今後の支援や実態解明に有効であると考えられる。今回の発表は、被災地で心理職として活動する本研究者が、母子避難経験の母親へのインタビューを中心に、母親とともに避難経験とその後を振り返った研究経過の一部である。記録の図式化と心理社会的分析の方法論の一つとしてTEM(複線径路等至性モデリング)図を用いた。

インタビュー対象者には、研究目的・方法・協力者の権利・プライバシー保護・倫理的配慮について説明し、書面による研究協力の同意を得た。

- No.17 原爆体験者は「語りえないもの」をどのように語るのか —インタビューにおける問いと応答に注目して  
松尾純子 (福島県緊急スクールカウンセラー)

原爆の語りはイデオロギーに回収されている(藤原,2001)と批判され、死者を語り継ぐもの(米山,2005)とあるべきディスコースを当て嵌められてきた。本研究は歴史的出来事の語りは「言語ゲーム」であり「物語はめったに、自己説明的であることはない」とするリクール(1985)に従い原爆体験者が「語りえないもの」(浅野,2001)をコトバにするプロセスを探る。分析は、「原爆体験の意味」の問いと応答部分にMishler(1991)のナラティブ分析を用いてインタビューの問いを反省的に扱いながら、その問いをインタビューが自分の文脈で受け止め「語りえないもの」をコトバしていく意識の流れを追っている。結果、〈被爆者〉の基準や〈被爆者〉を社会に意味づけるディスコースが固有な体験を「語りえないもの」にしており、制限に敏感で意味の共有を図る聴き方が「語りえないもの」を語り出すことを可能にしたと考えられた。

- No.18 三重県答志島における青年の島外流出とそれに伴う地域内役割の変容と納得の様式  
澤田英三 (安田女子大学心理学部)

三重県鳥羽市答志島では、ここ20年で多くの青年が島外に流出している。それに伴って、青年団や寝屋子制度など、青年がこれまで担ってきた地区内での一定の役割を、青年だけでは果たすことができなくなってきた。本報告では、青年団や他の成人集団(消防団や漁業組合、各世古)などへのインタビューを通して、かつての青年が担ってきた役割を、他の年齢集団等がどのように分担しながら、コミュニティの日常や伝統行事を維持してきたのか、そしてそこで生じた変容を住民はともにどのように納得しながら進めているのかを明らかにする。2018年に開催された御木曳祭にもみられたように、残っている青年が日常生活や伝統行事などで中心的役割を担っているが、周辺的な役割については、地域をこれからも存続させるという共通の認識(納得)によって、年長の集団からの支援がなされている。[安田女子大学研究倫理審査委員会の承認済(番号:180002)]

No.19 共同で紡がれる故郷のあいまいな喪失  
持田隆平（早稲田大学人間総合研究センター）

呉（2001）は、個人の語りから原風景がどのように想起されるか検討し、原風景を想起すること自体に場所と自己の問題を考えるうえで大きな意味があることを明らかにした。また、同じ場所で生まれ育った者同士が語り合う場面を分析し、場所の世代を超えた共同性を描き出した。

本研究では、呉の知見を踏まえつつ、東日本大震災により関東地方に避難したある家族が、福島県に残してきた家や土地、避難先について語り合う場面（12 ユニット）を抽出して分析し、家族の抱える故郷のあいまいな喪失（Boss, 1999；Perez, 2016）の諸相を検討した。語り場面では、福島と避難先を対比させながら、それぞれの場所で得たものと喪失したものについて、家族個々の視点から説明された。そして、家や土地が家族にとって持つ意味を、家族史に結びつけて語るといった特徴が明らかにされた。本研究は早稲田大学倫理委員会の承認（承認番号【2012-093】【2018-007(継続)】）を経て実施された。

No.20 沖縄県米軍基地公害の健康被害の研究に対しての県内研究者の想い  
野原萌（名桜大学環太平洋地域文化研究所）・稲垣絹代（名桜大学環太平洋地域文化研究所）

第二次世界大戦時に地上戦が展開された沖縄では、戦中から始まった米軍の土地接収により県内に多くの米軍基地が作られた。1972年の本土復帰まで米国統治下であったことから、現在は沖縄県全体の面積の8.3%を占めている。これらは日本の米軍専用施設の約70%を占める。米軍基地があることによる沖縄の地域社会への影響は多岐に渡り、航空機墜落事故や米軍人等による刑法犯罪や交通事故は日常的に起こっている。それ以外に基地に関連する有害物質汚染も明らかになっており、健康被害についてはジョン・ミッチェル（2014）が報告した枯れ葉剤使用による基地公害、騒音による難聴（沖縄県,1999）や心疾患への影響（松井,2019）も報告されている。しかしながら、健康被害の研究は少なく県外研究者によるものが多い。また医療系研究者による調査もほとんどない。そのことから、本研究では今までの健康被害の文献検討に加え、県内研究者の米軍基地に関する研究への想いをインタビューし、現状と課題を明らかにする。なお、研究機関の倫理審査委員会の審査を受けた上で実施する。

No.21 災害ボランティアにおける当事者性のジレンマ  
宮前良平（大阪大学大学院人間科学研究科）

「被災された方々と親しくなればなるほど、遠い存在であるように思えてしまうんです。これは、私がとある災害ボランティアから聞いたセリフである。ここで彼女が言わんとしているのは、被災者との関係が密になればなるほど、被災者に成り代わることはできないというギャップに気づかされるということである。本発表では、このような当事者と非当事者の関係を、当事者性のジレンマとして定式化し、当事者非当事者間のさまざまな関係の変化について考察を加える。そして、インタビューや先行研究をもとに、「当事者権威主義」（当事者の言うことを非当事者は肯定するのみ）、「当事者普遍主義」（誰もが同等の当事者性を有している）、「当事者性の移譲」について論じていく。このように当事者非当事者間の関係について理論的に考察し直すことは、小手先のテクニックだけでは解決されないような複雑な問題を含む対人援助のシーンにおいても応用可能だろう。

No.22 沖縄県離島における包括的心理支援モデル構築に向けた方法論の検討3  
楠本和歌子（立命館大学大学院 人間科学研究科）

本研究は、僻地の中でも沖縄県の石垣島を取り上げ、現場の現象からボトムアップ的に理論を構築する仮説生成型研究の立場から、(1) 各臨床領域（学校・教育、医療、保健・福祉、司法・矯正）でインタビュー調査を行い、包括的心理支援モデルを構築すること、(2) 当事者たちと対話協働を行いながらモデルに基づいた効果的な実践方法を検討し、その知見を現場に還元すること、の2点を目的としている。

本発表では(2)に焦点を当て、「現場で実際に生じている問題に対して、よりよい変化の実現を目指して、研究参加者（現場の当事者）と研究者が協同して知を生成する実践的な研究活動」（岡本、2007）であるアクションリサーチの枠組みに基づき、学校・教育領域における心理支援モデルを軸にした対話協働の方法、および研究成果の還元方法について実践的検討を行う。

No.23 「慣れることを避ける」仕組み：コミュニティ生涯発達の観点から見た野沢温泉村三夜講  
高梨克也（京都大学大学院情報学研究科）

野沢温泉村道祖神祭りを担う三夜講には、運営を行う成員が専門的伝承集団ではなく、3年周期で交替していくという際立った特徴がある。三夜講を構成するのは本厄という「人生半ばの過渡期」にある者たちであるが、日常生活では彼らは職場でも家庭でもコミュニティの中心を担う世代である。そこで、本発表では、この年代の成員が、不慣れな作業を、見習いながら、趣味や遊びではない「本番」として行うことの持つ意義について、生涯発達とコミュニティ論の両面から解明することを目指す。フィールド調査を通じて見えてくるのは、彼らは自分たちが「定められた年代に不慣れな作業に従事している」という事実を積極的に肯定しているという可能性である。このことから、三夜講での経験が、日常生活での安定状態からの unlearning を通じて、個人として、コミュニティ成員としての自身の立ち位置を定め直す契機となっているのではないかと考えられる。

No.24 子育て中の妊娠女性における生活の困難  
妹尾麻美（立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構）・三品拓人（大阪大学大学院）・安田裕子（立命館大学総合心理学部）

本研究の目的は、子育てをしながら妊娠している女性の生活満足度と生活実態の関連を明らかにすることである。近年、育児不安が深刻化している。それゆえ、第1子を育てながら妊娠している女性は心身ともに不安定な状況となりかねない。そこで、大阪府茨木市で実施している「いばらきコホート調査」の25週質問紙調査と25週インタビュー調査を併用し、質問紙調査から把握できる生活満足度の低い第2子妊娠女性3名がどのような生活を送っているのかを明らかにする。彼女たちの日常生活の語りを、KJ法を用いて分析した。理想のライフコースとの葛藤、育児による時間のなさ、夫が育児に十分に協力的ではないこと、ネットワークが十分ではないことなどがみとれる。妊娠中の身体的な問題のみならず、家族全体の日常的な支援が必要だと考えられる。なお、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会承諾のもと研究を実施している。

No.25 家庭内のストレス体験を経て自己調整に至るまでの過程  
和田美香（神奈川大学）

成長期にある青年にとって、家庭は自己を形成していくうえで重要な場となる。青年が家庭内でストレス状況にある時、青年の内的な活動のみならず、学業や友人関係などさまざまな社会的活動にも影響を与えると考えられるが、置かれた状況はそれぞれ異なり、外からは見えにくい場合も多い。ある青年が不登校・ひきこもり状態になって家庭の中だけで過ごし、口を利かず不機嫌な態度を取ったり家庭内で暴力を振るったりする場合、本人やその親はもちろんのこと、そのきょうだいにとっても大きなストレスとなり、時には心理的な外傷体験になることもあると考えられる。本研究では、ひきこもり青年のきょうだいに、倫理的配慮について説明し同意を得たうえで行った面接における、言語データを分析する。そして、家庭内のストレスを体験しながらも自己を調整できるようになるまでの径路を辿り、それらの類型化を試みる。

No.26 父親役割に関する質的探求 ―中高年男性と娘との関係を対象として―  
厚澤祐太郎（上智大学大学院総合人間科学研究科）

現代における男性の父親役割を質的に探求することを目的とし、本研究では特に役割が不透明である父娘の関心に焦点を当てて検討を行った。方法として、9名の父親に対し、2回の面接を通して、娘が産まれてから今までの関係について語ってもらい、その語りを分析した。結果として、協力者全員が娘に対し「信頼感」を抱く体験を語った。そして、娘に早期に「信頼感」を抱いたのは、自分なりの育児方針を持っておらず、娘の反抗期を強く感じなかった協力者であった。一方、自分なりの育児方針を強く持っている協力者は、娘が就職するまで娘への「信頼感」を持つことが難しいことが語られた。このことから、父娘関係において、父親自身の育児方針の強さや娘からの反抗の度合いによって娘との関係に変化が生じる一方、最終的には全員が娘との関係が安定する可能性が示唆された。

No.27 親子のつながりについての再ストーリー化のプロセス ―迷いのなかで発達障害児を育てる母親との対話  
沼田あや子（白梅学園大学）

本研究は、迷いのなかで発達障害児を育てる母親との対話において、母親が長年もっていたストーリーが再ストーリー化されるプロセスを明らかにしたものである。Clandinin (2011) は、人は支えとなるストーリーを語り直すことで書き換えることを再ストーリー化と呼んでいる。2012年のインタビューで「しなやかな実践の物語」(沼田, 2016)を紡げずにいた母親に、4年後に対話志向のインタビューを試みたところ、親子間の加害・被害のストーリーが語られ、母親の被傷性が浮かび上がった。そこで、さらに2年後に研究目的を説明した上で、語りが論文に引用されること、回答拒否の自由について説明して承諾を得たため、三度目のインタビューを試みた。対話のなかで親子のつながれなさについて言葉を紡いだ後に、母親がもっていた「つながれない」ストーリーが、「暮らしのなかの一瞬のつながり」のストーリーへと再ストーリー化された。本発表ではそのプロセスを報告する。

- No.28 幸せと不安な日々の中で深まる我が子への愛情 –NICU（新生児集中治療室）看護師による母親の心に寄り添う支援に着目して–  
河村優衣（周南市教育委員会）・澤田英三（安田女子大学心理学部）・田村美子（安田女子大学看護学部）

本研究は、母子の愛着形成をするために、看護師がどのような支援をされていたのかを明らかにすることを目的とした。安田女子大学倫理審査委員会の承認を得た後、同意を経て、NICU勤務経験のある看護師2名に半構造化面接を行い、分析を行った。その結果、母親の心の発達段階は、「混乱期」「自責の念・予後の不安を抱く時期」「関心期」「児が可愛いと思える時期」の大きく4つの段階に分けることができた。両看護師で共通して、「混乱期」は見守り、「関心期」は積極的な働きかけをされていたが、「自責の念・予後の不安を抱く時期」「児が可愛いと思える時期」にはそれぞれ個性を生かした異なる支援がされていた。NICU看護師は、積極的に働きかけることはもちろん、母親のペースに合わせた支援によって、母親は児との距離を縮め、愛情を深めていくと考えられる。

- No.29 夫婦間における家事育児の依頼とその結果として起こる変化  
滑田明暢（静岡大学大学教育センター）

本研究は、夫婦間における家事育児の依頼とその結果として起こる変化を検討した。質問紙調査（女性265名、男性252名）において、参加者が配偶者に参加を求めて起きたことおよび参加者が配偶者から参加を求められて行ったこと、を尋ねた設問への自由記述回答を、それぞれKJ法に準ずる方法を用いてまとめた。配偶者に参加を求めて起きたことと配偶者から参加を求められて行ったことに共通していたのは、忙しい、疲れているなどの理由から変化が起こらなかった場合があること、妊娠出産などの状況変化に応じて変化するようになった場合があること、変化があった場合にも、不定期、部分的な参加や主体的な参加など、様々な形での変化が見られたことである。また、変化はあったものの、その変化が参加を求めた側の期待とは一致しなかった事例や夫婦互いの考えを調整した事例、参加頻度以外の変化が起こった事例もあった。結果をもとに家事育児の依頼の機能を考察する。

- No.30 子どもの居場所を支える支援者の役割に関する一考察  
山下智也（北九州市立大学文学部）

近年、子どもの居場所が再注目を集めている。新放課後子ども総合プラン等に伴い、居場所の概念が拡大し、全児童対策としての子どもの居場所が求められ始めたのである。従来の「居場所のなさ」を埋めるための支援ではなく、多くの子どもに開かれた居場所ならではの支援の在り方を検討していく必要がある。

そこで本研究では、そのような居場所の先進事例として、「きんしゃいぎゃんぱす」と「芝の家」を選択し、フィールドワークによる参加観察及び支援者へのインタビューを通して、多様な子どもの居場所となり続けている場の支援者の役割について迫る。

結果と考察として、子どもの居場所の軸となる「主」の居方がその場への入りやすさ・居やすさを生み出している点、また、支援者が子どもの現状を察知し、状況に合わせて関わり方を絶妙に調整している点等が浮かび上がってきた。これらの知見は、他の子どもの場を下支える道標となると考える。

No.31 施設はいかにして「家庭的」になるのか 一乳児院の職員へのインタビューより  
奥井（高橋）菜穂子（大阪樟蔭女子大学児童教育学科）

2011年の厚生労働省「社会的養護の課題と将来像」の取りまとめ以降、多くの児童養護施設や乳児院が施設形態を小規模化し、「家庭的養育」の実現を目指してきた。しかし、子ども達にとって、いかなる養育が「家庭的」であるのか、また、職員にとって、「家庭的」な養育を可能（あるいは困難）にする要因は何かといった具体的検証はまだ十分なされていない。そこで本研究では、近年新たに施設形態を小規模化した乳児院において職員にインタビューを行う。分析では、Morgan（1996, 2011）の「家族実践（family practice）」の視点、すなわち家族関係は固定化されたものではなく、日常の中で、人は家族であることを「実行している（doing）」のだという視点を用い、「家庭的養育」に向かう施設のあり様を解明する。

No.32 音楽科授業における教師の実践知 一構造分析と研究の展望一  
高見仁志（佛教大学教育学部）

教師の「実践知」とは、授業場面で発揮される実践者独自の思考様式、知識、方略の総体を指す。優秀な教師の実践知解明に基づく教師教育プログラムの開発は、喫緊の課題である。しかし、音楽科にはその先行例がなかった。そこで筆者はそれに着手し、実践知を「即時の知」と「信念・価値観としての知」の2側面から解明して、教師教育への提言を試みた。ただしこの取り組みでは、実践知の2側面がそれぞれ別の被験者から抽出されており、同一教師を対象とした包括的な解明がなされていない点に課題が残された。

そこで、次の点を目的とした研究を構想した。①音楽科授業における教師の実践知の2側面を、同一被験者から抽出し包括的に解明する。②被験者は新人教師、熟練教師とし、それぞれの実践知の特徴を比較することを通して、音楽科新人教師育成プログラムを開発する。

本研究の公表は慎重を期し、匿名性の担保など倫理的配慮を行う。

No.33 参加・協働型園内研修への移行期における若手保育者の意識や葛藤  
境愛一郎（共立女子大学家政学部）

保育現場の園内研修において、ベテランや外部講師による一方的な指導に代わり、参加者が平等に発言し、オープンエンドな議論を目指す参加型あるいは協働型と冠した園内研修が提唱されている（秋田 2011, 中坪ら 2018）。近年、このような研修が、各現場で積極的に取り入れられるとともに、質的研究法との結びつきのなかで、新たな手法が次々と開発され、その有効性が強調されている。他方、こうした状況は、ある種の価値観を研修の主導者が参加者に強いるという点において、それらが批判する上意下達型に陥りかねない側面を孕んでいる。

本研究では、新たに参加・協働型園内研修の導入を試みたA園に所属する若手保育者3名へのインタビュー調査を実施し、新たな研修体制に対する意識やそのなかでの葛藤を明らかにする。研修計画の作成等への関与の度合いが低い保育者の語りから、昨今の傾向が孕む問題について考察し、より調和的な研修体制の構築のための視座を示す。

No.34 ルールのある遊びの指導計画段階における保育者の実践知  
上山瑠津子（福山市立大学）

本研究では、集団でルールのある遊びを行う場合の指導計画段階に着目して、保育者の実践知を明らかにすることを目的とした。幼稚園5歳児の担任教諭2名（1年目教諭と10年目教諭）を対象に個別面接調査を実施し、それぞれが作成した保育指導案作成に基づき、遊びの選択理由、活動のねらい、環境構成、保育者の援助などについて意識した点について尋ねた。定性的コーディング（佐藤，2008）によって語りを分析した結果、活動のねらいでは、1年目教諭は、他の保育者から聞いたこれまでの《自園の取り組み》を参考に、遊びを選択し、さらに競争する遊びが好きといった《クラス全体の特徴》から活動を設定していた。一方、10年目教諭は、運動会に続く《遊びの連続性》を意識して遊びを選択し、さらに子どもたちの中に《ルール理解の程度》が十分でない子や《体の使い方》が不器用な子がいることに着目し、子どもの経験を作る機会として活動を設定していた。

No.35 保育者が自らの職務に満足するプロセス —TEA と SRA による混合研究方法の提案—  
香曾我部琢（宮城教育大学）

本研究では、保育者が自らの職務に関して満足するプロセスを質的・量的の両面から明らかにすることを目的とする。そして、それらの知見を統合することによって、今後、保育者の職務満足度を高める労働環境の在り方について総合的に検討を行う。具体的には、混合研究方法として、quan→QUALの説明的順次デザインを採用した。quanでは、順序関係分析（SRA）によって、保育者の職務満足度の項目間の順序関係を明らかにした。次に、QUALでは、それらの知見をもとに、自らの職務への満足体験について、社会的な文脈なども含めて、より詳細に保育者へインタビューを行い、それを複線径路・等至性モデリング（TEM）で分析した。以上の、研究結果を統合して保育者の職務満足度を高める労働環境の在り方について検討を行った。

No.36 幼児期の食事におけるスプーンを持たない手の観察  
青木洋子（早稲田大学人間科学部）

本研究は食事道具を両手で同時に扱う操作が、発達初期にどのように生じているか、またそれがどのように変化するかを解明することを目的とする。観察対象は保育園1歳クラスの男女1名（観察開始時それぞれ21か月齢と18か月齢）だった。まず、スプーンを持たない手の動きを分類した。その結果、男児は【保持・固定】は両者で異なったこと、女児はスプーンですくっている食器とは別の食器に手を添えている頻度が男児より高く機能的ではなく形式的に手を添えている可能性があること、【すくう時に食べ物を押さえる】は両者とも観察期間の後半に増加したこと、【食べ物を口に押し込む】は、男児が観察期間の後半に減少したことなどが明らかとなった。また、スプーンを口に運ぶ際に反対の手が一緒に上方に動く様子が観察されたため、この動きを摂食行動に関連する身体部位及び食べ物をスプーンですくう行為と関連付けながら分析を加える予定である。

- No.37 乳児が育つ保育環境を保障する保育者の成長プロセスに関する研究 (1)  
仲本美央 (白梅学園大学子ども学部)・久居麻紀子 (音のゆりかご保育園)・間宮さゆり (音のゆりかご保育園)・藤井翠 (音のゆりかご保育園)・長谷川美里 (東松戸保育園)

本研究は、どのような経験年数や役割を持つ保育者においても、乳児が育つ保育環境を保障する保育者として自らの保育実践を振り返ることの重要性を認識し、自らの保育の質を捉える専門性を高めるための保育者研修プログラムの開発とその研修の効果を検証することを目的としている。本大会の発表では、対象とする保育現場のクラスの担任保育者の一年間におけるエピソード記録を元に、「保育所保育指針と照らし合わせた振り返りを伴う保育者研修」を実施し、研修プログラム実施前後の保育者の自らの保育の質に対する認識をインタビュー調査し、分析した結果を報告する。なお、本研究は、研究代表者の研究倫理審査を経て承認が得られ、所属の研究倫理に則り、実施している。

- No.38 乳児の歩行開始と行為発達 周囲にある物のレイアウト変更に着目した事例検討  
西尾千尋 (早稲田大学人間総合研究センター)・工藤和俊 (東京大学大学院情報学環)

近年、1歳前後の独立歩行の開始と、言語・認知の発達、社会性の発達の関係についての研究が行われている。歩行という運動の発達と、認知や社会性の発達が関連する一つの背景として、歩行開始後に起こる、頻繁な物の運搬の影響が指摘されている。本研究では、乳児の養育家庭で観察を行い、歩行開始期前後の乳児による自発的な物との関わりに着目し、運搬や、並べる・集めるといった物のレイアウトを変更する行為の分析を行った。歩行開始後には、頻繁な運搬が見られ、他者に物を手渡すといった行為や、複数個の物を運ぶ、ひとところに集める、並べるといった繰り返される、パターンのある行為が現れた。そうした行為に用いられる物の性質について具体的な事例を通して検討し、同種の物への働きかけや、行為系列の生成といった点から、乳児の、運動と認知の同時的発達について議論を行う。

- No.39 乳幼児期の歌遊びにおけるナラティブの共創造  
市川恵 (早稲田大学教育・総合科学学術院)・伊原小百合 (東京藝術大学)・志村洋子 (同志社大学赤ちゃん学研究センター)・今川恭子 (聖心女子大学)

本研究の目的は、「communicative musicality」(Malloch & Trevarthen, 2009)を基盤とした乳幼児・養育者間相互作用に着目し、乳幼児が養育者との歌遊びにどのように参加しようとするのかを明らかにすることである。発表者らのこれまでの研究と先行研究により、音声を中心とする遊びが、子どもを文化的な実践としての歌唱にいざなう入り口となっていることが明らかとなっている。その際、乳幼児は歌遊びがもつ時間的な構造化を足がかりとして、養育者や兄弟との遊びに参加していることが推察された。そこで、本研究では動画ソフト ELAN を用いて、乳幼児と養育者との歌遊び場面を分析した。その結果、歌遊びへの参与の仕方は子どもによって多様であるが、歌遊びのもつ構造化が足がかりとなって互いに時間的な予期が可能となり、その遊びへ主体的に参加できることが明らかとなった。そして、身近な人との情動的な関わり合いを通してナラティブを共創造していた。

No.40 屋外移動時における乳幼児の触経験  
山崎寛恵（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所）

乳幼児が屋外を移動中にどのような対象に手で触れているのかについて、対象のテクスチャと手の動作に着目して記述した。認定こども園の園児が、保育時間中に大学構内を散歩する様子を、ビデオカメラで隔週ペースで約半年間記録した。子どもたちは移動のあいだ、保育者や他の園児と手をつないで歩行するが、経路の大部分は車や自転車などの往来が少なく、比較的自由に手を放す、立ち止まる、しゃがむことができた。そうした状況で、子どもたちは壁、フェンス、植栽など様々な対象に頻繁に手で触れており、そこには接触の機能が一見不明なものも含まれていた。本研究では、David Katz(1925)による実験現象学的なアプローチを援用し、触り方のバリエーションと、対象の素材のバリエーションによって分類することで、乳幼児期の移動中における多様な触経験を記述する。

No.41 乳幼児の探索的移動による「家」環境の可視化  
西崎実穂（首都大学東京システムデザイン学科）

乳幼児期、発達だけではなく不慮の事故が屋外よりも「家」の中で多く生じており、その実態が十分に明らかになっているとは言えない。本研究は、乳幼児の移動を伴う探索的行為を通じて、乳幼児が生活環境としての「家」を発見していく過程を可視化することを目的とした。東京都に住む10名の乳幼児の生後4～12ヶ月にわたる約110時間の縦断的観察の映像記録をもとに、「家」を構成する要素として壁や床などの「表面の配置」、乳幼児が直に接する「対象物」および「人」を取り上げ、移動運動との関係を検討した。結果、水平・垂直面に広がる探索的移動に各家固有の物の配置が関係していること、乳児用製品よりも大人と共有する物に自ら接する割合が高いことが示された。これらの全データをまとめたデータベース(ベータ版)を作成し、検索結果をグラフ、テキスト、線画(動画)で表示可能とし、実在の「家」環境の理解の促進を目指した。

No.42 ひとり親の子どもはどのように格差を感じているのか？：主観的格差に関する一考察  
横溝環（茨城大学人文社会科学部）

これまでの「格差」に関する研究は所得や資産といった経済的な指標をもとに論じられることが多かった。その一方で、幸福に関わる研究では、経済的格差は幸福の決定因の一部に過ぎないことが示されている。このことから、「ある」と言われている格差と“感じる”格差は一致するとは限らないことが示唆される。そこで、本研究は、経済的弱者であると位置づけられることが多い「ひとり親の子ども」に焦点を絞り、彼(女)らの主観的格差を探っていくことを目的とする。調査協力者は8名(16歳～26歳)で、調査方法はPAC分析を用いた。PAC分析の刺激文には「格差」という言葉は用いず、どのような時に恵まれている／恵まれていない、有利である／不利である、強い立場にある／弱い立場にあると感じるか(感じてきたか)といった表現を提示した。これらの結果をもとに、主観的格差の多面性・流動性・重層性、さらに経済的格差との関わりについて検討していきたい。

No.43 幼児期の子どもを対象とした哲学対話実践の考察  
天野美和子（東京大学 Cedep）

昨今、日本も含む世界の学校では、「哲学対話」や「子ども（のための）哲学」と呼ばれる実践が少しずつ広がりつつあり、学校だけでなくカフェなどで開催される「哲学対話」も静かなブームとなっている（苦野，2017）。哲学というと、高等学校の授業や大学の講義で習った著名な哲学者の名前は知っていても、実際に哲学の書籍を読むと、その思想の難解さのあまり大人でも近寄りがたくて敬遠する人も多いだろう。しかし、2011年に日本でも上映されたフランスの映画『ちいさな哲学者たち』（ジャン＝ピエール・ボッツィほか制作・監督）では、3歳から5歳の幼稚園に通う年齢の子どもたちが哲学対話を行っている。幼児期の子どもが「愛とは何か」「自由とは何か」などの哲学的な問いでの対話が成されているのである。そこで本研究では、日本における幼児期の子どもの哲学対話の場に着目し、そこでどのような哲学対話が行われているのかについて明らかにする。

No.44 初期コミュニケーション発達と関係する複数の物のレイアウトの分析  
青山慶（岩手大学教育学部）

本研究は、初期コミュニケーションの発達を、それが実際に生じている日々の生活を可能にするよう構造化された物のレイアウトの中において分析しようとするものである。乳幼児の初期コミュニケーションは、その多くが養育者との関わりの中で為され、そこで発達するが、その発達の方向性は「乳児-大人」の二項関係から、「乳児-物体-大人」から成る三項関係へとという複雑化の過程として描かれることが多い（例えば Tomasello, 1995 など）。本研究では、三項関係を可能にする物体を、先述の「生活を可能にするよう構造化された環境」の中に位置づけ、複数物における配置へと拡張しながら、三項関係の成立の過程を具体的なデータを用いて分析する。

No.45 「小規模保育施設という場」における保育者の心の動き  
吉次豊見（大阪成蹊大学 / 京都大学大学院人間・環境学研究所）・幸田瑞穂（湊川短期大学附属ぽるとこども園）

近年、待機児童問題の深刻化を背景に保育の構造的な規制緩和（保育室の面積・採光基準の緩和、設置主体制限の撤廃、有資格者の配置基準緩和、等）が進んでいる。そこで本研究は商業ビルの一角に設置された、いわゆる規制緩和の象徴ともいえる小規模保育施設の“場”における保育者の“心の動き”を明らかにするものである。

調査園は2017年に開園した当初から筆者が研究指導に関わっている小規模保育施設(A型)であり、「子どもの主体としての心を育む」ことを強く意識しながら保育にあたっている。本研究では保育者および筆者による「エピソード記述」と「語り合い法」を用いることにより、保育室空間が狭い・園庭がないなど、保育者の工夫や努力だけではどうすることもできない環境の中での葛藤や苦しさについても浮き彫りにしながら、保育環境が子どもたちや保育者へ及ぼす影響の一端も探る。

No.46 色彩表現ワークショップにおける「見る」ことと声に出すことの媒介機能 - 「ともに」「さまざまな」声を出す」両面価値性(桑野,2008)の視点からの考察 - 林幸子 (色彩講師 (フリー))・南博文 (九州大学)

発表者らは、これまで色彩表現という自己表現を伴うワークショップでの参加者間の相互作用のパターンを分析し、想起の連鎖、表現と言葉のズレを起点とした会話から新たな自己理解を伺わせる発話の発生を説明してきた。本発表では、色彩表現という媒体が対話過程にどのような役割を果たしているか、特に参加者によって表現されたものを「見る」行為が、その後の意味づけにどのように結びつき、それらが相互の発話行為において、他者の視点の取り入れにどのように結実していくかを分析した。その際、桑野 (2008) の説くバフチンの対話原理「ともに」「さまざまな」声を出すという相互開示と両面価値性の視点を援用し、(1) 色彩で表現されたものを「見る」者が自分の記憶、経験と共に一般的な他者の声を想像しながら「見」ており、(2) そこで表現者の言葉を「聴く」という行為が同時に行われ、(3) その両面から参加者個々の体験が見出されることを明らかにした。本研究の実施と報告にあたっては参加者の同意を得ている。

No.47 食農学習における植物メディアの位置づけ  
稲泉博己 (東京農業大学国際食料情報学部国際食農科学科)

本研究における食農学習とは農業者が日常活動を通じて熟練に向かって成長していく過程を指し、その過程で植物メディアが果たす役割についての検討を目的とする。ここで対象として取り上げた食農学習は知識を習得する系統学習ではなく、生産現場での経験学習であるが、今回のインタビュー・観察他の調査結果から、対象農業者は①古来の言説や先輩・上司の指示を参照しつつ、②それぞれが独自の植物メディアとの関係を構築していたこと。また③植物メディアとの対応関係は農業者の熟練と共に変化しているなど、自律性を持つ植物メディアを軸にした状況に埋め込まれた学びが、あらためて確認された。

本研究に関わる調査は、所属機関の「人を対象とする実験・調査等に関する倫理委員会」の審査 (承認番号 No. 1708) を受け、関係者にインフォームド・コンセントを実施し協力の同意を得ており、成果公表に際して必ず事前に内容を提示し、承諾を受けることを確認している。

No.48 学習経験の語りに基づく学習動機変容プロセス可視化の試み  
三ツ木真実 (小樽商科大学言語センター)

本研究の目的は、英語学習経験の語りを通じて、英語学習の動機づけにおけるダイナミックな変容プロセス、及び変容をもたらした要因を社会文化的側面から捉えることである。動機減退の過程で調査協力者にどのような経験があったかを具体的に捉えるために、個人別態度構造分析 (PAC 分析) (内藤, 2002) を実施した。またその際に語られた学習経験を時系列に並べ替えながら協力者へのインタビューを行い、複線径路・等至性アプローチ (TEA) (安田・サトウ, 2017) による分析を行った。発表では、学習者の動機の変容に影響を与えた社会文化的要因や、具体的な出来事によって協力者に生じた新たな信念や価値観を示しながら、英語学習動機の変容プロセスの可視化を試みる。

**No.49 探究学習プログラムにおける学習者の論証プロセスについての検討 ー学習成果の質的分析を通じて**

蒲生諒太（立命館大学教育開発推進機構）・西田彰一（日本学術振興会）

新学習指導要領・高大接続改革を目前とする現在、学校現場からの「探究的な学習」（探究学習）に対するニーズは高まってきており、気軽に実践できる探究学習のプログラムの必要性が求められている。本研究では探究における情報の整理や分析において重要となる「論証」に着目し、探究学習プログラムを開発した。プログラムは古写真を教材にそれが現在のどの場所で撮影されたものかを推理し、史料等を用いて論証するものであり、3日間の実施期間中に1日のフィールドワークを含む。2018年度中に3回施行、のべ21名の参加者があった（中学生5名・高校生16名）。プログラムでは各自が1部ずつの研究ポスターを作成した。本発表ではこれらのポスター＝学習成果物から学習者の論証プロセスをタイプ分けし、それぞれのタイプにおいて学びの深まりがどの程度であったのか段階に分けることで今後の実践の開発や学習成果物の評価に資する知見を明らかにする。

**No.50 教師は授業の課題をどのように捉えるか**

黒田真由美（京都大学大学院）

教師は研修や同僚との交流を通して学びを深めており、授業の事後検討会もそのような場の1つである。しかし、外部講師の講評のみの場合や意見交換がなされない場合もあり、十分に教師の学びを導く機能を果たしていないとの指摘もある。そこで、事後検討会にRound Studyを導入し、それによりどのような教師の学びが展開されるのか明らかにすることを目指す。

2018年11月に中学校の授業を見学し、その後のRound Studyを記録した。このやりとりを文字化し、KJ法によって分析した。調査、発表については協力者の許可を得た。

教師の学びは3つの段階に分かれていた。①生徒がどのような問いを見出したかを整理する段階、②生徒が見出した問いを共有し、教師の対応策を練る段階、③授業の展開について再検討する段階がみられた。さらなる事例を検討し、Round Studyの効果について検討することが今後の課題である。

**No.51 ライフストーリーに意味付けられる生涯学習**

杉浦彰子（茨城大学大学院人文社会科学部文化科学専攻）

人生100年時代と言われる現代は、生涯にわたって学ぶことに注目が集まっている。本研究の目的は、生涯学習センターを長年にわたり利用している学習者が「学びの経験」を人生にどのように意味づけているかを明らかにすることである。今回は、生涯学習センターを利用する学習者（長年にわたり学びの実践を続けておられる方）を対象にライフストーリー法を用いて、その人の人生の中に生涯学習がどう意味づけられているかについて調査を行った。その結果、「悲しい経験」が生涯学習を始めるきっかけになっていることがうかがわれた。なお、調査者は現在、大学院に通いながら茨城県内の生涯学習センターで働いている。生涯学習センターの学習者と関わる中で、調査者自身の学ぶことの意味づけが変わってきた。この経験を踏まえ、ベテラン学習者のライフストーリーを学生など若者が聞くことで、若者たちはどのような影響を受けるのかについても議論したい。

No.52 協同的な学習における会話フロア間の関係の検討  
金田裕子（宮城教育大学教職大学院）

協同的な学習では、教室全体での対話場面だけでなく、グループ活動やペア活動などの学習者同士の対話が行われている。こうした教室の参加構造は、教室全体で一つの大きな会話フロアが形成されている場面と複数の小さな会話フロアが形成されている場面が様々に表れている構造として捉えることができる。このような参加構造において、大きな会話フロアと複数の小さな会話フロアの関係には、どのようなヴァリエーションが生み出されているのか。本発表では、授業デザインにグループ活動やペア活動が組み込まれている教室を事例とし、大きな会話フロアと小さな会話フロアの間を各フロアの時間配分、会話フロア内での話題の形成過程、二種類の会話フロアにおける話題の関係に着目して検討する。

No.53 学習体験の語りにおいて多重化する自己  
竹田琢（青山学院大学社会情報学研究科）

本発表は、学習体験の語り（振り返り）をナラティブ的視座から捉え、自己の多重化がどのような語り方や結びつけ方によって立ち現れるのかについて明らかにすることを目的とする。収集した学習体験の語り手の音声データを元に、多重化された自己をひとつなぎにする複雑な語りの特徴について検討する。

No.54 不登校経験によって生じた心理過程 -喪失体験に焦点化したインタビュー調査より-  
小松藍生（臨床心理士）

不登校経験は自信感や居場所感の喪失など、実は喪失体験との関連が深い。その視点から不登校当事者のアプローチをする重要性を指摘した研究はあるものの、実際、不登校経験者の喪失体験について、詳細に扱った研究は皆無に近い。そのため、本研究は、喪失体験に焦点化した不登校経験者へのインタビュー調査を実施し、どのような喪失体験があるか、または、その結果から新たな視点での支援を探ることとする。不登校当事者へのインタビューは負担が多いため、不登校経験者へのインタビューを行う。調査対象者毎に結果図を作成し、そこから、理論図を導く。この研究は修士論文を元とし、結果図を改訂したものを発表することとする。

No.55 「いじめ報告書」の言説分析的読解：深層構造の把握と実践に向けた試み  
八ッ塚一郎（熊本大学教育学部）

頻発する「いじめ」事案に対して、いわゆる第三者委員会による調査報告書の公開が相次いでいる。第三者委員会については、その組織体制が批判され、調査としての問題や限界が指摘されることも少なくない。しかし報告書が、深刻な事案の概要を理解し、適切な対応を考えるための数少ない手がかりであることも事実である。本研究では、網羅的・外形的な把握とは別の観点から、報告書を言説体として分析し、事案を取り巻く構造やその本質を読み解くことを試みた。報告書に対する比較検討からは、①事象の背景や発生機序、記述されるアクターの特性等、そもそも基本的な事項について、想像を超える多様性のあることが示唆された。その一方、②それら事案を取り巻く外部的事象（大人や教師などの周辺要因、事象が展開する時系列的プロセス等）に潜在的な共通性があり、「いじめ」事象の深層構造の把握および実践的提言につながり得ることが示された。

No.56 ロボットいじめの発生プロセスの検討－複線径路・等至モデル（TEM）を用いて－  
山田幸恵（株式会社国際電気通信基礎技術研究所 ヒューマンインタラクション室、東海大学文化社会学部心理・社会学科）・神田崇行（京都大学大学院情報学研究科・ATR）・野村竜也（龍谷大学・ATR）

近年、言語学習の補助や公的施設の情報提供など、ソーシャルロボットが様々な形で子どものいる環境に導入されている。一方で、子どもがロボットに対して、いじめに類する行為をすることも知られている。野村ら（2016）は、いじめ行為を行った子どもに半構造化面接を行い、子どもたちがロボットをなぜいじめめるのかについて探索的な研究を行った。

本研究では、ロボットに対する身体的な暴力（たたく、ける、腕や首を折り曲げる）をいじめと定義し、ロボットへのいじめを行った子どもの観察データを用いて、ロボットを発見してからいじめ行為を行う過程に着目し、観察データからそのプロセスを検討することを目的とした。ショッピングセンターに導入されたロボットに対していじめに類する行為を行った9名の子どもの観察データについて、複線径路・等至モデル（TEM）を用いて分析を行った。本研究は、著者所属の倫理委員会の審査を受け、承認されている。

No.57 女子大学生における特定のモノや植物に話しかける意味についての研究  
中村春華（奈良女子大学大学院人間文化研究科心身健康学専攻臨床心理学コース）

本研究は、女子大学生を対象に特定のモノや植物といった、人間の働きかけに対してすぐに反応を示さない対象に話しかけることの意味を探求することを目的とした。予備調査では、質問紙調査を用いて特定のモノや植物に話しかける人の割合とその内容を調査した。本調査では、女子大学生7名を対象に話しかける行為の背景にある個人の内的世界を調査するために半構造化面接及びバウムテストを行い、KJ法を用いて分析した。その結果、個人が癒しを求めたり、寂しさなどの感情から話しかけることに繋がっていることが示唆された。話しかける内容については、自分に関する内容と話しかける対象に関する内容に分けられ、話しかける対象がモノか植物かによっても内容が異なり、話しかけることを通して個人が欲しい反応を、モノや植物から実際に得られているかのように主観的に解釈している語りが特徴的であった。このことから、話しかけるという行為は、現実と内的世界との中間領域に位置づけられる可能性が見出された。

No.58 大学生にとっての「一人であること」の意味について  
藤井真樹（名古屋学芸大学）

近年では SNS の普及によりコミュニケーションの形態がかつてでは考えられないほどに多様化し、物理的に距離のある他者や現実では顔を合わせたことのない他者とのつながりの形成も可能となる一方で、生身の身体を携えた人間どうしのつながりは希薄化しつつある。筆者はこれまで、他者と「共にある」ためには、相手を「分かつよう」として推測や志向を働かせるあり方ではなく、その場でこの身体にもたらされる「感じ」にいわば身を委ねるようなあり方（身体-交流的態勢）が必要であることを見出してきた（藤井，2017）。しかし近年の高度な情報社会の中で生きる人々にとっては、そうしたあり方とは異なる他者とのつながり方があるように見える。そこで、SNS を駆使して他者とのつながりを常時得ることが可能な現代の青年にとって、「一人であること」がいかに体験されているのかについて、大学生との「語り合い」（大倉，2008）を通して探索的に明らかにする。

No.59 LGBT 当事者学生が大学において抱えるニーズと困難 —首都圏の大学に通う当事者学生の声から—  
金 智慧（東京大学大学院教育学研究科）・小林良介（東京大学大学院教育学研究科）・佐藤遊馬（東京大学大学院教育学研究科）・Euan Mckay（東京大学広報戦略本部）

近年、世界的に LGBT（Lesbian, Gay, Bisexual and Transgender）に関する権利拡大の動きが進み、日本においてもパートナーシップ制度の確立等、性の多様性が注目されている。一方で、教育現場においては LGBT への十分な理解や対応がされているとは言い難く、大学の教職員の無理解や教職員に対する包括的な研修プログラムの乏しさも指摘されている（HRW，2016）。実際に、2015 年には LGBT 当事者の大学院生が周囲の無理解や大学側の不適切な対応のため自死するという痛ましい事件も起きた。これらのことから、非当事者の学生や教職員が LGBT 当事者に関する正しい知識を持っておらず、適切な対応がされていないことが推測される。そこで本研究では、首都圏の複数の大学に通う LGBT 当事者学生を対象にインタビュー調査を行い、質的に分析することで、大学生活の中で LGBT の当事者が抱く困難やニーズを明らかにしつつ、LGBT 当事者学生が受容される大学環境について考察する。

No.60 大学生の正課外学習コミュニティにおける緊張感の形成過程 —古典輪読実践のエスノグラフィー—  
眞崎光司（青山学院大学社会情報学研究科）

多くの大学生にとって自分の学問領域における書物の読み方を学ぶことは重要な学習内容のひとつであると考えられる。また書物の読み方を学ぶためには授業外や正課外の学習が必要になると考えられる。しかし授業以外の多様な活動に参加する大学生にとって、教員の介入がなく単位の取得とも無関係な正課外において、緊張感をもって継続的に書物を読み続けることは容易ではないと考えられる。そこで本研究は、大学生が継続的に古典文学を読んでいる輪読会に参加観察し、参加者同士の関わり合いによって緊張感が維持される過程をエスノグラフィーとして記述した。結果、参加者は書物を読む目的や書物の内容よりも、輪読会の緊張感から生まれる自身の成長の予感を感じて参加していた。またこの緊張感の新規参加者と古参者の指導関係と、その後の指導関係の解消過程の中で再生産されていくことが明らかになった。

No.61 比喩生成課題による複言語使用者の言語総体に対する当事者評価  
野々口ちとせ（城西国際大学国際人文学部）・房賢嬉（東北学院大学教養学部）

本研究は、一個人の言語総体（個人が使用する複数の言語を合わせた全体）の実態を、当事者からの見え方として把握し記述する事例研究である。調査では、日本の大学院で学ぶ朝鮮族の中国人留学生（中国語・韓国語・日本語使用者）1名を対象に、各言語を使う自分と複数の言語を使う自分に対する比喩生成課題を実施した。結果、中国語を使う自分には母語で人間関係を構築し能力が発揮できる「戦士」、韓国語を使う自分には品は良いが中国語ほど愛着を感じないという「ヤンバン（朝鮮王朝の支配階級）の子息」、日本語を使う自分には慎重で臆病な「仔馬」、複数の言語を使う自分には「多重人格」という比喩を得た。これらの比喩に対する本人の説明を解釈すると、日本語使用では精神面でも能力面でも縮退するが、日本の生活でも中国語及び韓国語使用を通して確固たるアイデンティティと十全な能力発揮の場を保つ対象者のアンビバレントな言語生態が明らかになった。

No.62 クラシック・バレエ・ダンサーが経験するストレスの特徴とストレスの生起に影響を及ぼす環境を明らかにする研究  
矢吹麻理奈アレクサンドラ（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻）

本研究は、プロのバレエ・ダンサーを目指している日本人女子高校生が、日々どのような環境においてどのような心理的・身体的ストレスを感じ、どのような対処をしているかを質的に把握することを目的とした。調査時点で国内外のバレエ教室に通っており、プロのバレエ・ダンサーを目指す日本人女子高校生7名（うち4名が海外留学中）を対象に、半構造化インタビューを実施しM-GTAにより分析した。その結果、協力者のストレスの深刻度が最も高かったのは、教師の評価への過剰反応がある中で「教師から認められなかった」という認知であった。また、スポーツと異なるバレエの特殊性のため、ダンサーは観る人（本研究の協力者の場合は教師）の評価に過剰に反応することが示唆された。尚、本発表では協力者のプライバシー保護のために、固有名詞といくつかの事実を変更している。

No.63 在米国際結婚の日本人妻のライフストーリーに見られる「あいまいな喪失」  
— 国際離婚の場合  
矢吹理恵（東京都市大学 メディア情報学部）

離婚のプロセスをモデル化したKaslow (1997)は、離婚には離婚前、離婚中、離婚後の三つの時期があり、さらに配偶者に対する「幻滅」・「不信」を認知する段階から、離婚を心理的に受容しアイデンティティを再統合するまでの7段階を示している。このうち、別居に至る前の段階では、「幻滅」・「不信」を感じる配偶者に対し「身体的には存在しているが、パートナーとして心理的に存在していない」という認知があるという（平木 2012）。Boss (1999)は、親密な関係性にある人の身体的又は心理的な存在/不在について曖昧さがある状況を、「あいまいな喪失」と呼んだ。本研究では、国際結婚により夫の国に移住した一人の日本人女性が、夫婦関係の危機にあたって経験した「あいまいな喪失」を本人のライフストーリーの文脈において読み解く。尚、本発表については協力者に了解を得た上で、人物の特定を避けるために固有名詞といくつかの事実を変更している。

- No.64 日本語ができない外国人の日本における研究キャリアの構築プロセス —TEM（複線経路・等至性モデル）による分析—  
蔣妍（早稲田大学大学総合研究センター）

本研究の目的は、日本語ができない外国人の日本における研究キャリアの構築プロセスを、1名の中国人若手研究者のライフストーリーインタビューをもとに明らかにすることである。「グローバル30」(G30) 関連で来日した留学生に対して、修士・博士を経てから日本の研究所での研究職に至るまでのキャリアについてインタビューを行った。研究協力者が来日してから現在の研究職に至るまでに、どのようなプロセスを経て、困難をどのように乗り越えたかを複線経路・等至性モデル (TEM) に基づいて分析する。その結果を元に優秀な外国人の獲得や大学における留学生支援および外国人研究者支援の手がかりを考察する。

- No.65 日本語学習者 X が日本に住み続けることを促進・抑制する記号 —X の「深い経験づけ」としての留学経験の分析から—  
小澤伊久美（国際基督教大学教養学部日本語教育課程）・丸山千歌（立教大学異文化コミュニケーション学部）

発表者らは、半年から1年の日本留学を経て母国の大学を卒業し、数年後に日本で職を得てから何年か経過した元留学生4名を対象に、彼らが日本留学・日本語学習体験を、日本・日本語に関わりを持って生きる径路にいか位置づけているか、また、その位置づけがどのように変容しているかを、個人別態度構造分析(内藤、2002)と複線径路・等至性アプローチ(安田・サトウ、2017)を用いて分析してきた(丸山・小澤2019他)。日本語学習や留学体験が、日本との関係を強めるきっかけとなり、現在の生活の基盤となっていること、母国や日本の友人、留学制度、日本社会のありようなど、様々な社会的幫助の存在を明らかにした。本発表では内1名(以下X)について、Xにとって「深い経験づけ」(Lehmann & Valsiner, 2017)だと考えられる2度の留学経験に焦点をあて、何が促進的記号や抑制的記号として働いているかを考察する。

- No.66 街の人の「ことば」に対する意識 —留学生の街の「ことば」を創る試みを通して  
佐野香織（早稲田大学）

本発表は、東京・私立大学の留学生対象日本語選択科目「街のことばを知る、考える、創る」という授業を通して、履修生と関わりのあった「街」の人のことばに対する意識を考察するものである。本授業の履修学生(日本語初級)は、キャンパス近郊に住む者も多く、大学キャンパス内、キャンパス近辺、キャンパスと隣接する商店街で日々を過ごしている。授業は、学生が日常を営む街でことばを知り、ことばを学ぶだけでなく、自分はどのように街のことばに関わるのか、今後自分がどのようなことばの使用者になるのか、どのようにことばを創っていくのか、考える姿勢を養うことを目的としている。本発表では、「街」の人の一人として履修生と関わりのあった商店街の店主へのインタビューを分析、考察を共有したい。

No.67 中国人技能実習生の異文化への対処 ―生活構造の視点から見る心理的变化―  
ウウンダライ（茨城大学人文社会科学研究所）

本研究は、日本の社会問題としても捉えられている技能実習生を対象とした研究である。技能実習生の制度や人権などについては多くの研究がなされてきているが、技能実習生を生活者の視点から研究した例は少ない。本研究では、人々の生活を成り立たせている基本的な骨格とも言える生活構造に着目し、中国からやってきた技能実習生たちが、どのような生活構造の変化を経験し、そこで出会う日本という異文化にどう対処しているのかを参与観察及びインタビューによって明らかにすることを目的とする。本研究では生活構造を、当人をとりまく状況およびその中で比較的安定した行動パターンと定義する。技能実習生たちは、母国と大きく異なる生活構造を体験し、その中で抱いた心理的变化、すなわち違和感や葛藤を避けることはできず、その中でどうにかそれに対処する方策を見だしていることがうかがわれた。

No.68 インバウンド対応を題材とした国際協同学習を通じた社会人基礎力の育成  
杉江聡子（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院）

本研究は、国際協同学習環境のPBL(Intercultural Cooperative Problem-Based Learning)を設計し、観光知識、ガイド会話、地元産の商品紹介・発表の学習活動から成る授業を実践した。評価には社会人基礎力(経産省, 2006)を援用し、混合研究法のアプローチで分析した。事前と事後で社会人基礎力の自己評価をt検定で検定した結果、前に踏み出す力、考え抜く力では有意差が認められ、チームで働く力では認められなかった( $p>0.05$ )。質的には、現地調査手続きの理解や調査能力の向上を実感したことで、IC-PBLが社会人基礎力向上を支持することが明らかとなった。また、複数の活動の共通概念として、外国語運用技能の向上、発音練習の機会、母語話者との交流を通じた外国語指導の機会、話し合いを通じたプレゼンテーション準備があり、異なる活動を組み合わせるデザインの重要性が示唆された。

No.69 高齢透析患者の便秘尺度開発に向けた基礎研究 (第1報)  
石井俊行（兵庫大学看護学部）・田村直美（元姫路獨協大学看護学部看護学科）・白神佐知子（兵庫大学看護学部看護学科）

【目的】便秘症を自覚し通院する施設より緩下剤が処方されている高齢透析患者の腹部痛、残便感など症状等をインタビューにより分析、明らかにすること。

【方法】対象は70歳以上の患者9名、1名30分程度のインタビューを実施、ICレコーダーに録音し会話分析の手法を用いて分析した。【倫理的配慮】所属施設の生命倫理委員会の承認を得て実施した。(姫獨大137)

【結果】1.属性：女性5名、男性4名、平均年齢は77.7歳、平均透析歴は88ヶ月。2.排便回数：毎日排便がある=4名、2日に1回排便がある=4名、3日~4日毎に排便がある1名。3.腹部症状：強い腹痛・残便感などは全員が体験していた。体重増加率が大きい場合に緩下剤の服薬を積極的に行っていた。

【考察】便秘に関連する腹部症状は全員が体験していたが、毎日または2日に1回排便がみられる場合であっても患者は体重増加率を考慮した緩下剤服薬による対処法を実施していた。

No.70 臨床心理士による小児がん患児の社会復帰を見据えた心理社会的支援  
杉田理緒（お茶の水女子大学生生活科学部）・山田哲子（立教大学現代心理学部）

医療技術の向上により、小児がんに罹患した子どもが社会復帰することが増え（尾形他，2006），小児がん経験者が治療後に抱える困難は身体的機能から心理社会的機能へと変化している（船木，2011）。そこで本研究は、今後さらに重要となる小児がん患児への支援を検討するべく、“臨床心理士は入院してきた患児と出会ってから退院後までの間に、患児の社会復帰を見据えてどのような心理社会的な支援を行っているか”のプロセスを明らかにすることを目的とした。小児科病棟に勤務する臨床心理士3名にインタビューを行い、複線径路・等至性アプローチ(TEA)(サトウ，2009)を用いて分析を行った。その結果【患児の入院】【病名告知の選択】【周囲への説明】【患児の退院】【復学の選択】【長期フォローアップでの再会】という径路をたどって等至点に到着し、臨床心理士が患児と関わる際に持つ意識には〈臨床心理士は黒子である〉や〈主体的に生きてほしい〉などがあることが分かった。

No.71 看護学生が用いる学習アプローチの探求  
川元美津子（安田女子大学看護学部看護学科）・高瀬美由紀（安田女子大学看護学部看護学科）・二井谷真由美（広島大学大学院医歯薬保健学研究院）・今井多樹子（安田女子大学看護学部看護学科）・岡田麻里（県立広島大学保健福祉学部看護学科）

看護学生の深層的学習アプローチ方略を探求することを目的とし、A県内の3つの看護系大学に所属する2～4年次生23名を対象に質問紙調査と半構造的面接法を実施した。質問紙は、Approaches to Studying Inventory 邦訳版を使用した。面接内容は逐語録に起こし質的帰納的分析法を用いた。実施にあたっては所属大学の倫理審査委員会の承認を受けた。結果、対象学生は表層的学習アプローチ(M=3.23, SD=0.76)よりも、深層的学習アプローチ(M=4.04, SD=0.61)の方を主に活用していた。深層的学習アプローチに伴う学習方略について分析した結果、『授業に集中する』『幅広く調べる』『時間外学習を行なう』『学習方略を工夫する』の4カテゴリーと、11のサブカテゴリーから構成された。その内容から、学生は学習量を補う行動や、意識的に集中力を維持する、さらに掘り下げて考えるなどの探求的学習行動、学習方法やスケジュール工夫、仲間との学習を取り入れるなどの行動により学習を深めていた。

No.72 社会人看護学生の臨地実習における学修過程の解明 一複線径路等至性アプローチを試みて一  
伊東美智子（神戸常盤大学）

【目的】社会人経験後に看護学校に入学した学生の、臨地実習における学びの過程を、当事者からの語りにより明らかにし、必要な学習支援を見出す。【研究方法】対象：現役の社会人学生9名と卒後4年未満の社会人経験後に看護師になった人9名。半構造化面接項目：基本項目以外に、①看護師を目指した動機、②臨地実習中に、過去の経験がプラスに働いたこと。③過去の経験がマイナスに働いたこと。④臨地実習指導者や教員の関わり。分析：質的研究法の複線径路・等至性アプローチ(TEA)を用いた。研究実施は本学倫理委員会審査通過後である。【結果・考察】1)【子育て経験】【コミュニケーション能力】【関係性作り】が②と③の両方で見られ、いずれになるかは協力者の過去の状況が影響した。2)③が葛藤を招くが、【内省】により【看護者らしい『ふるまい』を獲得】していった。3)④は、【教員からの内省支援】と【継続した見守り】の重要性が見出された。

**No.73 治療拒否のある人を一人の「人」として理解して向き合い続けること**  
村上満子（沖縄県立看護大学）

S氏は60歳代の女性、統合失調症と診断され22歳から入退院を繰り返し、在院11年となる。未婚の混血児として生まれ、2歳で母親が死去。養女として育てられるが、結婚を反対されて上京。その後、発症して帰郷する。薬物療法による著しい改善は見られず、病識も乏しい。幻覚妄想があり無為自閉で気難しい。リウマチによりADL要介助で車椅子を使用。糖尿病を併発し、うっ滞性皮膚炎を繰り返していた。治療拒否があり、信頼関係構築が難しく、多くのスタッフが陰性感情をもっていた。対応に苦慮しつつも積極的にかかわることでS氏に変化がみられた。記録内容と最もよい関係にあったK看護師のインタビューデータを質的に分析した結果、S氏が変わるきっかけとなった看護実践のポイントは、一人の「人」としてS氏と向き合い続けることであったと考えられる。本研究は大学倫理審査委員会（承認番号170414）と協力施設理事長の承認を受けて実施した。

**No.74 看護学生の学習意欲を阻害する教育者側の要因：臨地実習に焦点をあてて**  
今井多樹子（安田女子大学看護学部看護学科）・高瀬美由紀（安田女子大学看護学部看護学科）・二井谷真由美（広島大学大学院医歯薬保健学研究院）・岡田麻里（県立広島大学保健福祉学部看護学科）

看護学生の学習意欲を阻害する教育者側の要因を、臨地実習に焦点をあてて検討した。本研究は半構造化面接法を基にしたKJ法による質的記述的研究であり、看護系大学（3箇所）に所属する2～4年次生23名を対象に個別面接を実施した。なお、本研究は安田女子大学倫理審査委員会をはじめ、延べ3箇所の大学の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。その結果、精選した23枚のラベルは3段階の統合を経て7個の島に収束した。学生は【短期間に対応が迫られる多重課題】と【教員・看護職者の指導不足】の狭間で、【看護過程展開の障壁】を土台に【先の見通しが立たない実習展開】が生み出される構図が示された。さらに【看護過程展開の障壁】は【教員・看護職者の学生に対する否定的な態度】【既習内容（講義・演習）と乖離した実習内容】【教員間で異なる教育・指導体制】によって一層複雑化し、学生の学習意欲を阻害する主要因子であることが浮かび上がった。

**No.75 学生のグループワークにおける「話さない」参加のあり方**  
駒崎俊剛（東京医療保健大学医療保健学部）

2014年3月に学生4名のグループワークの参加度についてビデオデータを観察法により学習者のグループワークへの参加度に焦点をあてて分析した。このグループワークは、25分間実施され、そのうちの10分間は、事前学習を順番に発表し、その後、15分でグループの見解をまとめた。本研究では、このグループワーク中に見られた、ある参加者が、かれ自身の発言順番以外は、全く話さないという現象を参加者同士のインタラクションに焦点をあてて、発話とジェスチャーの関係から分析した。

本研究の実施にあたり、協力者の学生から研究開始前・開始後においても研究協力の取りやめを希望した際には、いつでも中断・辞退できること、および研究協力の中断により何ら不利益を被ることがないことや研究協力の中断・辞退手続きも研究同意書に記載・説明し、同意書を取得した。また、所属先の「ヒトに関する研究倫理審査」を申請し受審済みである。（受付番号教26-37）

No.76 重症心身障害児の母親が子どもの生きる道を支える語り – 困難な時代を乗り越えてきた道のり –

田村美子 (安田女子大学看護学部)・藤堂美由紀 (安田女子大学看護学部)・木下八重子 (安田女子大学看護学部)・船津守久 (安田女子大学心理学部)・久木原博子 (福岡大学医学部)・沖西紀代子 (広島県立大学保健福祉学部)

本研究は、重症心身障害児の母親が困難を乗り越えながら子育てしてきた道のりを明らかにすることを目的とした。重症心身障害児の母親5名にフォーカス・グループインタビューを実施した。安田女子大学倫理審査委員会の承認(2016M084)を得た後、対象者に個人情報保護について文書および口頭で説明し同意を得た。母親の平均年齢は、59.4歳 (SD11.26)、子どもの平均年齢は、29.8歳 (SD11.76)で、脳性麻痺4名、化膿性髄膜炎後遺症1名であった。インタビューの所要時間68分で逐語録をもとに内容を分析した結果、「逃れられない罪悪感」「夢にも思わない人生」「行き場のない子ども」「何をしても空振り」「育ててみせるわが子」「気持ちの切り替え」「障害を受け入れ断ち切る」「乗り越えようとする気持ち」であった。2012年に障害者自立支援法が児童福祉法に一元化され、重症心身障害児の通園事業が法定化された。重症心身障害児の母親は、法的な支援制度が十分ない時代に子育てをしており、人生に絶望しどん底を体験し、子どもの生きる道を切り開き現在まで歩んでいた。

No.77 特別養子縁組家庭を対象としたペアレント・トレーニングと評価のためのインタビュー調査の経験

古川恵美 (関西福祉大学看護学部)

本研究は、発達障害や発達障害の特性のある子どもを育てる特別養子縁組成立後の家庭を対象としたペアレント・トレーニング (PT) のプログラムを開発するため、日本ペアレントトレーニング研究会の基本プラットホームでの実践後の評価を養親へのインタビュー調査から検討するものである。対象者と子どもとの縁組前から関わりをもち現在も家族を支援し続けているソーシャルワーカー (SW) から紹介を受けた、就学前の子どもを養育している5家族8人のグループで全7回のPTを実施した。何が対象者をPTに向かわせたのかという問いに対し、同じ立場の人なので安心して話ができたと、担当SWが「しんどい子育て」を気にかけてくれているという嬉しさをまず語った。SWの経験値をPTに活かせるようインタビュー方法や分析方法の検討が必要である。本研究はJSPS科研費JP18H01001の助成を受けた。

No.78 「歩く」に「添う」看護実践がうまれる -現象学的看護研究による記述-  
齋藤貴子 (日本赤十字秋田看護大学)

整形外科病棟での看護実践を記述することを目的としてフィールドワークを行った。運動器の障害がある患者と看護師は、ケアする者として分けられ、看護師がケアする者としてケアされる者である患者に一方的にケアしているのではなく、患者によって看護師が動いてしまっていることを現象学的看護研究で分析した。運動器領域で歩いている患者を看護師が支えるのか、歩いている患者について行き見守るのか、また本発表のように「寄り」「添う」のか。看護師は判断した結果のもとに援助方法を選択しているのではなく、患者の「歩く」姿を見かけるや否や看護師の身体が「寄って」いってしまい患者の歩行に「添う」ことが起こった。患者の「歩く」に看護師が「添う」ことにより、患者の状況に応じた看護実践の意味がうまれていた。本研究は所属施設の研究安全倫理委員会の承認を得てから実施している。

- No.79 メンタルヘルス不調による離職経験をもつ看護師の価値変容プロセス -分岐点における発生の三層モデルを用いた分析を試みて-  
中本明世 (甲南女子大学看護リハビリテーション学部)・片山美穂 (こまつ看護学校)・川村みどり (石川県立看護大学看護学部)・森岡広美 (大阪青山大学看護学部)・川口めぐみ (福井大学医学部看護学科)

本研究は、先行研究「メンタルヘルス不調による離職経験をもつ看護師のプロセス」において TEM (複線径路等至性モデリング) により見出された分岐点に着目し、分岐点における価値変容プロセスを発生の三層モデル (TLMG) で明らかにすることを目的とした。対象は離職経験をもつ看護師 2 名である。対象者は、離職後の「何もしていない焦りと不安を抱え葛藤する」という分岐点で記号が発生し、自己への意味づけや仕事への向き合い方に対する価値変容が起こり (内在化)、看護職へ本格的に復帰していた (外在化)。その後、「看護師としての自分を立て直す」という分岐点で記号が発生し、自己のありようや看護職の役割に対する価値変容が起こり (内在化)、「見通しをもって看護師を続ける」という等至点に至っていた (外在化)。2つの分岐点における価値変容プロセスを詳細に表すことで、類似点・相違点が見出され類型化に向けた示唆を得ることができた。

- No.80 看護学領域における「健康」「病い」に関する概念の検討 一慢性の病い経験を捉える新しい概念生成に向けた予備研究  
細野知子 (日本赤十字看護大学)・福井里美 (首都大学東京)・菊池麻由美 (東邦大学)

医療の進歩により多くの疾患が慢性化し、“治癒”や“病状コントロールの良否”という医療上の管理的な観点だけでは捉えられなくなった現代の病い経験がある。我々は、そうした慢性の病いを生きる人々に、“治らない”疾患であっても、または、“コントロールの悪い病状”であっても苦悩するだけでなくいきいきと暮らす姿を、時にみてとる。筆者らはそうした病い経験を捉える新しい概念を生成する現象学的研究に、医師・哲学者・社会学者と共に取り組んでいるが、その手続きとして既存の概念を検討する必要がある。

本稿の目的は、筆者らが身を置く看護学領域での「健康」「病い」「老い」「障害」等の概念を通覧し、従来の看護学がいかに慢性の病い経験を捉えてきたのかを明らかにすることである。その結果を通じて看護学での見方では盲点となりかねないところを考察し、現代における慢性の病い経験を捉える新たな概念生成に向けた基盤をつくることを目指す。

- No.81 成人慢性期看護学実習の体験プロセスの変遷と学び  
横山直子 (姫路獨協大学看護学部)・二十軒温美 (姫路獨協大学看護学部)

本研究は、看護系大学の 3 年生 1 名の成人慢性期看護学実習の体験を実習記録を基にプロセスを TEM 図化し、学生とともに実習体験を振り返りどのような学びを深めつつ実習を体験しているのか探索することを目的とした。

結果、対象学生は最初は病棟の情報や援助の内容に戸惑っていたものの、病棟の看護師や教員の援助方法を真似たり、自己学習を行うことで実習初期の緊張より患者との人間関係を築いたりケアに集中するようになった。最終週では、自分の看護師としての役割を自覚し、自分なりに実習の成果をまとめることで目標 (自己目標と実習目標) の達成につながった。

No.82 「患者との別れ」からの心理的な経過に関する検討 ―若手看護師を対象として―  
高橋あかね（淑徳大学大学院総合福祉研究科）

我々の日常生活には、重要なヒトやモノとの別れが数多く存在する。なかでも医療や看護の現場は、他者の死を身近に経験する可能性が高い領域である。本研究では、患者の死に出会う機会の多い看護師の心理的な経過について、その他の別れとの比較からその特徴を明らかにすることを目的とした。対象は「患者との別れ」を経験した20代の女性看護師1名（看護師としての経験3年）で、インタビューにより収集されたデータについてGTAによる分析を行った。その結果、発表者がこれまでに報告したその他の別れとの比較において、若手看護師では、「患者の死への悲嘆」に加え、「患者との関わりでケアへのやりがい」を抱いていた。これは、「生死が揺らぐ患者と家族を労うケアの実行が役目」という職業役割と、「人は生かされている」という死生観の発見に繋がる。一方で「死への葛藤解消の困難さ」も示され、若手看護師が自身の体験を複雑に解釈していると考えられた。

No.83 身体的行為のガイドとしての環境に接続された身振り ―身体-環境関係の相互行為的利用  
山本敦（早稲田大学大学院人間科学研究科）・門田圭祐（早稲田大学大学院人間科学研究科）・古山宣洋（早稲田大学人間科学学術院）

環境に接続された身振り（environmentally coupled gesture：以下 ECG）とは、それ単体では十全に意味が理解できず、それが組み合わされる対象との関係の中でのみ理解可能になる身振りのことである。ECGには多くの場合発話が共起し、それによって組み合わせられる対象に関する想像を伝えたり、その対象を概念的に記述することで、それが何として知覚され、扱われるべきものかを示す機能をもつ。本発表では、ECGが対象についての理解にかかわるだけでなく、その身体-環境関係が物理的な“照準”となることで、受け手が対象に適切にかかわるやり方それ自体がガイドされるという側面を検討したい。また、これを通して ECG における参与者間の“視点”の配置の問題について考察する。

No.84 ピア・レスポンスにおける逸脱からの復帰に用いられる発話の分析  
石毛順子（国際教養大学）

本研究はピア・レスポンスにおいて、話し合うべきことから逸脱した場合に参加者自身がどのように逸脱から復帰するのか分析することを目的とした。調査は日本語母語話者を対象とした、レポート作成技術を学ぶ授業で実施された。対象者には本研究の目的、参加拒否の権利、匿名性の確保、データの管理について説明し、参加同意を得た。PRはビデオとICレコーダーで記録し、発話プロトコルを作成した。分析の結果、「以上でした。」のように逸脱を中止すると明確に言語化された発話は、自分が逸脱を始めたとき意識している場合のみに行われていた。多くの逸脱からの復帰は、「次行こっか。」のように次に話すべき内容に移行しようと促すことで行われていた。また、「（レポートで扱い、ピア・レスポンスで話すべき内容は）なんか商店街の話だったんだよね」のように話し合うべきだった内容を確認することも、逸脱からの復帰へのサインとなっていた。

No.85 青年期・成人前期に家族を介護するということ ―若年ケアラーの実態と語り―  
渡邊照美（佛教大学教育学部）

超高齢化が進み、介護の問題は、高齢者が高齢者を介護する「老老介護」や認知症の方が認知症の方を介護する「認認介護」といった言葉で語られ、家族介護は人生後半期の問題として位置づけられてきた。しかし、近年、一般的に保護されケアされる対象と考えられている18歳未満の子どもが大人並みのケア役割を担っている「ヤングケアラー」の存在に注目が集まっている。

本研究では、10代から30代の若年ケアラーに着目し、質的量的両面からの分析により、若年ケアラーの実態を明らかにすることを目的とする。現在の「ヤングケアラー」の研究成果では、ヤングケアラーの危機的側面が強調されているが、生涯発達の視点に立つと、ヤングケアラー、若年ケアラーの経験が人生において否定的な意味をもたらすだけでなく、肯定的な意味ももたらすのではないかと考える。若年ケアラーの語りを分析し、その結果を報告する。

No.86 ゲームへの依存とそこからの回復プロセスの検討 ―ライフラインを用いたインタビュー調査―  
古賀佳樹（中京大学大学院 心理学研究科）・川島大輔（中京大学心理学部）

近年ゲームの過剰使用に関する問題が注目されてきている。国内外で研究の蓄積がされてきているほか、DSM-5 や ICD-11 で“ゲーム障害”が指摘されるなど、ゲームへの依存を病理として扱う動きがある。しかし、先行研究の多くはゲーム依存の関連要因を検討した質問紙調査がほとんどで、ゲーム依存がどのようなプロセスで進むのか詳細に検討したものはほとんどない。本研究では、ゲーム依存経験者1名（ゲーム使用の問題で診断を受け、現在は社会復帰している者）に対して半構造化面接によるインタビュー調査を行った。調査はまず対象者に2種類のライフライン（1. ゲームとの関りについて、2. メンタルヘルスについて）を作成してもらい、それをもとにインタビューを実施した。分析の結果、「ゲームの楽しみ方の変化」、「周囲との関わり」などの視点からプロセスを明らかにした。

No.87 （発表取り消し）

- No.88 産後うつ・ボンディング障害へのリスク要因に関する検討 ―妊娠期から周産期の母親の語りに着目して―  
福田律子（名古屋大学教育発達科学研究科）・中野まみ（名古屋大学教育発達科学研究科）・金子一史（名古屋大学心の発達支援研究実践センター）

近年、乳幼児虐待や産後の母親の自殺は社会的問題となっており、それらのリスクがある母子の早期発見や予防的介入を行うことは早急の課題である。そこで本研究では、妊娠期から出産後の母親のさまざまな状況が、産後うつや子どもとの情緒的な絆を感じられないボンディング障害にどういった影響を与えうるのかを目的としてインタビュー調査を行った。方法は、母親を対象に、妊娠初期・妊娠後期・出産後1か月・6か月時点で、自身の体の変化や社会的資源、子どもへの思いなどに関してインタビュー調査を縦断的に行った。本発表では、現時点でのインタビューデータを基に、各時期の母親のどのような気持ちや状況が、産後うつやボンディングに影響を与えるのか検討した。結果として、「望まない妊娠」「育児への不安」「児の性別」などがリスクを高める要因となりうる語りの内容が見出された。なお、本研究は名古屋大学研究倫理委員会の承認を得ている。

- No.89 ビジュアル・ファシリテーションのカウンセリングへの導入と効果（3）～ライフストーリーにおける自己イメージの変化～  
井上孝代（明治学院大学）・いとうたけひこ（和光大学現代人間学部）

ビジュアル・ファシリテーション（以下：VF）は、可視化による場作りと思考促進の仕組みのことである。堀・加藤(2006)は、グラフィック・ファシリテーションの技法の特長として6点を指摘している。「見える化」することで、「考える場」を躍進させる VF は、議論、対話、共創、傾聴、共感の場として変革をもたらすことが期待される。また、ライフストーリーインタビューの効果について Amia Lieblich は、①シェアすることで癒やされ心理的状況の改善が得られること、②未来への洞察が得られる、という2点を上げている。そこで、本研究では、短大卒業後の進路選択のコンフリクトを抱える事例をもとに人型シールと吹き出しシールを用いて三項関係（やまだ）のもとでのコンフリクト解決のカウンセリングを行った。このような事例において、VFを導入することの有効性を検討する。©本研究は JSPS 科研費 19K03295 の助成を受けた。

- No.90 カウンセラーの自己開示をクライアントが期待する理由 ―フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査―  
鈴木孝（大阪大学大学院人間科学研究科）・谷晴加（大阪大学大学院人間科学研究科）・佐々木淳（大阪大学大学院人間科学研究科）

近年、カウンセラーの自己開示によってカウンセリングの治療関係が形成されると指摘されている（Knox et al.,1997）。また、クライアントはカウンセラーの自己開示を強く期待している可能性が示されている（鈴木・佐々木, 2018）。しかし、クライアントがカウンセラーの自己開示を期待する詳細な理由は検討されていない。そこで本研究ではフォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査を実施した。大学生・大学院生8名を2組のグループに分け、(1)カウンセラーから話してほしい場面、(2)カウンセラーから話してほしい内容、および(1)(2)の回答に至った理由を尋ねた。その結果、クライアントがカウンセラーの自己開示を期待する理由は、(i)カウンセリング初期に話しやすい雰囲気を得るため、(ii)クライアントが悩みで煮詰まった状況から視野を広げるためであった。一方で、カウンセラーの自己開示による否定的な効果を懸念し、傾聴を期待する思いが併存することも示された。

No.91 死別経験のある大学生における故人との関係性の変化 –事例検討  
松島岬紀（中京大学大学院心理学研究科）・川島大輔（中京大学心理学部）

青年において親しい他者との死別は珍しいことではなく、米国の研究では2年以内に身近な人との死別を経験した学生は約4割であった。遺された者の心の内では故人との継続する関係性が存在することが明らかにされているが、死別経験のある青年がどのように故人との絆を継続するのかを詳細に検討した研究蓄積は少ない。そこで本研究では、青年のグリーフワークにおける心理的過程を明らかにするために、ナラティブワーク「故人との関係イメージを絵に描く」（川島、2016）にそって「過去・現在・未来における故人とあなたとの関係」を3枚の絵として描くよう求め、半構造化面接を行った。調査協力者は父親を亡くした20歳の男子大学生であった。その結果、父親の思い出の地巡りを通して故人の生きた歴史を探訪することで、死別の意味を再構成し、日常生活の中で故人との関係性を継続していることが示唆された。しかし、関係性は過去から未来にかけて変化していた。

No.92 自傷行為のエスカレーションの過程 –自己切創者の語りの質的分析–  
新井素子（東京大学大学院教育学研究科）

自傷行為の繰り返しにより耐性が獲得され、効果を実感するために行為がエスカレートして重篤な傷を負うことがあるとされているが（松本、2015）、その具体的な経過については明らかにされていない。自傷行為は自殺の予兆となり得るとされており（Tuisku et al., 2014）、エスカレーションの過程を知ることは、自傷行為や自殺の予防のために重要と思われる。そこで本研究では、自己切創者4名の語りをTEMで分析することにより、自傷行為のエスカレーションの過程を具体的に明らかにすることとした。分析の結果、エスカレーションには、耐性の獲得に伴い頻度を増やしたり重篤な行為に移行したりする過程、傷の深さや数を自分のイメージに合わせるために何度も切り直す過程、他者への援助要請のために行為が激化する過程があることが分かった。最後の点につき、援助要請の意図が弱まると、他者から傷を隠すために、見えにくい場所を選んで切るようになるという過程があると分かった。

No.93 障がい者支援施設における書道教室のアクションリサーチ：場に変化をもたらす「内部者-兼-外部者」の重要性  
河合直樹（札幌学院大学人文学部人間科学科）

本研究は、2018年5月以降、札幌市内の自立生活訓練事業所にて、知的障がいをもつ青年（以下「学生」と表記する）を対象とした書道教室を継続開催するアクションリサーチである。同年9月より、学生が頻繁に利用する惣菜店を営む女性が参加するようになり、場に変化が生じた。学生は、自分の取り組みだけでなく、他の参加者に対しても積極的に関心を向けるようになった。他方、女性は、学生が楽しむ姿をあたたく見守りながら、書道を通じた学生との交流に大きな喜びを感じており、ときに周囲が驚くほど活動的な様子を見せるようになった。学生にとって、その女性は、外部者（施設の学生ではない大人）でありつつ、内部者（顔なじみの惣菜店店主）でもある。自分の率直な思いを込めて互いに書線を引き合う共同行為において、その「内部者-兼-外部者」の存在が、自身と他者双方に対して、新たな関係性を構築し、生活の充実感を得ることを促す可能性を検討する。

No.94 音楽療法のエスノメソドロロジーにむけて——質的研究の分析を中心に  
吉川侑輝（慶應義塾大学大学院社会学研究科）・河村裕樹（大東文化大学）

音楽療法家たちの専門性は、非専門家からばかりでなく、その近くで活動する他の専門家たちからさえも、必ずしも正確には理解されていないことがある。こうした状況が解消されることで、音楽療法が他専門家との協働のもとでより効率よく実施されたり、音楽療法の効果などに関心をもつ量的研究が進展したりする可能性がある。以上のことが示唆するのは、音楽療法家たちの日常実践を探求するための質的研究の必要性である。そこで報告者たちは、いくつかの質的な音楽療法研究を分析する。結果として、既存の研究が、音楽療法研究者たちの理論的関心などにそくして進められていることが明らかとなる。しかしながら、音楽療法家たちの日常実践を理解するためには、音楽療法家たちの実践的関心に根ざした分析を進めていく必要があるだろう。こうした観察をふまえ報告者たちは、音楽療法のエスノメソドロロジーという研究方針の有効性を主張する。

No.95 教育領域における当事者研究を応用した支援モデルの検討 —発達障害概念を変革するためのアプローチの試案—

北村篤司（昭和音楽大学短期大学部）・川崎隆（別府大学文学部）・金田一賢顕（秀山会白峰クリニック）

教育領域における特別支援では、発達障害をその子が持つ特性と捉え、それに応じた教育や支援を行うという発想が多く見られる。こうした枠組みは支援の対象が明確でわかりやすい反面、①本人が支援を受ける対象として特別視されやすい、②発達障害のある子と周囲の関係に働きかけにくい、といった課題があると思われる。

べてるの家で行われてきた当事者研究の取り組みは、「保護・管理される」医学モデルの障害概念を、当事者が自助自立的に障害と共生するものへと変革させた。教育領域でも、当事者研究の発想を活用することで、当事者が自らを研究し周囲との相互理解を深めていく文脈を作り出し、障害概念を変革していくことが期待される。本発表では、当事者研究に関する先行研究や実践報告について鍵となる要素や実践のバリエーション等の整理を行い、教育領域へ当事者研究を導入する際の困難や課題を明らかにした上で、実現可能なモデルの試案を検討する。

No.96 セルフヘルプ・グループでの回復物語に使われた言葉の分析 —機関誌の体験記分析を通じて—

三好真人（比治山大学現代文化学部）

Rappaport (1993) はセルフヘルプ・グループをナラティブのコミュニティであると言及し、「共同体の物語」を個人が吸収することの意味を提唱した。一方、Borkman (1990) は、回復の物語はグループに最初から存在することはなく、多くの体験が蓄積されることで構築されるとしている。そこでグループが成熟するにつれて、どのような言葉が物語に用いられ、活動をつなげてきたのかに着目した。活動40年を超えるグループの月刊機関誌に掲載された「体験記」を1980年代から現在まで18年分収集しデータとした。体験記を近9年間とそれ以前の9年間に分割しテキストマイニングの手法で分析した。結果にて、使い続けられてきた言葉と、過去・現在で出現頻度が違う言葉を抽出し、回復の物語の変遷を考察した。

本研究の実施には当該グループ本部の承認を得た。また比治山大学研究倫理委員会の承認を得ている。本研究は公益財団法人メンタルヘルス岡本記念財団平成30年度研究助成金による。

- No.97 障害者のきょうだいが生きる二重のライフストーリーにおける「ドミナントストーリー」の検討  
沖潮（原田）満里子（湘北短期大学）・能智正博（東京大学）・石島照代（東京大学大学院）・横山克貴（東京大学大学院）

原田・能智（2012）では、障害者のきょうだいが、「障害者の兄弟姉妹としてのライフストーリー」と「別々の個人として生きる人生」を重ね合わせながら生きていることを、語り合いに基づき明らかにした。二重のライフストーリーは、常に2つが同等に重なっているわけではなく、時と場合によってどちらか一方が強調されたり、潜まったりと、グラデーションを持ち合わせながら生きられているものである。原田・能智（2012）では、2つのうちきょうだいが生きようと志向するストーリーを「ドミナントストーリー」としているが、この二重のライフストーリーにおける「ドミナントストーリー」の移行、すなわちグラデーションの変容について詳細な検討はなされていない。本研究では、原田・能智（2012）のデータを再分析し、二重のライフストーリーにおける「ドミナントストーリー」の変容について検討することで、二重のライフストーリー概念のより深い理解につなげたい。

- No.98 障害の社会モデルを学ぶワークショップにおけるディスカッションが辿るパターンの検討  
黒田一寿（東京工業高等専門学校一般教育科）

筆者は、高等専門学校において障害の社会モデルを学ぶワークショップ形式の授業を試みている。障害平等研修の一部を参考にプログラムを構成したもので、グループでディスカッションしながら3つの質問に回答していく。参加者の記述を分析したところ、医学モデル寄りであった障害の捉え方が、徐々に社会モデル寄りに変化することが確認できた（日本高専学会、2018）。さらに録音したグループディスカッションの会話からトランスクリプトを作成し分析したところ、参加者の障害を捉える視点が「誰から見た障害か？」という疑問をきっかけに変化していく様子が確認された（日本質的心理学会、2018）。本研究では分析対象グループ数を広げ、このワークショップにおけるディスカッションが辿る経緯のいくつかのパターンを明らかにした。実施にあたっては、参加者に研究同意書を配布し説明したうえで、全員から承諾を得られたグループのみ分析対象とした。

- No.99 地域で暮らす精神障がい者のデイケア施設等から就労継続支援 A 型事業所へ移行する分岐点の検討  
川崎隆（別府大学文学部人間関係学科）

我が国における精神障がい者の地域支援において、精神科デイケアは、医療から地域へとつながるファーストステップと位置付けられている。筆者はこれまで、デイケアから就労継続支援 B 型事業所（以下、B 型）へ移行する際の困難と支援について、精神障がいを患う当事者に行ったインタビューデータを基に TEM 図を作成し、考察を行った。結果として、協力者らの中に B 型に定着した後に就労継続支援 A 型事業所（以下、A 型）等へのさらなる移行を望んでいる者がいること、しかしそれらへつながるパスが不明であることが見いだされた。A 型に至る経路と至らない経路、両者の分岐点を知ることは支援においても重要になると考えられる。本発表では、こうした研究視点から、A 型で働いている人を対象にインタビュー調査を行い、A 型就労に至る TEM 図を作成することを目的とした。作成した TEM 図から新たな視点が導かれ、研究を重ね、TEM 図が充実していくプロセスを示したい。

No.100 自閉症のある幼児の感覚体験－「他」と「自」の世界から－  
勝浦眞仁（桜花学園大学保育学部）

自閉症を中心に、感覚過敏および感覚鈍麻のある幼児のいることが様々に指摘されてきた。一般には、その特性に対応した支援の必要性が言われているが、自閉症のある幼児の体験世界そのものに迫っていった研究は数少ない。そもそも、自閉症幼児にある感覚のアンバランスさは対人関係のどういった面に現れるのだろうか。そこで、本発表の契機となった、ある子ども園での体験をエピソードとして記述し、自閉症のある幼児の感覚体験を検討した。なお、発表にあたり、研究協力者から承諾を得ている。

その結果、幼児の感覚体験に寄り添ってみると、他者・モノといった「他」の世界と、幼児自身の感覚である「自」の世界とが、一体となって混在している面もあれば、過剰な刺激となって、「他」と「自」の世界が切り分けられる端緒になる可能性が見出された。そこから、自閉症のある幼児の感覚を「自」の形成過程から検討することを試みた。

No.101 自閉スペクトラム症の特徴のある夫の妻が周囲の無理解に気付いてから周囲からの否定的まなざしを内在化する過程  
出口奈緒子（筑波大学医学医療系）・朝倉隆司（東京学芸大学）

本研究の目的は、自閉スペクトラム症の特徴（ASC）のある夫の妻が周囲の無理解に気付いてから周囲からの否定的まなざしを内在化するプロセスを明らかにすることである。ASCのある夫の妻15名に対して、40分から2時間程度の1対1の半構造化インタビューを実施した。修正版グランデッドセオリーアプローチによる分析の結果、周囲からの否定的まなざしの内在化は周囲の無理解から始まり、周囲からの否定的まなざしへの気付き、同意、行動化を経て内在化し、ガラスの壁で閉ざされた世界にいるような感覚になる者もいた。否定的まなざしの根源としては、ASCに由来するものと社会規範に由来するものがあった。

一方で、ASCのある夫との日々の生活の過ごし方を模索することを通じて、自分を理解してくれる人との出会いがあり人生に対する前向きな見方や希望が生まれたりすることもあり、一部の妻はそれらの経験を通じて夫との関係性の再形成に至っていた。

No.102 フィンセント・ファン・ゴッホは入院体験をどのようにとらえていたか？－弟テオに宛てた書簡による検討－  
勝見吉彰（県立広島大学保健福祉学部）

画家フィンセント・ファン・ゴッホはその優れた作品で日本においても高い人気を得ているが、弟テオとの関係の特異さや耳切り事件などのエピソードもよく知られている。耳切り事件後にゴッホは数回入院治療を経験し、その期間は計1年数ヶ月にも及び、その間も弟テオとの間で書簡のやり取りが続けられていた。

ゴッホの精神疾患とその創作活動との関連はこれまで数多く論じられているが、入院体験そのものをゴッホ本人がどのように体験して意味づけていたかを論じた研究は少ない。またアルルでの2度の入院とサンレミでの入院とでは入院の経緯等も異なっている。本研究では、それぞれの土地での入院体験に対するゴッホの態度、意味づけのあり方を、弟テオに宛てた書簡を資料として検討した。書簡中の入院生活に触れた記述と病状や疾患そのものをゴッホ自身がどのようにとらえていたかについて触れた記述を分析の対象とした。入院体験や疾患が創作活動に及ぼした影響とその意味について考察した。

No.103 心理専門職の専門性はいかに定義されてきたか 一資格制度における専門性の文献的検討一

松下弓月 (東京大学大学院教育学研究科)・伊森裕平 (東京大学大学院教育学研究科)・上田修司 (東京大学大学院教育学研究科)・堀内多恵 (東京大学大学院教育学研究科)・能智正博 (東京大学)

公認心理師が誕生した現在、心理職には社会のなかで果たす役割のさらなる拡大や、専門家としてのより一層の質の向上がより求められている。これまでの心理職の専門職化の過程では、医学とは異なる独自の援助モデルを掲げられつつも、さまざまな理論的立場が集まったことによる見解の不一致や混乱にも対応しなくてはならなかった。このような心理職の専門職としての専門性を定義する試みは現在においても終わっていない。公認心理師の専門性やその専門業務は臨床心理士のそれとも異なっており、両資格の関係は民間資格から国家資格への単純な移行ではなく、その心理職としての専門性が新たに定義されたものと言える。そこで本研究では、心理職の専門性がこれまでの資格制度のなかでどのように定義されてきたのかについて文献的検討を行うことで、今後の心理職の専門性をめぐる議論の方向性を検討する。

No.104 メタファーによる自己表現と職業的アイデンティティ発達 ーリハビリテーション系学生のワークから

土元哲平 (立命館大学文学研究科)・サトウタツヤ (立命館大学人間科学研究科)

本発表では、メタファーで自己の経験を表現することの意義について考察する。メタファー(暗喩)とは、あるものを別のあるもので喩えることである。例えば「よいリハビリは鯉のぼりである」というメタファーを聞けば「なぜ？」と問いたくなるように、メタファーは語り(ビジュアル・ナラティブ)を喚起する媒介としての機能があると考えられる。発表者はリハビリテーション系学生 167 名を対象とし、「よいリハビリテーション」のメタファーを生成させるワークを実施した。リハビリテーション学校は、総合大学等と比べ、明確な職業決定を持ち入学してくる学生が多いため、いかに専門職への職業的アイデンティティを豊かに発達させていくかが重要な教育課題となるだろう。この観点から、本発表では、学生の生成したメタファーや語りを題材に、自己の経験をメタファーとして表現することが、いかに職業的アイデンティティ発達を促すことができるか考察する。

No.105 単身中高年者における近隣との関わりにくさとは：グループインタビュー調査による分析

村山陽 (東京都健康長寿医療センター研究所)・長谷部雅美 (聖学院大学)・高橋知也 (東京都健康長寿医療センター研究所)・小林江里香 (東京都健康長寿医療センター研究所)

中高年単身世帯の増加を背景に、単身中高年者の社会的孤立が深刻な問題となっている。本研究では、単身中高年者の近隣との関わりにくさの心的要因を明らかにする。2019年3月に都市部在住 50~70 代の単身男性 (5~6 人×2 グループ; G)、単身女性 (1G) と、比較対象の非単身者 (2G) にグループインタビューを行い、質的帰納的に分析した。その結果、「近隣との関わりにくさ」には【嫌悪の返報性】【距離感の維持】【世代・価値観の違い】【関係づくり躊躇】の 4 コアカテゴリ、「近隣との関わりにくさを解決するための工夫」として【見返りを求めない関わり】【共通点の探索】の 2 コアカテゴリが抽出された。その中で、単身者には【関係づくり躊躇】【共通点の探索】が特徴的に認められた。近隣との関わりにくさには、多様な心的側面が複合的に関連しており、その解消には興味・関心の共有による緩やかな関係づくりが重要であることが示唆された。

## No.106 SNS 相談員（LINE 相談員）における葛藤の変容プロセス 堀切大器（ダイヤル・サービス株式会社）

問題 我が国では、平成 30 年から厚生労働省および文部科学省が中心となり、SNS 相談事業が開始された。現在、SNS 相談事業は黎明期にあり、SNS 相談に関する知見の蓄積は中途段階である。本研究の目的は、相談員が実践を通して経験した葛藤や困難感とそれを変化させる要因を明らかにすることである。そして、現状の SNS 相談の知見や課題の暫定的なモデルを提示し、今後の展望および新規相談員への指針を提供する。

方法 14 名の調査協力者に半構造化面接を実施した。分析には M-GTA を用いた。

結果 SNS 相談員の葛藤は①相談者とのインタラクティブにおけるプロセス、②相談員同士のインタラクティブにおけるプロセス、③相談員の専門性と SNS 相談事業の間におけるインタラクティブのプロセスによって構成されていた。各プロセスは相互に影響し合い、獲得された暫定的な知見や相談員が感じる SNS 相談の現状課題へと繋がっていくことが示された。

## No.107 M-GTA を用いた法人営業職における顧客との信頼関係構築プロセスの分析

山崎慎也（富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 コミュニケーション技術研究所）・小堀田良子（富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 テクノロジーデリバリーセンター）・齋藤剛（富士ゼロックス株式会社 研究技術開発本部 コミュニケーション技術研究所）

法人営業職は日々の業務を通じて顧客との信頼関係を構築し、商品・サービスの受注を獲得していると言われている。この信頼関係を構築するための具体的な行動は営業ノウハウとして知られているが、法人営業職がどのような考えに基づいて信頼関係を構築しているかは明らかになっていない。そこで、我々は M-GTA を用いて法人営業職が日々の業務を通じて顧客と信頼関係を構築するプロセスの分析を試みた。ベテラン法人営業職 6 名に対して半構造化インタビューをおこない、信頼関係構築のモデルを作成した。法人営業職の信頼関係構築には繰り返される概念の変化（プロセス）があることがわかり、繰り返しを通じて顧客との信頼を積み重ねていると思われる。またこのプロセスとは別に、常に意識している信頼の喪失防止に寄与する概念があることがわかった。この事から法人営業職はこの 2 つの概念を共存させながら日々の業務を遂行していると思われる。

## No.108 高学歴女性の仕事と育児や家事の鼎立を阻む社会的状況 一うへの式質的分析法を用いて一

加藤望（愛知みずほ短期大学）・中坪史典（広島大学大学院）

本研究の目的は、仕事と育児や家事を担う高学歴女性の困難が、どのような社会的状況から生じているのかを明らかにすることである。本研究は、スマートフォンの無料通話アプリ LINE を通じてデータ収集を行った。研究協力者は、日本に在住する 30 代の大学院卒女性 1 名である。この研究協力者と筆頭研究者によるグループ LINE を作成し、筆頭研究者による話題提供に対して研究協力者が返答する形で対話する。ここで収集したデータはうへの式質的分析法により分析を行った。また、本研究は日本保育学会保育学研究倫理綱領（一般社団法人日本保育学会倫理綱領ガイドブック編集委員会、2010）にのっとって実施した。研究の結果、日本の高学歴女性が仕事と育児や家事を鼎立することを阻む社会的状況について、専業主婦選択肢の存在、バリキャリママロールモデルの不在、男女不平等意識の内在、が明らかになった。これら三つの社会的状況は、女性の仕事と育児や家事の鼎立を阻み、高学歴女性が出産後も働き続けることを不可能にするだけでなく、家庭生活の維持をも困難にしている。

No.109 ブログがなぜ弁護士大量懲戒請求問題に繋がったのか  
大山星馬（青山学院大学社会情報学研究科）

インターネットを介したやりとりは今や我々の日常において不可欠なものとなり、オンライン、オフライン双方のコミュニティへの参加状況とコミュニティに対する意識を「つながり力」という指標で示す総務省の調査(2018)からは、情報通信技術を媒介した人間関係をコミュニティとして捉え、それに共助や社会参加の期待が読み取れる。そして事実として、このような期待に応えるかのようにブログとその掲示板でのやり取りを通じて、2018の4月に日本の司法制度を変革するために全国の弁護士会を相手にして13万件にも及ぶ懲戒請求を行うといった社会運動が生じていた。本研究では、このブログを主な媒体としながら社会運動を行なった人々に着目し、ブログにおけるテキストをベースとしたやりとりをデータとしてディスコース分析を行い、その特徴について検討した。

No.110 若年性認知症者を支えるデイサービス・デイケアに必要な援助の視点の変化の検証  
今井朋実（日本社会事業大学大学院博士後期課程）

介護上の不安感を軽減し、本人や家族が安心して在宅生活に臨んでいくための若年性認知症者を支えるデイサービス・デイケアに必要な援助の視点の変化について、複線経路・等至性モデル(TEM)による分析を行った。若年性認知症の援助の豊富な経験をもつと考えられる施設のサービス提供責任者または管理職に探索的に半構造化インタビュー実施した。対象者は2名である。インタビュー調査内容の全体を逐語化し、分析を行った。Alzheimer's Associationの若年性認知症のCaregivingの3期の分類(Early Stage・Middle Stage・Late Stage Caregiving)を採用し、焦点を当ててインタビューした。調査実施期間は、2015年3月から2019年8月である。ICレコーダーにより録音し、逐語録を作成し、分析を行った。文面と口頭で研究の目的、匿名性の保持、守秘義務の保持、参加の自由、研究の同意への随時撤回可などを説明し、同意を得た。また、ICレコーダーの録音についても同意を得た。日本社会事業大学研究倫理委員会での承認を得ている。

No.111 博物館での「出会い(encountering)」は、日常生活の中でどのように形を変えていくか(2) -来館者の博物館体験を理解する試み-  
坂倉真衣（宮崎国際大学教育学部）・真鍋徹（北九州市立自然史・歴史博物館）

「博物館体験」は、「ある人の心に博物館に行こうという考えが最初に浮かんだその瞬間から、実際の博物館訪問を経て、さらに博物館訪問が記憶の中だけに残っているような時点まで続く旅」(Falk & Dierking1996)と表現されるよう、来館者によって極めて多様なものである。湯浅(2010,2011)の報告等にあるように、「博物館体験」は一般に来館者の長期的な記憶に残りやすいとされる。坂倉・真鍋(2018)では、継続的に調査をしている3組の被験者(いずれも幼児~小学生とその保護者)の日記をもとに、いくつかの展示物との「出会い(encountering)」が、元々の来館者の文脈内にあったものと様々に相互作用し、形を変えながらも日常生活の中に残っていく過程について整理した。本発表では、被験者がその後再び博物館を訪れ、新たな意味が付与される中で、初期の「出会い」がどのように変容していくかについて、引き続き記録をしている日記やヒアリング調査をもとに明らかにする。

No.112 「ありがとうーありがとう連鎖」への志向ーラジオ番組の質問コーナーの分析からー

岸本健太（関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科）

ラジオ番組の質問コーナーにおいて、質問への回答がなされたあと、質問者と回答者、あるいは進行役のアナウンサーの間で、互いに「ありがとう」と感謝しあう場面がよく見られる。ラジオ番組という性質上、質問者だけでなく番組関係者の側にも、例えば「応募してくれてありがとう」のように、相手に感謝すべき理由があると考えられるが、参加者たちはこのやりとりを通してどのような活動を行っているのだろうか。

会話分析の手法を用いた分析から、この現象は、質問への回答・理解の確認と、別れのやりとりの狭間でなされることが分かった。さらに、応答の「ありがとう」が不在の場合、理解の再確認や会話の終了の確認がなされており、「ありがとう」への「ありがとう」の不在は問題として扱われうることも分かった。

本発表ではこうした発話のペアを「ありがとうーありがとう連鎖」と呼び、そこでの参加者たちのふるまいとその志向を詳細に示していく。

# 日本質的心理学会第16回大会準備・実行委員会

大会準備・実行委員長

野村信威（明治学院大学）

大会準備・実行委員（順不同）

サトウタツヤ（立命館大学）

能智正博（東京大学）

いとうたけひこ（和光大学）

尾見康博（山梨大学）

荒川歩（武蔵野美術大学）

綾城初穂（駒沢女子大学）

横山克貴（東京大学大学院）

広告・展示

新曜社

誠信書房

ナカニシヤ出版

ライトストーン

ユサコ

アカデミックソフト

ひつじ書房

北大路書房

風間書房

金子書房

東京図書

日本質的心理学会第16回大会プログラム抄録集

発行日：2019年8月

発行者：日本質的心理学会第16回大会準備・実行委員会

大会事務局：東京都港区白金台1-2-37 明治学院大学心理学部

制作（HP, 印刷物等）(株)コムラ

松嶋秀明 著

## 少年の「問題」／「問題」の少年

逸脱する少年が幸せになるといって

「問題」の少年たちは、「問題」をかかえた少年たちでもある。「荒れた」学校でのフィールドワークとインタビューを通して、少年と教師、教師同士の「関係性」をとらえ、何が彼らの幸せにつながるのかを探る。

四六判並製232頁／2300円＋税

木村優・岸野麻衣 編

## ワードマップ 授業研究

実践を変え、理論を革新する

授業の見方、記録の取り方、授業研究の目的、研究会の組織・運営、授業研究会の内容——授業研究の歴史的背景から考え、実施に伴う手法までを、実際のプロセスとサイクルに即して懇切に解説。小中高の事例付き。

四六判並製288頁／2600円＋税

鈴木光太郎 著

## 謎解きアヴェロンの野生児

19世紀初頭のフランスで、一人の浮浪児が突然野生児としてスポットライトを浴び、その教育の取り組みは本や映画となって世界に広まった。だが、この物語はどこまで真実なのか？ 調べられるに浮かび上がった実像とは？

四六判並製184頁／1800円＋税

能智正博 編集代表

香川・川島・サトウ・柴山・鈴木・藤江 編

## 質的心理学辞典

A5判並製432頁／4800円＋税

香川秀太・有元典文・茂呂雄二 編

## パフォーマンス心理学入門

共生と発達のアート

A5判並製244頁／2400円＋税

中田基昭 編著

## 保育のまなざし

子どもをまるごととらえる現象学の視点

四六判並製224頁／2200円＋税

ゲルダ・サンダース 著／藤澤玲子 訳

## 記憶がなくなるその時まで

認知症になった私の観察ノート

四六判並製336頁／2800円＋税

佐藤公治・長橋 聡 著

## ヴァイゴツキーからドゥルーズを読む

人間精神の生成論

四六判並製312頁／2800円＋税

高田 明 著

## 相互行為の人類学

「心」と「文化」が出会う場所

A5判並製248頁／2800円＋税

平木典子・藤田博康 編

キーワードコレクション

## カウンセリング心理学

A5判並製240頁／2400円＋税

島宗 理 著

## ワードマップ 応用行動分析学

ヒューマンサービスを改善する行動科学

四六判並製352頁／2700円＋税

日本コミュニティ心理学会研究委員会 編

## ワードマップ コミュニティ心理学

実践研究のための方法論

四六判並製360頁／2700円＋税

日本質的心理学会 編

## 質的心理学研究 第18号

特集 ゆるやかなネットワークと越境する対話

——遊び、学び、創造

B5判並製304頁／3300円＋税

やまだようこ 著作集

「ことばが生まれるすじみち」シリーズ全3巻、完結！

## 2 ことばのはじまり——意味と表象

「ことばの前のことば」刊行から三十余年。未刊だった待望の続巻がついに著作集第2巻、3巻として完結。本巻では1歳代前半に焦点をあて、「ことば」が生まれてくるプロセスと身振りの発生プロセスをたどる。A5判上製356頁／3600円＋税

## 3 ものがたりの発生——私のめばえ

第3巻は観察日誌を全面的に読み直し、組み直して、ナラティヴ論の視点から新たに執筆。1歳後半から2歳代に焦点をあてて、「私のめばえ」、「私」という自己ものがたりの発生プロセスを丹念にたどる。A5判上製320頁／3200円＋税

古川亮子 著

## 看護研究のためのNvivo入門

質的研究法、混合研究法を用いた看護研究の膨大なインタビューデータや観察データも、Nvivoを使えば大幅に効率アップ。研究の開始からデータ分析、レポート作成まで、手順と勘所を具体的に懇切に解説。

B5判並製232頁／5200円＋税



株式会社  
**新曜社**

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9 幸保ビル3階  
TEL: 03-3264-4973 (代) FAX: 03-3239-2958 (表示価格は本体価格)  
E-mail: info@shin-yo-sha.co.jp URL: https://www.shin-yo-sha.co.jp



詳しくはこちらへ

## 早わかり混合研究法

J・W・クレスウェル 著／抱井尚子 訳  
定義や手順、基本的スキルなど、重要なポイントがばつと読んでつかめる最適な入門書。 2400円

## 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法

高梨克也 著  
会話を理論的・体系的に説明しようとする人のための入門書。 2400円

## 文系のためのSPSSデータ解析

山際勇一郎・服部環 著  
人文系領域で必要となるデータ解析法を基本から学ぶ。 2700円

## 質的研究のための理論入門

P.プラサド 著  
／箕浦康子 監訳  
◎ポスト実証主義の諸系譜  
考え方、基本的概念、研究事例、そして批判点を明快に解説。 3800円

## 心理統計のためのSPSS操作マニュアル

金谷英俊・磯谷悠子・牧勝弘・天野成昭 著  
◎t検定と分散分析  
操作画面から丁寧に説明。 2500円

## 社会調査のための計量テキスト分析

樋口耕一 著  
◎内容分析の継承と発展を目指して  
データ分析フリーソフトKHCoderの開発者による解説と事例。 2800円

## グラウンデッド・セオリーを構築する(第2版)

キャシー・シャーマズ 著／岡部大祐 監訳  
初版の議論をより詳細に、より丁寧に解説。 予価7000円

## リフレクティヴ

矢原隆行 著  
◎会話についての会話という方法  
まったく新たなコミュニケーション空間の創出方法を導く。 2000円

## テーマティック・アナリシス法

土屋雅子 著  
◎インタビュデータ分析のためのコーディングの基礎  
透明性・厳密性を確保する。 2200円

## 社会関係資本の地域分析

埴淵知哉 編  
社会関係資本を個人ではなく地域の特性として考え、数量化など様々な方法論的問題について考察。 3000円

## 実践的メタ分析入門

岡田 涼・小野寺孝義 編  
◎戦略的・包括的理解のために  
メタ分析の準備から応用研究までを解説。 2800円

## 最強の社会調査入門

前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆 編  
◎これから質的調査をはじめるとの人のために  
社会調査の極意を、気鋭の社会学者たちが伝授。 2600円

## アジアの質的心理学

伊藤哲司・呉宣児・沖潮満里子 編  
◎日韓中台越クオーストック  
近隣のアジアではどのような質的研究が行われているのか。 2500円

## ケアの実践とは何か

西村ユミ・榊原哲也 編著  
◎現象学からの質的研究アプローチ  
広く多様な「ケア」の豊かな営みの諸相を明らかにする。 2800円

## ケアが生まれる場

森明子 編  
◎他者とともに生きる社会のために  
ケアが生まれる状況を、民族的アプローチによって考察する。 3800円

## 大学卒業研究ゼミの質的研究

山田嘉徳 著  
◎先輩・後輩関係がつくる学びの文化  
への状況的学習論からのアプローチ  
学びのモデルを構築する。 4000円

## 心理学・社会科学研究のための構造方程式モデリング

村上隆・行廣隆次 監修  
◎Mplusによる実践 基礎編  
基本原理から丁寧に解説。 3800円

## 職業間距離の計量社会学

林拓也 著  
◎人々の意識からみる職業の多次元構造  
その構造と現象を分析。 6200円

## 公認心理師のための説明実践の心理学

山本博樹 編著  
各領域で公認心理師が期待される説明の質とあり方を提言。 2000円

## 遺伝学の知識と病いの語り

前田泰樹・西村ユミ 著  
◎遺伝性疾患をこえて生きる  
経験の語りに忠実に迫る。 2700円

## 医療システムと情報化

中村努 著  
◎情報技術の受容過程に着目して  
アクターネットワーク理論に基づいて分析する。 3200円

## 生きづらさへの処方箋

小山真紀・相原征代・船越高樹 編  
過保護、性差別、外国人差別、発達障害など「生きづらさ」を学際的に分析し、克服の具体的方策を提示。 2100円

## 心理学実験演習 図表作成マニュアル

安田恭子・林大輔・中村紘子・金谷英俊 他 著  
◎Excel活用のポイント  
日心投稿規定に準拠し解説。 2600円

## 地域と統計

埴淵知哉・村中亮夫 編  
◎調査困難時代のインターネット調査  
統計調査はなぜ困難になったのか？  
様々な論点を検討する。 2600円

# TEM でひろがる社会実装

— ライフの充実を支援する



A5判・上製  
3400円

安田裕子・サトウタツヤ 編著 今やTEMは、質的研究法としてひろく用いられるに至っている。シリーズ第3弾となる本書では、外国語学習および教育、社会人のキャリアデザイン、看護・保健・介護などの支援に焦点をあてた論文に加え、学生相談での応用事例や臨床実践のリフレクションでの活用事例を収録。その汎用性の高さを明らかにし、TEMによる社会貢献の広がりをめざす。序章と終章で改めて基本概念の検討を行い、収録論文の読解を助けるとともに今後の展望を指し示す。



A5判・上製  
3400円

## TEM でわかる人生の径路

— 質的研究の新展開

安田裕子・サトウタツヤ 編著 質的研究に時間の概念を導入し、視覚的に理解を促す試みの集大成。誰もが自身の人生の径路をTEMに描くことができ初学者でも簡単に質的研究用のデータを拾っていくことが可能になる。



A5判・上製  
3000円

## TEM ではじめる質的研究

— 時間とプロセスを扱う研究をめざして

安田裕子・サトウタツヤ 編著 複線径路・等至性モデルを使用して、従来なかった時間の観念を心理学にもたらし。人間の多様性や複雑性を扱うための新しい方法論。臨床心理学分野でも導入が進む画期的手法。

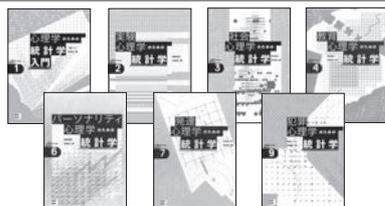
## 心理学のための統計学 [全9巻]

庄島宏二郎編集・各巻共著

心理学の分野別に優先度の高い統計手法を取り上げて解説。各巻の各章は、90分の講義で説明できる内容にて構成。心理学を学ぶ人に必須の統計テキストシリーズ。

- ① 心理学のための統計学入門 (川端一光)
- ② 実験心理学のための統計学 (橋本貴充)
- ③ 社会心理学のための統計学 (清水裕士)
- ④ 教育心理学のための統計学 (熊谷龍一)
- ⑤ 臨床心理学のための統計学 (佐藤寛)
- ⑥ パーソナリティ心理学のための統計学 (尾崎幸謙)
- ⑦ 発達心理学のための統計学 (宇佐美慧)
- ⑧ 消費者心理学のための統計学 (齋藤朗宏)
- ⑨ 犯罪心理学のための統計学 (松田いつみ)

既刊 ① 2100円 / ②-④-⑥-⑧ 各 2600円 / ⑤ 2800円



日本心理学会監修 心理学叢書 12

## 近刊 紛争と和解を考える—集団の心理と行動

日本心理学会 監修・大淵憲一 編 紛争を起し悪化させる集団心理の危うさを解説し、和解と救しへの可能性を探る。後半は旧ユーゴとルワンダの内戦を事例に、紛争と和解の実際を紹介。

日本心理学会監修 心理学叢書 13

## 近刊 アニメーションの心理学(仮)

日本心理学会 監修・横田正夫 編 アニメはなぜ動いているように見えるのだろうか。良い動きと悪い動きの違いは何だろうか。アニメの物語にはどんな特徴があるのだろうか。アニメの謎に、心理学者が挑む。

誠信書房 SEISHIN SHOBO

Tel 03-3946-5666 Fax 03-3945-8880

<http://www.seishinshobo.co.jp/>

@seishinshobo

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-20-6 (価格は税抜)

## 北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

<http://www.kitaohji.com>

## グラフィック・メディスン・マニフェスト

—マンガで医療が変わる— MK. サーウィック他著 小森康永他訳 A4変形・228頁・本体4000円+税 グラフィック・メディスンの中核は、健康と病のストーリーテリングであり、患者の複雑な経験を描き出すことにある。マンガを通して、一般患者という概念に抵抗し、矛盾する視点や経験でもって複数の患者を鮮やかに表現するムーヴメントへの誘い。

## ナラティブ・メディスンの原理と実践

R. シャロン他著 齋藤清二・栗原幸江・齋藤章太郎訳 A5上製・544頁・本体6000円+税 ナラティブ・メディスンは、全ての診療において必要とされる「語ることに聴くこと」から生まれる感情と問主観的関係の重要性を強調する。医療者のための全く新しい教育法の全貌が、今ここに明らかにされる。

## 声の法社会学

西田英一著 A5上製・254頁・本体5000円+税 紛争、問題解決場面や乗り越えの過程で〈声〉はどんな働きをするのか。〈声〉が〈法〉と、身体が規範・文化・制度と、ぶつかり、きしむさまを描こうとしたエスノグラフィカルな考察。声の働き、即ち、本人性、手触り(メタメッセージ)、言葉・物語・意味とのあらい、その記述を試みた苦闘の跡でもある。

## 人間科学のための混合研究法

—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイナー— J. W. クレスウェル・V. L. プラノ クラーク著 大谷順子訳 A5・328頁・本体3300円+税 研究プロセスの各段階において、質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し、各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

## 質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン他著/平山満義監訳 4600円~5600円+税

## 人間科学のための混合研究法

J. W. クレスウェル・V. L. プラノ クラーク著/大谷順子訳 3300円+税

## 教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 2800円+税

## 質的研究用語事典

T. A. シュワント著/伊藤 勇他監訳 3200円+税

## なるほど! 心理学観察法

三浦麻子監修/佐藤 寛編著 2200円+税

## 〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋・好井裕明編著 2800円+税

## 質的データの取り扱い

L. リチャーズ著/大谷順子・大杉卓三訳 3200円+税

## 心理学マニュアル 観察法

中澤 潤・大野木裕明・南 博文編著 1300円+税

## ナラティブ・アプローチの理論から実践まで

G. モンク他編/国重浩一・バーナード訳 2600円+税

質的研究をはじめると決めたら読む本！

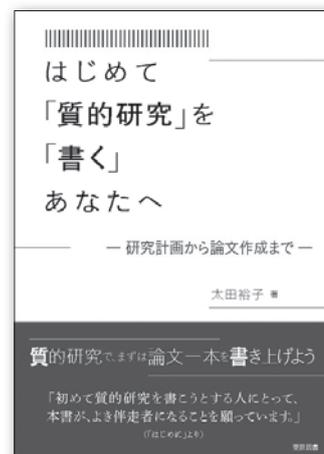
# はじめて「質的研究」を「書く」あなたへ

— 研究計画から論文作成まで —

New

◎太田裕子 著 / A5判 / 本体 2200 円 + 税

本書は、初めて質的研究法を用いて研究を行い、論文を作成しようとする人のために、「質的研究」と「書く」という切り離すことができない活動を、研究プロセスに沿って取り組める構成となっています。第1章から順に読み進み、最終的に一本の論文を書き上げるという経験をすることで、読者は研究が一気に進むことを実感できます。



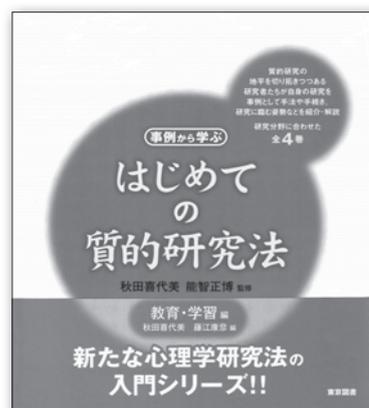
事例から学ぶ質的研究法

# はじめての質的研究法

## [ 教育・学習編 ]

◎秋田喜代美・能智正博 監修 / 秋田喜代美・藤江康彦 編 / B5判変形  
本体 2800 円 + 税

第一線で活躍する研究者たちがそれぞれの貴重な研究事例を紹介する。事例を通して質的研究の「初歩の初歩」から、方法の解説や手続きの紹介、技法、注意点といった「実践法」までを丁寧に教示する。本書は概括的な総論を第I部で、第II部では特徴的な研究事例を多数紹介している。なかでも書籍紹介は必読。



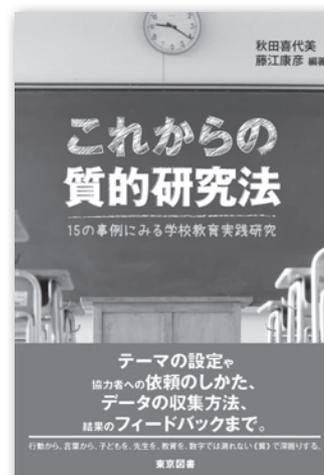
理論と事例でみる質的研究法の必読書

# これからの質的研究法

～15の事例にみる学校教育実践研究～

◎秋田喜代美・藤江康彦 編著 / A5判 / 本体 2800 円 + 税

学校教育の現場で質的研究をするには、しっかりとした方法論を身につける必要がある。本書は、編者による概括的な「理論編」と、協働学習、探求学習、ICTを活用したものなど新たな学びの動向や、教師・学校文化に関する15事例を取り上げた「研究事例編」で構成。わかりやすい解説と、最新の事例と方法を取り上げた質的研究法の必読書。



〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-19  
TEL 03 (3288) 9461 FAX 03 (3288) 9470

東京図書

URL <http://www.tokyo-tosho.co.jp>



心理、教育、福祉、看護の分野において、  
質的研究で論文作成に取り組む方、  
質的研究に関心のある方、「必読の書」

# 「主観性を科学化する」 質的研究法入門

TAEを中心に

末武康弘+諸富祥彦+得丸智子(さと子)+村里忠之 編著

A5判・352頁 本体 3,800円+税

ジェンドリンが開発した質的研究法  
TAE (Thinking At the Edge) を中心に、  
さまざまな「質的研究法」の理論、具体的な手順、  
研究の実践例を提示

- GTA、M-GTA、ナラティブ、TEA、IPA、TAE  
6つの質的研究法の理論、研究の具体的な手順と方法がわかる！
- それぞれの「質的分析法」を「比較」して考えることができる！
- 心理臨床、福祉、教育、看護の各領域におけるTAEの「研究例」が豊富に示されている！

研究実践に生かす、  
「役立つ」知識と理論



# 質的研究法 キーワード

マイケル・ブルア◎フィオナ・ウッド [著]  
上淵 寿 [監訳]

A5判・268頁 本体 3,800円+税

研究において、ある用語や概念を使うとき、その実践的意味が重要となる。質的研究を行うすべての学問分野から62の用語を精選し、その定義・特徴・研究例を解説。それぞれの用語が相互に関連づけられるように工夫され、理解を広げることができる。初学者からベテランにまで役立つ、待望の用語集！

- 主な項目一覧 (50音順)
- アクション・リサーチ / アクセス交渉 / 一般化 / インタビュー / インデックス化 / エスノグラフィ / エスノメソロジー / オーラル・ヒストリー / 会話分析 / キー・インフォーマント / 危険なフィールドワーク / グラウンデッド・セオリー / グループインタビュー / ケース研究 / 研究日誌 / 現象学的方法 / 言説分析 / 公的説明と私的説明 / コンピュータ支援データ分析 / サンプリング / 自己エスノグラフィ / 自然主義 / 質的研究の利用 その他

〒112-0012 東京都文京区大塚3-3-7

**K 金子書房**

☎03(3941)0111(代) FAX03(3941)0163  
URL <http://www.kanekoshobo.co.jp>

## 心理学関係学術図書のご案内

価格は税別。

### 生活習慣形成における幼児の社会情動的発達過程

平野麻衣子著 9000円  
保育の場で、幼児は片付けという生活習慣をどのように形成していくのか。人的・物的環境との相互作用から実証的に捉えたプロセスを、社会情動的発達過程として解明。

### 意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズム

小野田亮介著 8500円  
意見文産出において、反論の想定やそれに対する再反論が欠如する現象(マイサイドバイアス)のメカニズムを実証的に解明し、その克服支援方法について提案する。

### トラウマケアとPTSD予防のためのグループ表現セラピーと語りのちから

井上孝代 いたうたけひこ 福本敬子 エイタン・オレン編著 2500円  
東日本震災における被災者のトラウマケア/PTSD予防のための支援を行ってきたIsraAID及びJISPの活動を通して、グループ表現セラピーと語りのちからの有効性を示す。

### 図式的表現期における子どもの画面構成プロセスの研究

栗山 誠著 8000円  
子どもは絵を描く過程で何を体験し、何が要因で描き続けるのか。視覚的文脈と物語的文脈に注目して分析し、子どもにとっての面白さ(リアリティ)を考察した。

### 5歳児クラスのテーマに基づく話し合い

呂 小耘著 7000円  
発達研究、言語学など複数の知見を参照し、保育所クラスの話し合い場面における発話の特徴および変化を分析。話し合いに参加する意義や発達の連続性などについて検討。

### 青年期から成人期の対人的枠組みと人生の語りに関する縦断的研究

山岸 明子著 8500円  
「人はどのように発達し何がそれを規定するのか」という発達心理学の中核的問題について17-19年の長期縦断研究を行い、質的・量的データによって多面的に検討した。

### 他者との相互作用を通じた幼児の造形表現プロセスの検討

佐川早季子著 7500円  
本書は、保育の場の製作コーナーでの造形表現に焦点をあて、他者やモノとの身体的・視覚的・言語的相互作用を通して幼児が造形表現を行うプロセスを描出している。

### 中学校英語科における教室談話研究

東條 弘子著 8000円  
中学校英語授業ではどのような相互作用がなされているのか。5年間の授業観察と共同研究に基づき、一人の教師による教育実践を、社会文化理論に即し分析をおこなう。

### 成人知的障がい者の「将来の生活場所の選択」に関する研究

山田 哲子著 7500円  
知的障がい者家族の「親亡き後」や「将来の生活」をテーマに、当事者の声に基づいた新しい家族支援の在り方について探求し、実践研究によりその効果を検討した新著。

### 園における3歳児積み木場面の検討

宮田まり子著 5000円  
積み木によって構成配置される物的環境がいかにして幼児間の関係をつなぎ、発達を支援しうるのであるのか。本書は、これまでの知見にはないより詳細な過程と要因を提示する。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34  
TEL 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757

**風間書房**

(URL) <https://www.kazamashobo.co.jp>  
メールアドレス [pub@kazamashobo.co.jp](mailto:pub@kazamashobo.co.jp)

# 質的分析はこれ1つでお任せ!



**START!**

研究の問い

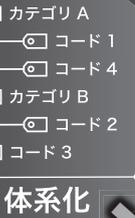
Why? What?

データ収集



データ管理

MAXQDAでデータ管理・  
コーディング・体系化・  
レポート作成



体系化

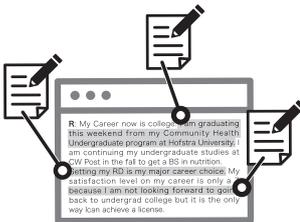
レポート作成



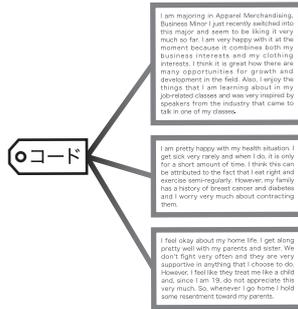
コーディング

**GOAL!**

編集画面では  
様々なデータファイルの  
内容をシームレスに  
**表示・コーディング・  
編集・注釈付け**  
することが可能!



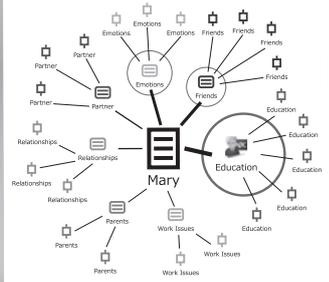
**数クリックで**  
コードを付与した  
セグメントを瞬時に表示



コード同士の関係や  
コードと文書の関係を  
表す表や図を  
**自動で作成**

	コード A	コード B	コード C
コード 1	■	■	■
コード 2	■	■	■
コード 3	■	■	■
コード 4	■	■	■
コード 5	■	■	■
コード 6	■	■	■

コードマップを作成して  
**概念モデルの構築に  
役立つツール**  
(Maxmaps)



日本語メニュー、日本語文書の分析に対応! WindowsとMacで全く同じ機能を提供!

必要な機能に応じて  
3つのエディションから選択

	MAXQDA Standard	MAXQDA Plus	MAXQDA Analytics Pro
GTAや内容分析など様々な質的分析手法に対応	✓	✓	✓
単語の頻度や単語の組み合わせなどの量的テキスト分析(テキストマイニング)が可能	✗	✓	✓
記述統計や推計統計などの統計分析が可能	✗	✗	✓

MAXQDAを14日間無料体験できます。体験版はWebよりお申込みください <https://www.lightstone.co.jp/maxqda/>

開発元



Software - Consult -  
Sozialforschung GmbH

VERBI Software. Consult. Sozialforschung GmbH

正規国内代理店



株式会社 ライトストーン

〒101-0031 東京都千代田区東神田2-5-12 龍角散ビル7F

TEL 03-3864-5211 FAX 03-3865-0050

e-Mail : sales@lightstone.co.jp

<https://www.lightstone.co.jp/maxqda/>



# インタビュー分析・アンケート自由回答の分析には

エヌ ヴィ ボ

# NVIVO

世界150万人以上に愛される  
質的・混合研究支援(QDA)ソフトウェアの決定版!

## NVivoを使うと



ふせんいらすの  
らくらくコーディング

名前	ファイル	リファレンス
概念ノード	0	0
● 環境の変化	0	0
● 漁業	2	4
● 景観	2	6
● 行政の方針	1	1
● 自然環境	2	7
● 水質	3	3
● 土地開発	3	21
● 不動産開発	1	4

①水質 ②

ファイル: インタビューコード/ウィリアム・ジェームズ・12 リファレンスコード: 0.78% カバー

リファレンス: 1 ~ 0.64% カバー

建物があり建て込んでいて田舎の雰囲気があるところが好きです。

リファレンス: 2 ~ 3.54% カバー

海がずっと続いていて海辺に家もなにも建っていない。浜にボートを係留して海の上で一日を過ごして、あまみんなどが好きです。海も海も水がきれい。向こう側の海岸もきれいで何年か前に行ったところがありました。

コーディング箇所から  
元データにすぐ戻れる!

Q.2. ダウン・イースト地区の自然環境との関わり

ヘンリー  
環境、自然環境。あるいはダウン・イースト地区の風景。こういったものに特に価値を置きます。

ウィリアム  
建物があり建て込んでいて田舎の雰囲気があるところが好きです。浜田舎ではありませんけど。海がずっと続いていて海辺に家もなにも建っていない土地が続いていて、そこで浜側にボートを係留して海の上で一日を過ごし、あまみんを見かけることもない。あまみんが好きなところ。海も海も水がとてきれいなところも好きですね。土のきれいな海岸もきれいで何年か前に風景が住民を移住させたとき、自然を元に戻すところがありました。

Q.3. 職業から見たダウン・イースト地区

ヘンリー  
ご自身が不動産関係の仕事をしていることから、ダウン・イースト地区の特殊性について専門的見地からご意見を伺いたいですでしょうか?

データの整理・分類にかかる時間を節約し、  
読み込み・考察・分析する時間を増やします!

### 3つのお得なライセンスをご用意

教育機関用  
ライセンス

学生用  
ライセンス

グループ用  
ライセンス(年間契約)

さらに  
お得

看護研究などでNVivoを活用されている方にインタビューを行いました

詳細はこちら



ユサコ株式会社



NVivo ユサコ

検索

営業グループ E-mail: tokyo-sales@usaco.co.jp

〒106-0044 東京都港区東麻布2-17-12

Tel: 03-3505-3256 Fax: 03-3505-6282 http://www.usaco.co.jp/



ユサコ株式会社は、  
NVivo開発元: QSR Internationalの認定パートナーです。